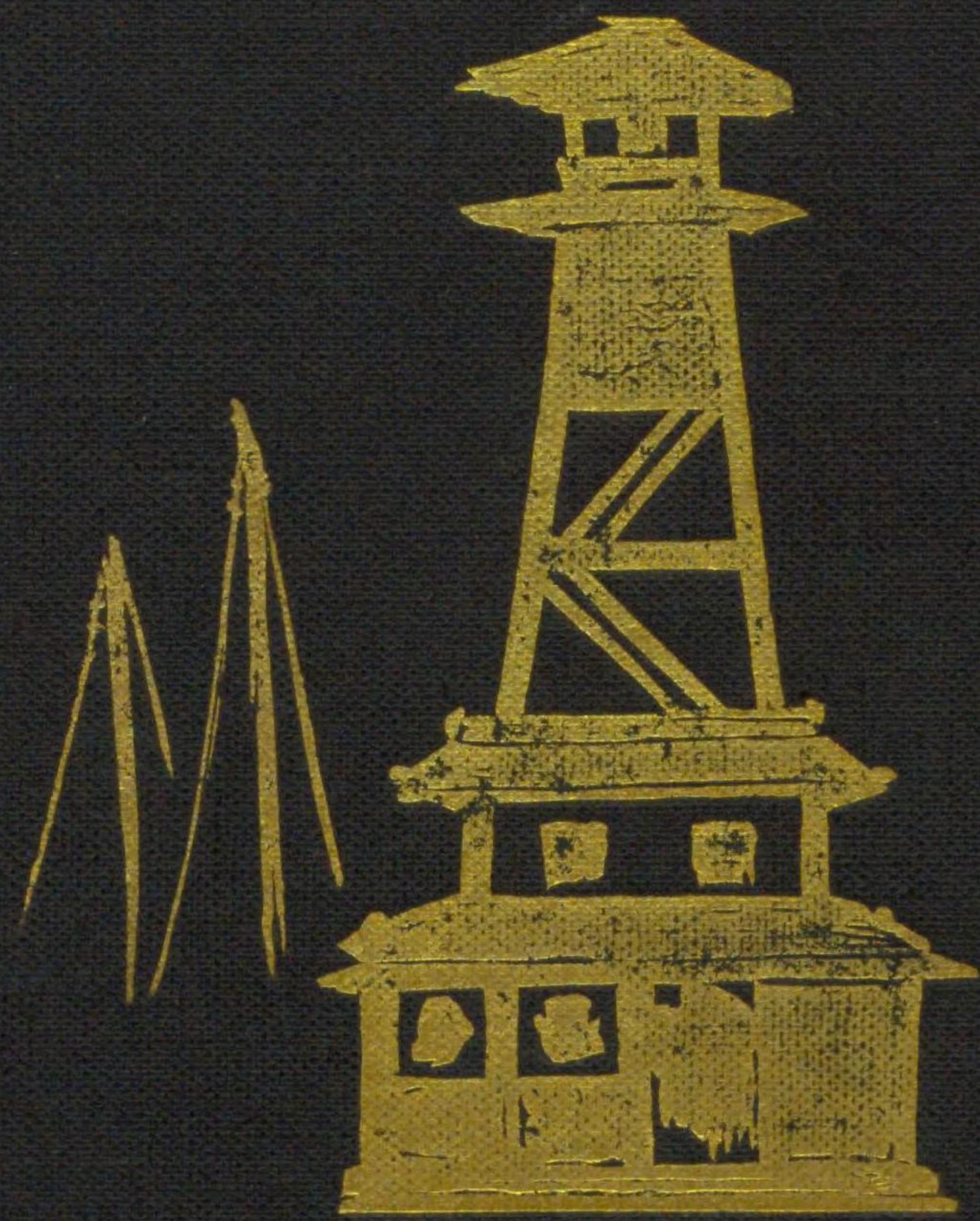


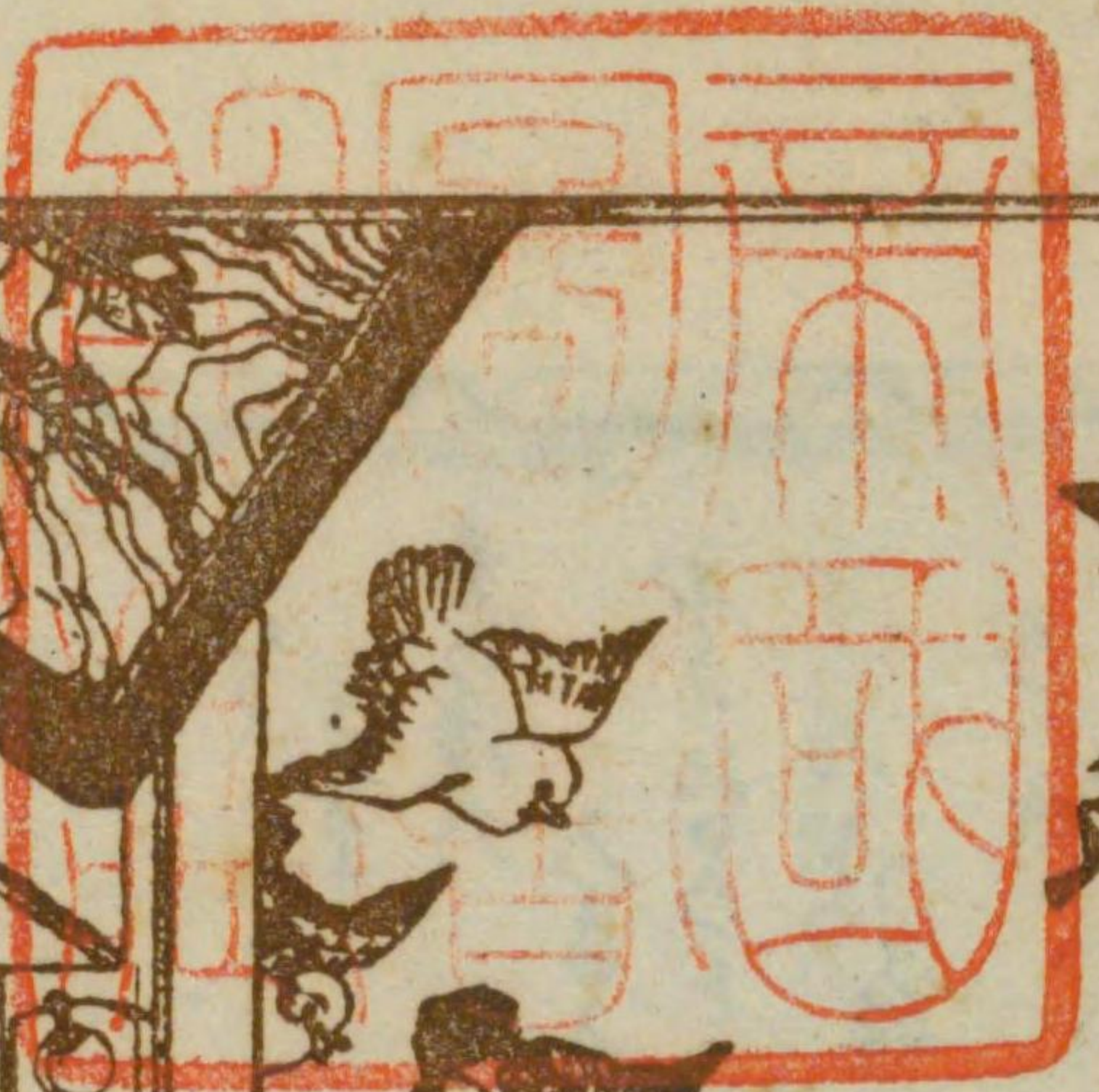
633-6



1200800066929



429



春曉八幡佳年

春曉八幡佳年

為永 春水作
歌川 國直画

保壽堂
公棟



春曉八幡佳年

第一篇 序 辭

婦賀川の水清らば、連遊の酔を洗ふべく。濁らば陸歩の足を洗ふべし。清むもにごるも人心、粹と阿那との奈賀街に、戀の港の入船出船。その情態は、つがひ離れぬ浮寝鳥、別れせはしき明鳥。又夕しほのさしをつき、靡く柳のやうじをつけて、もてるもあればふらるゝもあり。客と娼妓の魂膽を、化粧部屋のあはせ鏡に、寫したる著作家が穿鑿は、洲崎の暗突、木場の陸釣よりも、工夫をこらした新奇妙案、これを觀れば彼連遊もね





むりを覺し、陸歩も又舟にて通はん。實に婦賀川の趣向をつくす清水なりと、看官きそふて求め給はゞ、書肆も忽地富賀岡の惠みあり。標題は名にあふ八幡佳彌、八方に響きわたる高評を、庶幾ものは、作者にかはりて板元のあるじみづから、數言を卷のはじめに述ぶ。

千時天保七年丙申青春

第一篇 卷之一

第一章

淨るり、聊富が岡と申せしは、東にあたりて矢頃よき、戀には粹を通し矢と、南は海の底深く、思ふは千尋千話口舌、北には峨々たる富士聳え、西は川口お客を乗せて、送り迎ひの船のうち、撞てくりやるな八幡鐘よ、可愛男といちやつきは、うまひ仲町じやないかいな。(なにはやの二階の格子から着物を着替ながら、二十歳ばかりの美しき唄女梅吉、向側のさがみやの二階へ向ひ、秀八さんといひつゝ、帯を締めて格子へ顔を出し) 梅、秀八さん、あの子は今に好くなるのう。秀「さうヨ精を出すから頼母しいヨ。梅、清元は誰にならつて居るのだ。秀「ナニ此方へ來てはまだ淨るりを習やアしねへヨ。ありやア宅に居た時、延津多といふ嬢の弟子ださうヨ。梅「ヲヤさうか、節がいゝノウ。それはさうと、おまへ支度はまだかへ。秀「まだゝこれから化粧にかゝるのだ。梅「ヲヤゝゝ夫じやア私はうるたへねへでもよかつたねへ。急ぐといふから、仕掛を着かへたヨ。早くおしな。秀「イエゝゝどうして、今日はモウ思入れ靜にいたします。あな

たはいくらおうろたへ遊ばしても宜うございます。ト、笑ひながらしらしていふ。梅も笑ひながら「梅「フヤ〜」なせへ。私ばかり急ぐもいけないはネ。秀「ハイ〜」御尤もさネ。じれつたいと思し召さふが、今さらツた淨るりを、まるで今日拜見をいたすのだから、どうも氣が進みません。御推量をお願い申ます。梅「アレサ秀さん。後生だから早くしておくれな。氣がせいてならないわ。秀「そう〜」直にのろけるから恐れる。夫だものを、早く往てつまるものか。モウ一返湯へ這入なほさうか、何だか白粉のうつりがわりい様だ。梅「アレサ秀八さん。拜むからヨウ。秀「そんなら以來、夜中に口がかゝつても腹が痛への、脊中がくすぐつてへのと言ずに、直に出るか。フホ、。梅「ア、ほんとうにお前の言ことを聞くからヨウ。ト莞爾笑ふ。秀「今日ばかりおとなしくするが、聞いて呆れらア。ト笑ひながら化粧をするうるはしさ。美人を揃へし中裏に、別て美麗の梅吉、秀八。互に情人の戀中を、あかし合ふたる中のよさ。路次の隔も邪魔となる、その情合は此中へ、はいらぬ人にはなかく〜に、思ひやるさへ難かるべし。梅吉は傍輩に向ひ、梅「いつもの髪の風より一の恰好がわりいじやアねへか。□「ム、わりい〜。一ばかりじやアねへ、何處もかしこもわりい。第一モウ素人の様に氣を揉んで騒ぐのがわりいやアな。▲「可哀さうに左様言なさんな。此方がこの中に居るだけ、氣の揉み様がよけいだアな。先も又油斷はな

らねへと、氣をもんで來るから、其心持を汲分けて、ものをしねへと、思ひもつかねへことで、男に腹を立せることが出来るわな。梅「ア、それは、ほんとうに左様だヨ。それだから、□「イ、サ〜、尤だ〜。秀八さんの支度が、まだるくつてなるめへ。▲「フヤなんだか胸がさら〜として來た。何ぞ給てへノウ。梅「おいらも何ぞ給て往うか。□「ナンノ費へな、柳さんじやアねへか。先へいつて見へもいるめへ。比良青のお鉢の底を叩いたつて構ふものか。梅「まさか往々早々空腹とも言れないはな。▲「ドレ〜おいらは鯨でもさういつてやらう。□「自身番横丁か。□「氣がねへのふ。□「それだつて榮代迄人もやられめへ。▲「お客がくりやア美味を喰せるやうにしてあるけれど、毎日山のものや、比良青のものを買喰もならず。□「座敷で喰やア甘くなし、自腹で奢りやアマづいものでも、てへげへに喰れるとは因果だヨノウ。梅「ほんにマアに似合ねへ、意氣な喰もの〜ねへ所だヨ。▲「越後屋播磨の物ばかりが安くつて、美味けれど鯨なんざア値ばかり高くつて、海の近へくせに、年中しけだ〜と言て、玉子と海苔ばかりよこさアな。トいふ折から、下より、「梅吉さんお早く。梅「アイヨ。□「嬉しさうな返事をするぜ。梅「そんなら否だアといふの。▲「へん何といはれても腹を立ねへからおかしい。梅「秀さん、追迎ひだヨ。秀「ハイ〜やう〜支度が出來ました、モウ少許幕を引ばりてへのう。ト笑ひ

ながら下へおりる。此方よりは梅吉が、いそ／＼して路次へ出る。明て来た子も知つた客と見え、すれ違ひながら、×「早く往てやんねへな。待焦れて居る。梅「ウフン、おめへ國さんか。

×「インニヤ初で、モウ／＼眞平。梅「さうか。ト別れる。×「秀さん。秀「ヲヤおはやう、今日はモウ梅さんが。×「ア、ネ、御迷惑ネ。ト笑ひながら別れ行く。そも薄淋しき和歌町の往來に引かへて、此長屋の賑はしき。入口は唯の裏家の大路次に劣れども、奥ぞゆかしき小町娘、又は仇なる俠肌。十三四歳より廿四五、目移りぞする辨天長屋の、異名は此處より言ひ初めけん。梅吉が出た其跡にて、二三人小聲にて、□「アノ子もひどくこりせうだの。▲「しかし無理もねへ

柳さんはお店ものゝやうじやアねへぞ。どうも何かゞ好風だヨ。そして都合がいゝとは言ながら、何か能く氣がつくヨ。□「それに梅印は月水にならねへじやアねへか。×「ム、モウ餘程月が重なつて居るさうだ。□「ほんとうに産氣かのう。▲「柳さんが是非何もかも請合といふさうだ。

×「そりやア其筈さ。柳さんもモウ二年か三年、此方へ來るし、梅さんも柳さんが來てから、といつた外に、一人でも馴染をこせへたことはなし、どうでも柳さんがしづばなるめへ。□「それだが苦勞だらうヨ。おぬらア他のことでも、こはひやうだは。▲「さうよのう。女といふものは夫が否だは。×「ヲヤ何か喰ると言たが、どうした。□「ム、鮫をさういつて×「おぬらもうさ

言て貰へばよかつた。▲「足りざアまたさういはアな。□「エ、コウ、少許始末をしやうじやアねへかノウ。×「ナゼ／＼。□「ナゼといつて、此連中は全てへ錢づけへがあらひヨ、此間も子供が使に往て、女中と話ながら歩行の跡から聞て行きやア、あんかけ蕎麥をさういつて買に遣て、またよしにするといふ小言をいふのを聞たが、十六文廿四文のものを、よすの、よさねへのといふ、子供衆があるのに、此方等ア毎日買喰に、割合を二朱か五百出さねへことはねへぞ。考へ立をしちやアいけねへけれど、あんまり無駄がつゞくじやアねへか。×「さうさノウ、其積りで居ても、寄場に居ると喰たくなるし、座敷じやア勤める氣のせへか、見えもねへが喰たくなしおいら達の根性は、依古地だと思ふヨ。▲「ちげへねへ。ト咄しの所へ、小濱といふ唄女、風を引て引籠で居たるが、ひぬきの客より病氣見舞の重詰來る。其立派なること、中々容易な品ならず、判金の出た料理なるべし。嗚呼美味といふとも一時の口腹を養ふのみ。眞の通子は小なりとも金を送りて、其好みに任せるが粹の業といふべきか。但左様な勘定づくにて、遊びの出來るものではなし、費を厭はぬ無分別が、女の悦ぶ筋か知らねど、金はつかひ方によりて損益多し。すべて見外をつくりて女に心をおかせるは古風なり。人がらを卑しくせずして、女の隔心をなきやうに、大業ならずとも自然と頼母しく思はるゝ様になすべし。又女の氣性によれど、寛治ならざれ

ばまだるく思ふ女の風見えるは、客の爲を思ひ、永く附合ふ心にあらず、唯取盡して後は、かまはぬ思案なるべきか。金のなる木を持ちたりとも、愛するものゝ爲にもならぬ財を費すことなかれ。などゝいはすと近年は、壯年、旦那が如在なく、なるたけ生妻にはたられて、達引せるとか、實意を見るとか、少しやさしくして見せると、直にこせつく風俗なれば、うつかりされぬ互の心、さぐり足して暗闇をたどるに等しき男女の中、そもく傾城と用心をなし、また契情の誠を知るこそおもしろけれ。

第二章

梅吉の所へ近きことのみ心便りの佗住居。好風と野暮との中島町に、風雅でもなく洒落でもなく店賃安き氣樂さは、裏家に似あはぬ造作して、見苦からぬ五六軒、前の明地へ朝顔を日除のやうにからませて、花も盛の七月やその玉章も今ははや、絶て戀しき情人の行衛、戀ふ甲斐なき配流目、所を聞て苦勞も身ひとつに、はかなき縁も淺からぬ契はかねてあればこそ。懷妊せし胎も臨月に、近づく頃より大病となりて、勞るゝ梅吉は知らねど、醫者は見離して斷はられたる主人の當惑。御符も加持も仕盡して、詮方なければ親里の、こゝへ保養といへばいふ、誠は始終助から

ぬ、命と哀れな相談が、極りてほんの慈悲心、看所なければ證文を卷て渡してよこされし、親の心はいかならん。思ひやるさへ痛ましき。其梅吉が病の床に、うとくと寝むる傍、看病をする母親は、娘の寝顔覗いてかなしく、おろく涙。心の中にくよくよと思ふて見ればいぢらしき、花の姿も疲れ衰へ、胎中に赤子のある身なれば、息づかひさへ苦しげに、亂れし髪も何日よりか、其儘櫛の齒も入れず、哀れは言ん方ぞなき。かゝる所へ秀八は、流石近しき好みとて、他所行ついで門口から、ちよいと立寄る信切者。秀「おつかさん、梅さんはどうだへ。すこしはよいかへ。ト小聲で言ふは病人にも驚きをさせまじと、氣兼ね流石苦勞人。小粒を一ツ紙に包みて、梅吉の母に渡し、秀「こりやすくないけれど、梅さんになんぞ買つて喰させておくれな。母「誠にモウ御親切ありがたうぞんじます。あれも不斷お前さんのことを言出しては泣て居ますヨ。ドレちよつと起して、秀「アレおつかア起さずとよいヨ。今日は急ぐから直に參るヨ。そして明後日はどうぞ大橋の毘沙門様へお參り申すから、其時又倚はネ。母「ヲ、ほんに、明後日は御縁日だネ。明許様へはお梅も善孝さんと一同に、あげものをするなんぞと言ましたツけが、善孝さんも死去なさつてネへ。秀「アレサ母御其様なことを氣にかゝるはネ。マア急ぐからあの子が目を覺したら宜しく。トそこくにして出て行く。母「ヤレくあの子は信切に、トいふ時梅吉は手を出

し。梅「アレサ柳さん、マアお待ちヨ。母「なんだな此子は、氣味のわりい。ありやア秀八さんだよ。トいへば梅吉目を覺し、梅「ヲヤ桑本の二階だと思つたら、やつぱり私宅だネ。母「アレ又此兒は夢を見たのかへ。チツト氣をしつかりと持な、そしてモウ柳さんのこともいゝかげんにしねへな。百里二百里上方へやられてしまつたその人を、何と思つたとて仕方もあるめへ。縁さへあれば又始終歸つて來なすつて逢れるやうなこともあらうはな。それよりか先づ大切な身じやアねへか。モウ今月も少しはな、早く身輕になつて今來なさつた秀八さんを初め傍輩の衆の恩も送らずはなるめへ、梅「ヲヤ秀さんが來たのかへ。母「さうサ金を壹歩もつて來ておくれだはな。ヲヤ／＼なぜ逢しておくれでない。色々頼むことがあるのに。ト涙を零して泣。母「それだつて秀さんは急ぐし、おめへはよウく寝入つて居たから仕方がねへはな。ナニ／＼また明後日毘沙門様へ參る時こゝへ倚るといゝなさつたから、其時かの禮をいふがいゝ。梅「羨しいのう、おゐらも一連に往てへもんだ。母「サアさう思ふならば、元氣をよく薬も精出して服で力を強くして早く赤子でも抱て見な、可愛くつてなるもんじやアねへ。それこそ何より樂みだアな。モウ／＼何もかも忘れてどうぞ軽く産落す様にしな。お千代ばアさんも頼んで置たし（とりあげ姿さまの事なるべし）おれも又素人ではなし、産時にやア大丈夫に思つてゐるがいゝ、少しでも案じるこ

とはねへ、今も今とて秀八さんが信切な見舞、その外是まで傍輩衆や太夫衆のうちでも、和十さんだの、櫻川の由さんだのが、度々尋ねてくんなさつた御親切を、おろそかに思はねへがいゝ。是非よくなつてあの子達にも禮をいふやうにせずばなるまいじやアねへか。梅「どうして左様いふやうになるものかねへ、所詮よくはならないけれど、せめて胎内の赤子を正順に産で、それから死たいと願つて居るけれど、今の分ではなか／＼赤子を産むことも出來まいと思ふは。母「ナニ出來ねへことがあるものか、それも一ツは手めへの氣によるはな。石にひぶりついても全快ふといふ氣になるがいゝ。梅「私きだつて死たかアねへやアな。エ母御あながれくわんぢやうといふものは此方から頼むのかのう。梅「ナニいつでも月の切れる時分にやア、質屋から書立てよこさアな。梅「ヲホ、何だか母人つまらねへ。其勘定のことぢやアねへやアな。ソレ産で死ぬとお寺の溝や水の流れる所へ、細い竹を四本建て、白い切を四角に縫て、その中へ字が書てあつて、それを水でどうかするといふものゝことサ。母「アハ、さうか流灌頂のことか。ナゼ其様な不吉なことをいふのだ、否な子だのふ。梅「それだと言て産で死ぬとあれをこしらへてもらうのじやアぬへか。母「エ、モウ此子ア、役にも立ねへことを聞ずといゝはな。梅「ヲヤ／＼それでも去頃中お針さんが衆人に咄したは、賽の河原へ行くと、子供ばかり集つて石を積ん

で、地藏様へ何かを願つて居る所へ、鬼が来て其積んだ石をこわしてしまふとサ。それを娑婆で法事をよくしてやると、鬼が来ても其子のつんだ石をば崩すことはならないと、それに又生れ落たばかりの赤子は、地藏様を拜むことも出来ないから、親類の死だ子が其赤子を世話をして、鬼が来ると蓮の葉で隠して置いてやるとサ。可哀さうだねへ。ト身にかゝりし如く悲さうに、涙を落す娘の顔、見る母親は胸苦しく、親方さへも見はなして、捨てた身ぞとはかねてより、知れた事とはいひながら、死んで行く身の後の世まで、くよくよ思ふ心のうち、さぞ悲しくもあるならん。自由にならば此母が、死んで代りに往たいと、いふもいはれぬ親心、涙かくして笑ひに紛らし、母「おめへもモウ不斷の氣に似合ねへ、心細いことばかり考へてゐるのう。おめらなんざア年が歳だから後生の用心をしねへけりア悪いのだけれど、今日がけふのくつたくばかりしてゐらア。まして爺さんは早く死なつたし、佛様を粗末にしてはすまねへ。夫だから手前が全快なつておめらを御談義にでもやる様にしねへな。トいふうちお梅はすやくと、勞れ寝入にぬる風情、母は邊を片付て表の方へ出て行く。折節かみへつけ登せにせられし後は音信も、たへてせざりし柳吉が、尋ねてこゝへお梅の側。柳「どうした、大變に病らつて居るの。梅「ヲヤ柳さんかへ、よくこゝが知れたツけねへ。柳「イヤモウおれも今時分御當地へ下られるわけではないが、此間

中はいふに不及、上へ登る永の道中も、おめへのことばかり夢に見たから、たとへ死ばといつても、最一度逢てくわしく談合をしたうへで、どうでもならうと思ふ氣で下つたが、いよく赤子が出来そうかの。梅「ヲヤおまへも平氣だねへ。私「此様に苦勞をして居るのに、今迄何共沙汰もせず居て、いよく身持かぐらゐぢやア恨みだヨ。柳「イヤサさうではないが、店の仕法通りになつて居ないと、他の遣つた金まで此方へかぶせられる様になるから、暫く辛抱して居たのだ。モウ是からはおれが付て居るから案じねへがい、どうでもして身を立る様に仕様はな。梅「それも嬉しいけれど、私の病氣はとも快氣はならないヨ。それだからどうぞお前の種を産落して死たいと思つて居るはネ、若し産でから私が死んだら赤子を可愛がつて育て、おくれな。私「きやアおまへにあはれざア秀八さんに赤子を頼まうと思つてゐましたは、かわいさうだと思ひな。ト「いふさへくもる涙聲、母はお梅をゆり起し、母「お梅や、また夢を見るのかへ。これさく大そうにうなされるのう。

第一篇 卷之二

第三章

×ハ年々に合「賑ひまさる山王の祭をまたも御所望と實に御最負の花出印や家台囃子にきをひよくハ花相似たる古事に年も智勇の竹の内神功帝の補佐の臣合「かの三韓の荒ゑびす討したがへて日の本の奴となして勝鬨あげ 合「諸卒と共に出汐の八十島ちどり 合「友千鳥凱陣の帆も十分に合「ヤラ／＼めでたいのへ四海浪風納りて 合「常盤の御船も ×ハはやくつくし瀉御産の紐の時を得て松の緑の男山 合「八幡宮と今の世におがまれ給ふ若宮を袖に抱いて守護なして後略 由「ありやア網打船頭の引拔の前の所だノ。和十「ム、たしか左様だ。置淨るりから船頭のおんばいはどうも品が能 榮「そりやアいゝが祭の相談はどうする。由「いづれ寄合でもせずアなるめへ。和「トキニ新孝さんの方の話はどうした。由「ナニそれは此間よく左様言てやりやした。榮「なんでも今年は、急度衣裳のことを談じてやるがいゝぜ、何様な役をすればと言ても木綿の摺込なんぞは着のは否だといはふぜ。和「但し相應に御入用を請取たうへは、此方賄ない御勝手にと極ると、木綿でも

麻た布でもかまひまうさすか。由「ナニ／＼それぢやアいかねへ、何でも奇麗にしくツちやア落が來ねへ。和「へい其許さまなどは、何やうにもおめかしなさるがいゝ。此方どもには、何を着せてもどうで。榮「なぞと下から出る人は、いつでも内所でうまひことをして居るのス。和「どうして／＼、うまひもまづいも出来るものか。お客も唄女も娼妓も不殘賢明で馬鹿氣ねへければ、お客の方で心づかひだから呼ねへといふ男げいしやの活業だものヲ。なか／＼此方の勝手にいゝことが出来るものか。由「左様サのふ。そんならといつて馬鹿氣たツ限ぢやアまた不承知なり。和「左様サ／＼そりやア違へねへ。其所へおめへも氣がつけば大丈夫だ。それでは善孝さんも草葉の蔭でマア安堵したらう。榮「イヤ／＼親父は黄泉で安堵しても、まだ此世で安堵しねへものがある。由「ちどみやか。榮「イヤ／＼夫は大丈夫だが、モウ一ツあるが、マアいふめへ。和十「トキニおらア山松さん所へ詠草をとり往ねへけりやアならねへ。由「しきりに俳諧を精出すノ。和十「どうも他の宗匠のやうに高くとまらず、第一古い人だけでも少しも句に老込んだことがなし、初心のものにも自慢の人にも、思ひつかれて流行するから妙だ。榮「イヤ斯しても居られめへ、そろ／＼出かけやう。由「それぢやア後に。和十「今日は惣用事をつけて遊びてへらう。榮「そんな心持の時にやアお座敷が重なるし、チト欲ばりてへ時には揃つてひまなことが

有ものヨ。ト（ふだんの時は太夫でも又羽織でも唯の人、たゞの娘の心にてなんにも變りしことはなし、たゞ物に氣をつけてみるなり）和十「サア往ふ。ト（立出る。由次郎女房おくま、それ／＼に挨拶して皆々歸る）くま「由さんおまへ秀八さんの頼んだことをしておやりか。由「ム、情合の返事か。くま「おしやれてない。由「ごあいさつだノ。くま「アレサじやうだんじやアねへ。梅吉さん所へ往ておやりな。由「ム、／＼秀八さんの頼みばかりじやアねへ。おれもお梅さんを尋ねて遣ねへけりやア義理が悪い。くま「よく信切にしておあげな、御如在はあるまいが。由「ヲヤ嫉妬か。くま「ヲホ、、澤山だネ。ト（いふ所へ女中來る）「由さん小葉名やへ。由「ハイ只今。ト仕度をして立出る。當時日の出の流行子、お客のひみき絶間なく、座敷へこそは出て行く。流石に色の仲町とて好風娘や艶美な唄女の、昔よりして稻荷横町、白狐にまさる通力の美なる古契や引籠し、唄女上句の三四人、由次郎の留守へ打寄て、女同士の遠慮なく、□「お仲さん。かの事はどうおしだ。▲「ナアニネ私やアモウ打捨ておくヨ。□「ヲヤ大分おとなしくなつたの。×「ヲヤ對座で自惚くらをするのか。今日はモウ情事の話は法度にして、いやみのねへ話におしな。▲「十二軒の席へ怪談ばなしが出るじやアないか。□「それよりか黒江町の染の助の方がよいはネ。おくま「いやみのねへ話なら講釋におしな。▲「ヲヤ／＼軍の嘶かへ。眞平だねへ。おくま「ヲ

ヤ夫でも私の所の由さんや、和十さんだの百さんのと、仲間の衆が不殘誘ひ合して講釋へ往たは。□「ヲヤそりやアたしか金龍とかいふ講釋師で、一流風が違つて珍らしいことをいふので往たのだヨ。只の軍書なんぞを、ばか／＼しく太夫衆が何聞にゆくものかネ。▲「ヲヤ大分博識だネ。おくま「お仲さん。おまへ此間嘶すとおいひの、化物ばなしをしてお聞せな。▲「ナニそんなにもしろくはないヨ。□「お岩かへ。▲「イ、エ。×「狸かへ。▲「高野町ではあるまいし。おくま「アレサお仲さん、他にかまはずお咄しヨ。▲「何ネ、實は其本を持て來たから、よまうちやアないか。皆々「そんなら讀でお聞せな。ト（みな／＼すゝめてよませける）

折も節とて門口へ、さも哀れなる唄和讃これも衆生を濟度の方便、一きは聲をはりあげて「死骸は川へ流れゆく、あはれはかなき絹川や、かさねが淵と後の世に、浮名をながす物語。邪見の人の心根を、なほしたまへや南無阿彌陀と、呂になる鉦のかなしげなり。女は夫にとりすがり、女「モシマア待て下さりませ。たとへ此身にあいそが盡き、出てゆけがしのうちたゝきも、知つては居れど親里も、縁者もあらぬたよりなさ。今日の今までおまへより他に力となる人も、ないのをよふツく知つてのこと、殊におなかのやゝさへも、モウ七月の末五日、日數も詰る身の苦しさ、せめて安産したうへで。男「エ、いま／＼しいよまい言。モウ

く是から半日もこゝへおくことはならねへ。腹の赤子が出来たといつて、それをおれがしるものか。夜どまり日どまりしてあるきやア、留守にうぬが何をしたか知れるものか。いッそ半産でもして死去や、罪亡しにもなるだらう。女「そりやあんまりなむどくしん、たとへ百日留守にもしろ、おまへの外にいたづらをする氣があれば、邪魔になる譯を知りつゝ、あんかん茲に斯して居はしませぬ。男「エ、まだくどくいやアがるか。何者の種だか知れねへがきを、生みたがるのもいまくしい。ドレその腹の赤子から先へ、ぶち殺てくれふは、

ト（割まき取て立かゝる）

おくま「ヤヤくかわいそうだねへ。×「ほんに可哀そふだねへ。その本は何といふ本だへ。□「繪があるならお見せな。▲「イ、エ寫本だから繪はないがネ。近日繪入の板行にして出すといふことだは。×「ヤヤ左様かへ。實正にあつたことかねへ。▲「ア、實正の話を種にして、金賀といふ人が綴たのだツサ。□「誠に其女が可哀さうだねへ。おくま「何といふ外題の本だへ。▲「此本かへ、何サ朧染恨の衣川サ。おくま「ヤヤそれぢやア 則累をかき直したのかねへ。×「夫よりマア其後はどうなるへ。▲「このあとかへ、これからネ、とふく此亭主が悪者だから、他の女を家内へ入れる積りで、今の妊身の女房を叩殺すは。×「ヤヤく非道悪黨だねへ。▲「モウくネ、其女

が苦しがつて、泣ながら殺さされる所が、誠に可哀さうだは。おくま「早くそこをお読みな。▲「まだ其所は此卷にはないヨ。それは三の卷にあるヨ。おくま「なぜそれをも持ておいでよないねへ。▲「それだつて先刻中裏から秀八さんが、借によこしたものを。おくま「いけないねへ。□「しまひの所はどうなるへ。▲「それからネ、その身もちの女が死でからネ、産婦鳥といふものになつて、化て出るは。×「うぶめといふは、産で死ぬと迷つて鳥のやうなものになつて来るのだとねへ。▲「ア、さうだと夫からだんく恐くなるヨ。□「ヤヤ産といへば、梅吉さんはどうしたらうネへ。おくま「アノウ誠にむづかしいとサ。▲「さうだらうネへ。唯さへ初産だのに、アノ大病だから首尾よく生得ればいゝがねへ。×「どうしてく助るまいヨ。おくま「わけて秀八さんが中がいゝから、案じてネ、此間から由さんに頼んで、水天宮様へお百度をあげてもらいたいとサ。□「ヤヤ左様かへ、秀八さんは全體信切者だねへ。▲「そして宅が違つて居て、あんなに中のいゝといふも、不思議だは。×「そりやア合縁奇縁とやらだはネ。□「しかし女といふものは、損なものだねへ。▲「ア、ねへ、なんでも女の方が苦勞をよけいにするは。□「それも各々の氣性サ男を澤山さうに思つて、いくらもく浮氣をして、冥利も何もかまはねへがあるし。▲「一人の男を一途に思つて、苦勞をする馬鹿もあるは。×「ラットく何ぞのはすみには惚氣たがるヨ。油

斷も透もなるもんぢやアねへ。□「請賃は今おれが買にやつたヨ。▲「越後屋はりまか。□「どうして〜。此人數へ越後屋のものぢやア身上だ。×「ヲヤそれじやア何だらう。□「ナニ〜考へたといつて知れるものか。大さうに遠い所のものだヨ。▲「何だへ。□「ナニネ、先刻觀音様へ往ものが在たから、倉前のみどり團子といふのを買にやつたは。▲「ヲヤ其様なのが何所に有ノウ。□「新規に出來た葛入糝粉だが誠にいゝヨ。▲「新嬢ではやるのが中裏にも大分あるノ。おくま〜みどり團子といふと、赤子のやうだねへ。

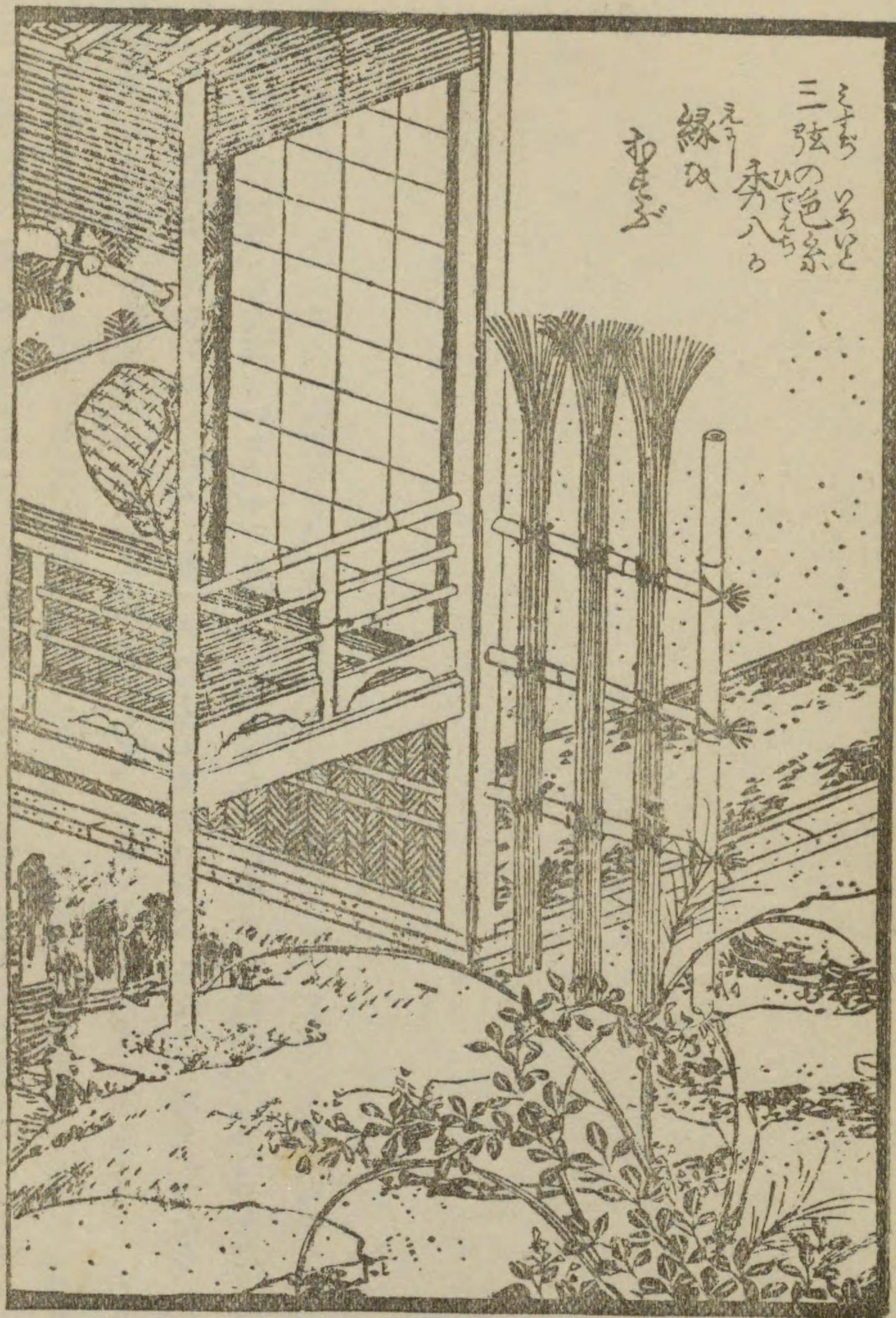
第四章

うたゝわしが思ひは三國一よ。富士の深山の白雪合トチチリ〜トチンチンチチチントントン〜つもりやするとも解はせぬ。浮名たつかや、立かな浮名、不粹お方といはすけれど、他の心は合縁奇縁、ほんに命もやる氣になつたわいな。ト續き騒ぎも忍駒、秋の最中の月の夜に、さへたる庭の七草やさしく見ゆる一間の中、此方の縁の端近く、酔てしどなき一人の唄女、月も羞らふ花の顔、かの秀八は情々と、好情な聲を戀風に、傳へ聞て立あがり、障子をそつとおし明て、いかなる人と差覗けば、歳齡二十六歳と見ゆる氣障なしの好漢 唯一人床の間の柱に靠れて爪弾

の、姿も風俗もぞつとする女殺しの衣裳付、持ものなどもさぞかしと、思ひやらるゝその出立、相手ほしやと思ふ節、隔てし障子の明音に、思はず貌を見合せて、男「どなたか存じませぬが、チトこちらへお這入なさりました。秀「ヲヤ御免なさいまし、どなたか存じませんが、貴君一人でございませうか。男「左様サ、マアこちらへお這入なせまし。秀「ハイ有難う存じます。ト（莞爾笑ひながら此座敷へ少し控目ながら這入る。酒に酔ひし故遠慮をせぬなるべし）男「サア〜此方へ御遠慮はいらねへ。連は一人もございませぬ。今迄船頭を相手にして、差向ひで呑て居やしたが、少し近所へ用があつて使にやりましたから、只一個になつて、鼠に引れさうで誠に淋しうござへます。どうぞ此方へ這入て少しの中でも遊んでおくんなせへ。秀「ヲヤ左様でございませうか、私も今迄此座敷に出て居ましたが、又爰へ來るから待て居ると被仰て、お送り申もお断ゆへ、詮方なしに先刻から一人で誠に淋しくツてなりません。どうぞお待合の間、すこしこゝへお置なさつてくださいませ。宜しうございませうか。男「サア〜こつちへ、そりやア願ツたり叶ツたりだ。早速一ツ献じませう。秀「へいありがたう。左様なら頂きますヨ。男「サアどうぞ澤山やつておくんなせへ。犬略給荒して、何もないから今何ぞ言付やす。秀「イエ〜モウ、どう致しまして是で澤山でございませう。そして段々夜が更けましたら、貴君もお樂みの先が遅くな

りませう。男「イエどうして、其様な所があれば楽しみでござへますが、さつぱり好事いざこざなどは覚えなし。唯ただ通家とほりものめかして蟲の音でも聞うと思つて、此松本に夜を深して吞で居やした、野暮な思付さネ。秀「ヲヤ、程ほどばかり言てお出なはるヨ。ヘイ御返盃。ト（ちよくをすましてさし出す）男「マアこりやアお押へとしやせう。秀「イエマア貴君へ。そして今の跡をモウ少許すこしお唄ひなさいましな。實はお聲に聞惚てこのお座敷へ、ツイ参つたのでございますヨ。男「モシそりやアチツト情ねへいじめ様だネ。仲町の唄女衆はなりしが聞て居ると思やア、まさか三味線をいじり廻して遊びも仕やせん。奥座敷で誰だれも聞てはゐねへと思ふから、いたづらもしたのサ。なまぎゝな奴だと癢かゆにさはつたら堪忍するサ。秀「ヲヤほんとうでございますヨ。左様被仰おつしやると誠にお氣毒で御挨拶が出来ません。男「そんなら最も一ツお重ねなせへ。秀「ハイ左様なら兎うてもものことに是で頂きませう。ト（傍にありし茶碗を出せば、男は少し不思議に思ひしと見えて）男「ヲヤ何かお癢にさはつて無理酒とやらかネ。秀「イ、エさうぢやア有ませんが、少しじれつてへことがございませう。男「侍人の遅のじれるのかネ。秀「ヲヤお見立みだてはありがたふ存ますが、待ても侍人も有ませんヨ。どうぞ其様そのような當あたが出来たら嬉しうございませうが、場所ところに似合にあひない野暮者いざこざだからいけません。男「へん當あたがあり過ぎてお困りだらう。そりやアさうと、おまへは内刻うちまじから私の

顔ばかり見て居なさるが、其様に馬鹿ばか氣けた顔かネ。秀「アレさうぢやアありませんが、こんなことを申たら古風いにしへのな唄女うたひめの臺詞せりふだと思ひなさいませうが、どうも最前まへから見申した様な御方ごほうだと、實は考へて居りますヨ。と（偽いつはりならぬ其風情、男も覺えのありと見へて、暫く考へて居たりしが）男「イヤ氣が付て見りやア、どうかお前も知る人に違ちがひない様だが、しかし覺違あやまらした管くだしなせへ。若やおまへは雨露うろま町の。秀「エ、。男「塗物問屋のお娘御むすめごで、お糸さんと被仰おつしやるたお子でござへませんか。秀「どうしてそれを御存ごぞんじで。男「イエモシお糸さんならお互に見知つた所ところか主家來、お前さんが十二のお年、母御おつかさんに連られて、雨露町を御離縁おちがひなさつた時分、貴娘おなの母御おつかさんに御最負ごさいなになりました彌三郎やみさぶろうでございます。秀「エ、左様でございますか。ト（少しふさいで居るを見て）男「知らぬことと唯今は、不躰ふしづなもの言ひ様、どうぞ御免ごめんなさいませ、しかしお見それ申も無理はない、お別れ申てモウ九年程、その以前は母御さんのお了管違あやまひから親方を御離縁、尤もお里方も御薄命おほしなとは承りましたが、例へ何でもお前さんが、此の場所ところから唄女衆はなりしなんぞに姿を替かてお在いなさらうとは夢にも知らぬ今夜の仕義、どうしたことでございます。ト（問れていとゞ秀八は、過越方を思ひ出し、涙にくれて居たりけるが、やう／＼に涙を拂ひ、是迄の事を詳しく語る）男「イヤハヤそれはとんだこと、それぢやア母御さんも御病身ごびんみで、おま



三弦の
色糸
糸の
八
緑
お



へさんの御厄介、それでもマア近い所に自家がありやア、唯身屋にばかりお在なさらずとも宜よろこざいませう。秀「ア、其代りに苦勞がよけいでありますヨ。男「成程それは御尤サ。何れ近日私わたくしも母御さんをお尋ね申ませう。イヤ大きに夜が更ました。マアこゝはお開きと致しませう。そりやいゝが最船頭は歸りさうなものだ。秀「マアいゝぢやアないかへ。それとも遅くなつたら、私わたくしの母人の宅へ止宿とまりどても大事ないヨ。サアもう一ツお上りな。折角よつた酒が裏うらに落たやうだ。サアおあがりな。男「イエ、私はモウ。秀「アレサさうでもあらうが、思ひざしだからどうぞ一

へ。彌「ナニさうではございせんが、マアよく考へて御覽ごらんじまし、貴嬢は私の爲には假初ならぬ以前のお主。また其上にこの土地で、立派に出立のお身のうへ、是迄確たしに親切を盡し合つて、力になつた旦那もあらうに、今更そん、とをなされて後で、くやしいと思し召ても濟ぬこと、第一に私が貴嬢を不實ものと言しては、母御へ外しても言譯が出来ませぬ。トいはれて流石秀八も、お主ごかしに彌三郎の、逃口上か知らねども、これ又世話になるお客に、深い義理のも在だらうと、言葉の中に根を押すは、満更でなき心から、言ひもするかと思へども、全盛なほど黄金家よきかねがあるであらうと誰とても思ふが、無理にあらざれば、其身ばかりは其様な世話する人もないといふ、證據も茲ではなき故に、我と悔しき色里の、身の上をこそかこちけり。彌「アレたしかアノ鐘は、ウ亥刻よつだそいな。ドレ支度をして、ト立あがる裾をとらへて秀八が、秀「ア、モシ彌三さん。マア少し待つておくれ。トいふさへくもる泪聲、彌「ナニエ。ト言つゝ見合す顔さすが亂るゝ縁えんの糸、結むすばれとけぬもの思ひ、二人はホツト溜息を吐いて言葉もなかりける。

それ人情とは何をかいふ。戀路の事のみ言ふにあらず。只男女の常住愚なる歎きはかなき心苦、すべて世上衆人のその迷へるをもあざけることなく、何事も其思ひ／＼の人になれて、親しく實意に哀れを知るを、眞に人情を解たる人といふべし。その心にて讀み給はねば、予が拙作はとる所なしといはれん。

狂訓亭

第一篇 卷之三

第五章

看上見下す顔と貌、月の桂男女郎花、露もの萩の秀八が、涙の眼元艶麗、彌三郎の裾をとらへながら、秀「マア下に御在ヨ。ヨウ彌三さん。おまへはどうしても私のいふことは聞かれないと言のかへ。彌「サア浮世の義理も後悔も、厭はぬ浮薄な心なら、貴嬢のやうに美しい、お方に例へ嘘でも左様いはれて、何すげなくいたませう。是まで貴嬢も相應に身を任せたお人も在ませう。其お方へ對しての人情はどうなさいます。よく考へて御覽じまし。秀「サアさう思てお在のは、さら／＼無理ではないけれど、是まで一度もいやらしいお客の世話になりもせず、氣隨我儘一こくが通つて結句勤よく、奴と仇名の私の身うへ、どうしたことか今夜に限つて、ふいとおまへに迷つてから、笑はれ草となることも、苦勞の種になることも、心で承知して居ながら、何の因果かいたづらな浮薄ものだとお前にも、さげしまれると悟つても、あきらめられないせつなさを、どうぞ推量しておくれな。ト（いへども何と挨拶もなさぬ男の顔を見つめて、秀八も氣色を

かへて) 秀「そんならどうでも聞入れてはお呉でないネ。夫も無理ではあるまいねへ。久し振で逢たおまへに、直に、と、といふやうな。ヲイそれ者とお思ひでは、返事のないが尤だけれど、是まで私が身の行跡を知らないお前に言解する證據もないから仕様もないヨ。イツそ死んだら浮氣でない證據が、お前も又可哀さうだと思ひだらう。ト(いふより早く出抜に、かの彌三郎の脇差をすらりと抜いて既に危く秀八が自害をなさんとする故に、彌三郎はうろたへて其が手を拂ひ脇差を取あげ) 彌「是はしたりめつさうな。お氣が違ひましたのか、何で死なふとなされます。

秀「サア死たい事はないけれど、言條立ない恥かしさ、面目ないと悲しいので、思ひ詰たこの覺悟、構はず離して死なせて、ト(跡くをやうく押宥め、脇差を鞘に納めて) 彌「氣の短いことをなさいますな。何ぼお歳がゆかぬとて、前後見ずななされかた、母御さんの在ことも忘れてお仕舞なさいましたか疑はしい其お心、數ならぬ私を命にかけてそれ程まで、したふて下さるその始末、どうも合點がまいりませぬ。ト(まだ解やらぬ片糸の結ばれたるもの思ひ、理をわきまへし彌三郎の男心の亂るゝを、こらへて忍ぶその風情、戀の浮瀬と知られたり) 秀「實氣なおまへの量見では、私が見たらな此仕義と愛想も盡きやうけれど、何所で結んだ惡縁やら、、、、、た心が誠、廣い世界にいたづらな女も多くあらうけれど、、、、から此様に、、、、らしい詮業する



のも、最一人在ませうか。承知がなければ死ぬ事と、くゝりを極めた私が心、親を忘れた不孝も、憎からうけれど堪忍して、どうぞ返事しておくれな。ト(染々として寄り添へば) 彌「そんならいよく眞實に其お心でございますか。私ちやと申て木竹ではなし、心の底は最前から飛立やうに思ふのを、靜と耐へて居りますと、古主の娘御二ツには、お身の爲にならぬことと、上げなく申て居りましたが、實は男の名聞にもお前さんの様を美しいお方に思ひつかれるといふは餘程冥加に叶った情縁、私こそ死んでもをしくはございません。しかし生得馬鹿律儀、早くいへば凝性だから、必ず後悔なさいますな。ト(莞爾笑つて引寄せれば、秀八は身を震はして嬉し涙) 秀「ヲヤほんとうにかへ、嬉しいねへと言た所が、今更に又苦勞になるお前の身のうへ、斯してこゝらへ遊びに来てお在の位ぢやア、まんざら相手のないことも有ますまい。相手になれば私を他人にした所が、たゞ一通りにする氣はないネ。是非深くはまる道理、さうして見ると惚込だ弱身をお前に見透されて、私の身ばかり詮義をされてお前の、、の洗方はへ。彌「イヤ成程なア、朱に交れば赤くなるやら、雨露町のお嬢さんの積りで居ると、いつか手取の唄女氣質、思入れ私をはづませて、鏝際へ来ていじめるとは誠に如在ねへ事だぞ。秀「ヲヤそんな言紛らかしは聞かないヨ。どうせ私が否がられてさへ、惚れるから、お前の方で好言を言れた日にやア情人に

ならない女はない情曲。だから今までのを丸でおよしと言はないけれど、どうぞ私をば始終見捨てにおくれな。彌「モウ〜おまへにまるめられて、何と言っていゝか返答も出来ねへ。容儀がう

にて人の音、「エヘン〜。ト咳拂ひ、、、、飛び退けば、時分はよしと氣轉の船頭、隔紙を靜に押明け、船頭「さぞ待なせへましたらう。大きに手間がとれました。先さまでも宜しくと被仰ました。彌「イヤこれは〜大きに御苦勞、サア一盃やらかしねへ。兼「ハイ〜、ありがたうぞんじます。ヲヤ其所にお居での秀八さんでござへますネ。秀「ヲヤ〜兼さんかへ。お久しいねへ。今ちやア何所においでだ。兼「エナニネ半田川を不首尾から阿方此方を喰詰めて今

ぢやア女浪八丁保里に居りやす。今夜アどうして茲へお出なすつたへ。秀「エ、ナニネ今迄次間
の一座に出て居たがネ、久し振りで彌三さんにお目にかゝつて、チョイトお相手をして居たのサ
兼「ヲヤそんなら旦那とは最前のお馴染かへ。秀「ア、さうサ。兼「そいつは飛だ話だ。エモシ
旦那の好風に墜落ちやアいけませんぜ。秀「ヲヤどふか這上りさうだは。彌「サア兼公や夜がふ
けるから往事としようぜ。兼「モシなんなら今夜ア此方にお在なせへませんか、川も淋しうござ
へますぜ。彌「ヘン又佃田へでも逃げ様と思つて。兼「ナアニ左様じやアござへません。私しや
ア秀八さんや、おめへさんの氣を兼てのこととござへます。秀「ヲヤ大分察し心が出たネ。兼「
ヘンこれが則り老込で来たのかもしれない。彌「イヤ常談じやアねへ。あしたの朝は多用だか
ら、どうしても歸らうヨ。こゝの勘定をして来てくんナ。ト（金を渡せば船頭は勝手へ行く後見
送りて）彌「ヤレ〜肝心の所で邪魔がはいつた。いめへましい。秀「誠に思へばじれつてへの
う。あしたの晩おだまじだと聞かないヨ。彌「おまへも急度他へ出て居ちやア合點しねへぜ。ト
（言ながら、小判を二枚出して紙に包み、手早く秀八が帯へ挟み）彌「持合せが少分から、マア
小遣ばかり置いて行くヨ。ト（言れて秀八は氣毒さうに）秀「アレサ彌三さん。かういふことを。
彌「ハテ野暮をお言でない。誠に今夜の寸志だはネ。トいふ所へ、船頭兼吉は松本の拂ひを片付て

出來り、兼「ヘイ旦那御勘定もいたしました。サアお支度がよくばめへりませう。彌「ム、サア
直ぐに往う。秀「何もお忘れなすつたものはないか。彌「エ、何か忘れた様だが、しか
たがねへ。秀「何をへ。ト（顔を見る。彌三郎はにつこり笑つて振向き、秀八を見る。秀八は溜
息を吐く）兼「ア、引。氣のもめる晩だ。

第六章

そも〜今宵の模様を見るに、ツイした方に見ゆれども、世にありふれた戀ならで、彼額堂の
染畫に等しく、色かはらじと誓たる、二人が誠と後にぞしられん。さて彌三郎は山の景色を眺め
ながら、彌「ナントいゝ月ぢやアねへか。兼「左様サ歌でもお詠みなせへまし。彌「歌どころか寢
言も言へねへ。兼「さうでもござへますめへ。秀八と寢言の手がありやアしませんかネ。彌「大
違ひ〜。兼「御簾になる竹の産着を皮草履かネ。彌「大分風流めかすナ。そりやアいゝが船
は何處にある。兼「ソレ先刻木場から直に參りましたから、八幡の裏堀にもやつてあります。彌
「ム、左様だツけ。ト（言ながら船に至る）兼「サアお乗なせへまし、お手を取りませうか。
彌「それ程に酔もしねへ。ト（船へ飛込み直に横になり）彌「サアよし〜御苦勞ながらやつて

くんな。兼「かしこまりました。時に旦那、唯見屋の秀八にやア久しいお馴染かへ。彌「ナニ馴染でもねへが、見知越にする人サ。兼「イエ左様でもござへますめへ。今夜の御様子ぢやア兩方がおツこちらしうござへましたぜ。彌「馬鹿をいはツし、そんなことはちツともなしサ。トキニ茲は閻魔堂橋あたりか。兼「どういたしまして、モウ油堀でござへます。彌「ヲヤ／＼大層早いのう。しかし是から大川の乗切が太義だのう。兼「ナニまだ今の内は宜うござへますが、雪の降る晩なんざア、實に泣やうでござへますぜ。彌「さうだらうヨのう。兼「早く稻荷橋まで乗込へもんだ。エモシ旦那、思ひの外に夜が更けましたねへ。何だか今時分になると薄氣味が悪うござへますぜ。彌「浪へ月が映るので、きら／＼してもの凄いやうだノ。兼「おつなもんだ。夜と晝ぢやア大層に川の景色が違ひますぜ。彌「闇の夜より月夜の方がこわい様だぜ。ヲヤモウ永代橋だの。兼「御覽じまし、晝間だと橋の上の足音でドン／＼そう／＼しうござへますが、夜はアレ水の流れる音が、凄く聞へますぜ、ドレ／＼思切つて大間を抜やう。ト（船を押切れば既に早引ゆく潮に誘はれて、橋間を抜ける折しもあれ）「南無阿彌陀佛みだぶつト、さも悲しげなる女の聲、忽ち橋の欄柱より身を翻がへして川水へ、さんぶり落る水烟り、丁度大間を漕ぬける小邊をかすつて舟の中、濡る雫も縁のはしか。彌「三郎は船頭に向ひ、彌「身投ぢやアねへか。兼「左

様サ。トいふうち覺悟で飛入れど、流石に苦しき水の面、浮つ沈みつ流るゝ女、「ア、引苦しい南無阿、ヲ、くるしい。トもがき／＼て引汐に、流れたゞよふ其風情、お恐しけれど慈悲深き彌三郎は、船頭に頼み二人して、やう／＼に引あげる身投の女、氣づけよ薬よと介抱し、聲を限りに呼びければ、どうやら少し身を動かす、手足にどうか温氣も出る様子に頼母しく、尙聲高く呼びかし、彌「ヲ、イ姉さん。氣を確に持なせへ。トいはれて娘も目を開き、四邊を見廻し打驚き、女「エ、こゝは何といふ所でございますへ。兼「どツこいしめた。ものをいふぞ。彌「ヤレ／＼骨を折つた甲斐があるぞ。ヲイ／＼兼公船が流れるぜ。兼「ナニ／＼氣遣へござへません。しかしモウ其子はおめへさんばかりに任せても大丈夫だ。マアその濡た着物を脱せて、お前さんの下着でも。彌「ム、ほんにナア。下着はねへが、着替を持つて來たのは丁度いゝ、是でも着せやう。サア其濡れた着物を脱せねへ。女「ヲヤ／＼それぢやア私やアまだ死なずに居るのでございますかへ。彌「左様サ。此船の中が極樂で、板子の下は地獄さ。既にその美しい娘を閻魔様のお妾にされる所であツた。友「思ひがけない御親切で有がたうぞんじますが、どうぞマアこゝを離して下さいまし、死なふとしても此様にお恥しい身の因果、生甲斐もない薄命どうぞ死なして下さいまし。ト（又も振切り飛入んとするも、しつかり引止め）彌「コレサマア野暮なこ

とをしなさんな。そんなら死になといふ位ならば、大騒ぎやつて助命すけいのちもしやせん。お前もよく／＼のことでなけりやア死なふともしなさるめへ。夫も無理では有るまいが、私のみす／＼見殺しにする様な氣ならば、助もしねへわけだから、マア／＼氣を落つけて何かの譯を詳しく話して聞せぬへ。さうしたならば又及ずながら相談の仕様もありやせう。サア／＼先づ其の着物を脱で、これを着なせへ。男の着ものを着たといつて、船の内だから誰も見る氣遣はねへ。サアいふことを聞なせへ。ト無理にぬれたる着物をぬがせ、我着がへの着物を娘に着せて、彌「サア此丸薬をモウ一粒のみなせへ。こりや馬喰町の本舗菊屋で弘める飛龍丸といふ氣付萬病の薬だ。娘「ハイ誠に御信切にありがたうぞんじます、どうも生きて居りましても、彌「ハテそりやアわりい丁管ちやうかんだ。定めて深い理わけもあらうが、花の苔のおまへの年齢としごころ、まだ兩親ふたおやも在事だらう。例へおまへは情人こいびとにそれはぬ義理が立たねへとかで、死ぬ氣になりもしたらうが、爺御おやごさんや母御おつかさんの跡の數も構はねへといふ様な、不孝な事はなか／＼に男へ義理を立たといつて、神様が賞たまもせず、未來で夫婦にならうなんぞと、よく昔からいふけれど、この世に居てさへ各々の自由にならぬ戀の道。まして死だら媒人も渡りをつけるも見ずしらす、どうかまツくら暗らしい六道の辻、三途川、野暮な名ばかりあるところへ、どうして世帯よたも持もてるものか、それより少し辛坊して時節を待つか但

し又、死ぬほどの苦しみを耐たへて居たら、始終願ひも叶ひさうなことではないかへ。マアよく思案をして見な、發明らしいおまへ、だが思案の外の色の途、迷ひだしては他の人の、異見や理窟で得心の出来ることではあるまいけれど、袖すり合も縁とやら、思ひきはめて死ぬおまへを、身に引うけて助けるといふも、なか／＼深い縁、ちよつくりしたわけではあるまい。マア兎も角も死ぬ命を暫く私に預けなせへ。ト洒落た異見も實義の情、前後あとのまわからぬ娘氣にも、よう／＼合點が出来しと見へて、嬉しさもまた泪ながら、女「まことに御信切に有がたう存じます。モウ死んでも御恩は忘れませぬ。彌「是はしたりまだ死ぬことをいひなさるヨ。其様そのさまに手輕く死たがつてもつまらねへ。女「ヲホ、ト（笑ひ泣き）ナニあなたが夫程に被仰るから、マア死はいたしませんヨ。彌「さう／＼それがい、左様すると兩親ばかりか情人こいびともマア安堵といふものだ。女「イ、エどういたしましたして男のことで死ぬのなんのといふ譯ではございません。これには色々譯がございまして、つらい悲しい辛坊も、といひつゝ又も泣出せば、彌三郎ももてあぐみ、彌「マアなんにしても私と一件いっしやに船宿まで往なせへ。わりい様にやアしめへから、ヲイ／＼兼どんや、やう／＼とマア死なねへやうに相談をきめたア。こゝへ来て大きいもので一盃やらかして、そろ／＼遣てもらはふかの。兼「左様サ。いつまでも橋間にもやつても居られますめへ。ト言ながら

家根の内へ入り、提灯の蠟燭をつぎかへながら、かの娘の顔を見て、兼「ワイ／＼おまへは福本のお君さんぢやアござへませんか。女「ヲヤ。ト暫く船頭の貌を見て居たりしが、女「左様いふおまへは御隣家に居た兼さんかへ。兼「左様サ。女「ヲヤどうせうはづかしいねへ。彌「ヲヤ／＼兼公は心やすいのか。兼「エ、半田川の親分の隣に福本といふ料理茶屋がありやした。其宅の娘ツ子サ。彌「ハテナ夫ぢやア。女「エ。彌「イヤマア後の事さ。さういふ知ツた中ならなほのこと、見捨られねへ。いづれ今夜ア兼公の所へつれて往て、そのうへ何かの話も仕様、ノウ兼公兼「さうしてあげておくんなせへまし。彌「それぢやア直にやつてくんなせへ。兼「かしこまりました。ヤレ／＼とんだ事もあるもんだ。エモシ旦那、夜中のせへか大分寒くなりました。前後の戸をメやせう。彌「ドレおれがしめやう。ト（天井にあげてある家根船の戸を下しにかゝる）兼「ナニ／＼私わたくしがしめます。お前めさんは跡でおしめなせへ。松本の座敷といひ、船の中まで宜いことばかりあるものだ。彌「何をいふのだ、骨折のきほはするぜ。兼「イエその愚痴はござへませんが、お前めさんが食傷でもなさらねへけりやアい／＼といふことサ。彌「つまらねへこと斗り言ふぜ。兼「ヘン私わたくしが役は猶つまらねへ。ト戸を締めて橋間のもやひを解いて、漕いだす船の内にはヒツそりと。物静なる川浪も、心ありてや穩かなり。此時いづれの御屋敷に八ツの時廻り、河風

にさそひて。カチ／＼／＼／＼カチ。すだれをもれて娘の聲。女「うれしいねへ。船頭「エヘン、とヲリ、かアじ。

愛敬あいきょうを洗あらひあげたる己の刻は

垢あせぬけしたる美人なりけり

櫻川 由次郎

影清き月にめでゝや夜もすがら

寝たるも見えぬ浦の帆ふねばしら

狂詠舎 春 曉

第二編 序

そも曉の鐘の音も種々さまざまに聞く廓の耳。聞くを待あり。惜あはむあり千差萬別定めなけれど、彼奈可町の土地の言葉に、八幡鐘を通稱して、追出しと是を呼ぶ。洒落に命の袖せんだく養たくならば、汐水に洗ふもよけれど、棧橋さんす臨みを踐ふはづして深くはまる人少ならず。されば小舟に軽く乗つて、船頭に小縁こべりの世話をやかさぬ人は、親と女房と旦那に世話をやかせる身なるべきか。たとへ娼妓こどもに後朝きんぐの情を惜む實はあるとも、それ山鐘を追出しといふ心を解げて、其風俗に通じをつけなば、豈いかつけ登のぼせの愁あらんや。先哲の格言よく至りつくし教諭はあれども、本文亂行の所爲を穿ちて、異見とするにたらず。予著す人情本は、その言葉色情の事を綴るに似たれど、婦女を教へて不實の行跡おこななからしめん事を要とす。此故に數編の双帯一男二女或は三女に思はるゝ類をしるし。嫉妬を恥かしめ、女徳を守らするの一助とは

なせり。亦男子にも浮薄の縁を結び、末不顧不人情の所業をいましむるの辨を專にさとさしむ。看官よろしく讀考へて、勸善止惡の鑑となし、忠信孝貞の道自然應報の正しきを會得なして、身ををさむるの一品となし給へといふ。

干時天保七申首夏時鳥はじめておとづるゝ日

藍染川の小巷に筆を採て

江戸人情本の作者の元祖

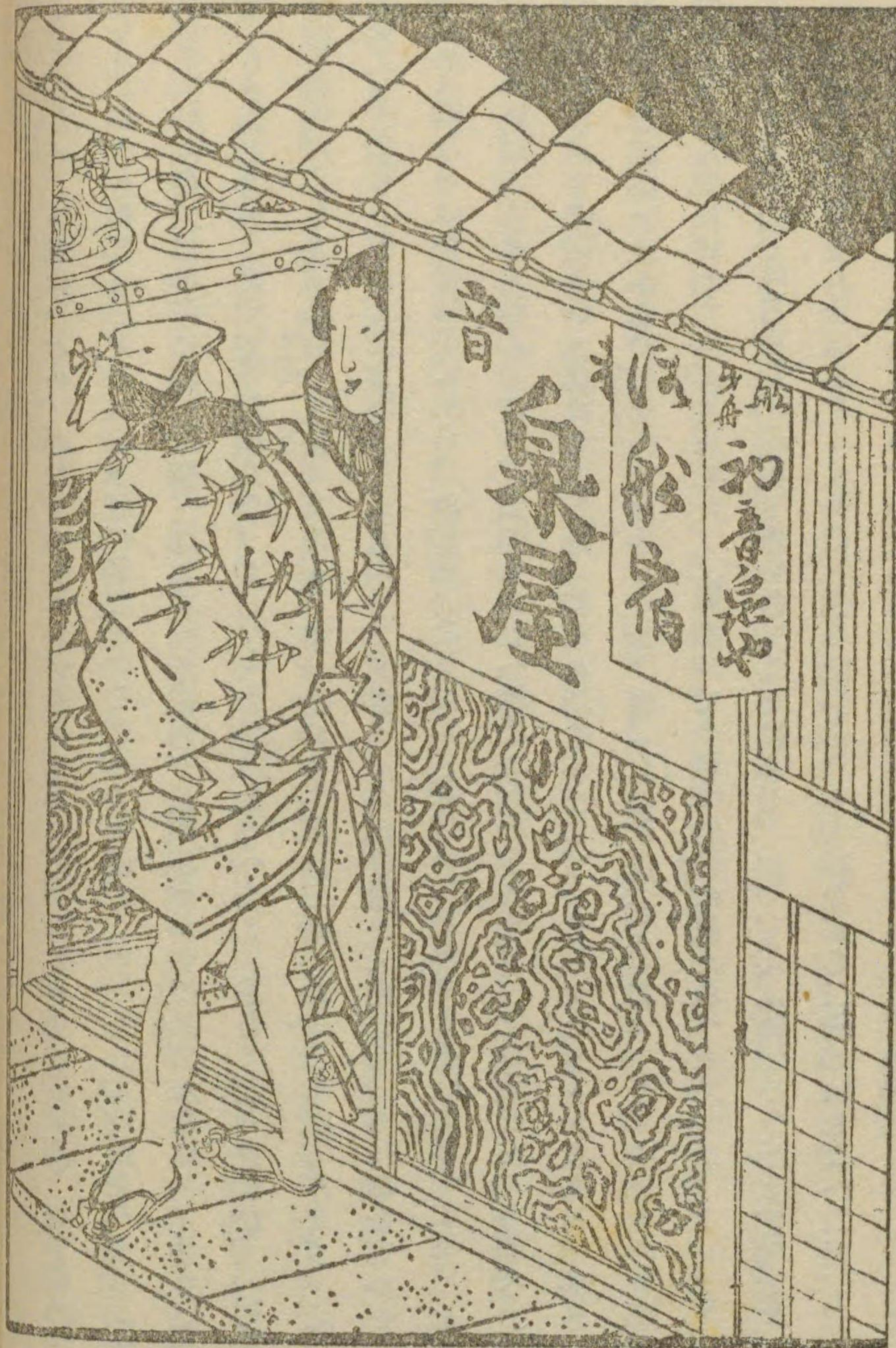
第二編 卷之一

第七章

月下氷人の所爲といはゞ、月考も悞る業あるか。そもく一個の通子たる、彼の彌三郎は、はからずも、松本の奇遇に秀八との戀情、既に百年の苦樂を互の心に發し、翌夜と契りたる言葉の露も干ぬ中に、またもあやしきのりものに、はからず身投を助くれば、豈はからんや正にこれ、天性の美人にして、類まれなる乙女なれば、浮薄に似たれど凡惱のやみがたくして、相いどむいたづら心を發しけるが、船は漸く船宿の河岸に着く。兼八は棧橋に船首を引つけ、兼「モン起して明させますから、チツト船にお出なせへまし。ト缺出して行く。兼「旦那がお歸りでごせへますヨ。トンくく。と叩けば、家内には女房お龜、かめ「アイヨ。兼どんか、今明るヨ。今夜アお遊びだらうと思つたから、ツイ寐たはな。ト言ながら戸をあけて、かめ「ヲヤ彌三さんはへ。兼「エ、まだ船にお出なせへますが、下駄を取りに參りました。かめ「ヲヤ旦那のお履物はどうした。兼「彌三さんのは有やすが、娘ツ子のごせへません。お前さんのもおかしなせへ。ト

(お龜の下駄をかりければ) かめ「ナニエ、娘御とは何のことだ。兼「今にわかりやす。その娘でどんなに暇が入ましたらう。ト(言ひつゝ河岸へ馳出してゆく。程なく皆々来る) かめ「ヲヤ旦那大層に夜が更けましたネ。今夜は是非おとまりになるだらうと存じまして、モウお茶も何も冷めましたから、今こしらへますヨ。彌「ナニ〜。モウ遅くなつたから、かまいなさんな。それに又無據連が出来てお氣毒だが、此子も止宿^{とどめ}してもらはなければならぬへが、いゝかノウ。かめ「宜うございますとも、二階が廣ふございますから、何所へでもおよられますヨ。ヲヤおまへさん。マア奥へいらつしやいませ。ト(言ひながら娘の姿を見る) 彌「おツかアがこの子を見て、不思議な顔をして居るヤツサ。女「御免なさいませ、大きにおやかましふ。かめ「イエもふお構ひ申ません。サアマアこちらへお出なさいませ。エ、モシ旦那へ、おまへさんマア此様な美しいお嬢^こを何處からお連なさいましたへ。油断のならぬへ。彌「ナニサおツかア怪くも、いやらしくも何ともねへのだ。其證據は此嬢^この形^{かたち}を見な。ソレ大略^{ていやく}ほどが知れたらう。おれが着物をかして着せて、此嬢の着物はびしよぐされ。かめ「ヲヤ道理で男の着物を着てお出なさると存じましたら、それじゃア棧橋^{せきばし}からでもお落なさつたのかへ。兼「ヘン棧橋^{せきばし}ぐれへならはいゝが、榮代の真中から眞逆様に落^{おち}こちだから、助けて船へあげると、それから直に旦那がおつ落^{おち}サ。かめ「ヲヤ

〜左様かへ。あぶないねへ。それでもよくお怪我もなかつた。おめへまた兼どん、氣をつけてくれゝばいゝのに。兼「フハ、ハ、河の何じやアござへません。かめ「そして何處だへ。ト(眞面目に聞けて兼八は挨拶に困る。彌三郎は笑ひながら) 彌「おツかア打捨^{うちちぎ}ておきねへ。兼公は今夜アどうかしたさうだ。兼「澤山だね。サア〜お休みなせへまし、寐むくなりました。かめ「ほんに御苦勞^{ご苦労}だツた。お飯^{いひ}でも給^{たま}て寐^ねな。ドレそのうち私は二階へお床でも敷て来よう。と、(二階へ上り暫くして下りて参り) かめ「サア旦那へ、お床を敷ましたから、お休みなさいませ彌 誠に時ならぬへのに來てから、お世話になるのふ。其代りしツかりとお禮をしやすぜ。かめ「ハイお禮は入ませんから、どうぞ氣のもめねへ様にお願ひ申ますヨ。ノウ兼どん、兼「ヘン今夜ア私^{わち}なんざア半殺といふ目に合やした。御用心なせへまし。かめ「ヲホ、ハ、旦那へ、私どもは獨身でございますから、何分^{なにぶん}お頼み申ますヨ。彌「ヲヤ親方はどうした。かめ「中島やの旦那と成田さまから鹿島様の方へ参^{まゐ}りました。彌「道理で今朝來^{あした}た節^{とぎ}に見えねへと思つた。ドレ〜寐やせう。アノ兼公や明日また稻荷横丁まで往てもらはふぜ。兼「ハイ、櫻川さんとかかね。彌「ム、此間由公に頼まれた返事をツイや日も忘れたから。ト言ひながら二階のはしごへ二足、三足彌「おツかア明日。かめ「ハイ、サアおまへさんも二階へお出なさいませ。お蒲團も敷てあります



ヨ。女「ハイありがたうございます。ト（口にはぐちぐちと上り兼たる娘氣を、察して氣轉の女房お龜）かめ「ドレ二階の勝手がしれまいネ。一サアお連れ申さう、お出ヨ。ト急立られて詮方なく、後に付添ひ二階へあがれば、女房お龜は差圖して、かめ「アレ阿所がお前さんの寐所だから、ゆるりとお休みなさいまし。トいひつゝ下りて行く。跡にお君はいとゞ羞かしく、きみ「最お休み遊はしたかへ。彌「イエ〜。まだ寐やせん。サアこゝへ来て一ぷくお呑な。ヤレ〜「マア危いことだツけのふ。おゐらの船がモウ少し遅いか早いかだと、今時分は其可愛らしい姿を海へ流されて仕まふ所だツけノウ。マアどういふ理で身を投げたのだからか話して聞せな。きみ「誠にモウ不思議な御縁で此様にお世話になりますから、おはなし申しますが、愚痴なことでございますから、どうもお恥かしうございます。彌「何でもいゝから咄して聞せな。どうで斯乗かゝつた船だから、おまへの死なふとまで思つた事を叶へる様にしてあげ様はな。きみ「それでも、どうも今じやア當のないやうな事でございますから。彌「當がねへとはどうしたもんだ。きみ「アノ私わがの身のうへ程、悲しい事ばかりあるものは、またと他にはございませうやいヨ。ト（是より段々の不仕合、まゝおやの邪見、また差掛りたる難義の心に契ひし操を破らじと、預けられたる悪漢の家を逃出して、身を投げしまでのことを話す。）

作者曰。娘の身の上咄しを永々しく記しては、必ず読み倦き給はんかと、恐れて記さず。追々言葉のうちに略してしるす。推量して讀みたまへかし。

彌「ヤレ〜「それぢやア幼年ちいさいとこから、苦勞ばかりしたのだノウ。そんなら兩親もなくなつて、今の親父といふが悪漢で、おめへを金にしようといふばかりでも、八重十文字に強慾をたくむといふのだの。そして其おめへを何所か奉公にやるといつて親に金を渡して、此四五日おめへを連れて往て置いた奴は何所だへ。きみ「アノウ何でも斯う下屋敷の様な淋しい所で、直にそこが私を置所で、私を妾にするといふ旦那の顔の恐しさといふものはネ。モウ〜「こわくツて〜、病氣でかう顔がくづれかゝつて居ましたは。彌「イヤそりやア大變だ。夫からとふ〜「その、ふことをきかせられたのか。きみ「イエ〜、それが否だから逃出したのでございます。彌「そんならまた死なすとも、マア親の所へいけばいゝ事ヨ。きみ「イ、エ、親父は私を今おはなし申した宅へ、夜つれて往て其宅からお金を受取つて構ひなしとかの證文を渡して、遠くの田舎へ往て仕まひましたは。そして鎌倉に居られぬ事が出来たさうでございます。彌「ハテナ宅をも賣て仕まつたのだと見えるノウ。その福本といふのは、半田川へ往かねへ以前は、仁田の春日の近所にゐた金貸ではなかつたかへ。きみ「ア、左様でございますは。よく御存じでございますねへ。彌「知つ

て居るところか、それぢやアおめへの實の家は、その裏に居た浪人で、堅田實之進といつたらうネ。きみ「エ、どうしてそれまで御存じで。彌「知らねへでどうするものか。おめへは確か十歳ばかり、私は十七八歳ばかりの時で、雨露丁の店の隠居所仁田の宅に居る時分で、よくおめへの宅へ遊びに往て、おめへを縁日や何かへ連れて往たぜ。ト（聞よりおきみは彌三郎の顔つくく打眺め、暫く考へてゐたりしが）きみ「それぢやアおまへさんは、仁田の峯さんかへ。彌「左様ヨ。おめへは其時分の名はおうたさんと云つたらう。ト（きくうちおきみは襟にかけたる守袋を取出し、上覆を取りて彌三郎の前へ差置き）きみ「峯さんならば、其時おまへがおくれの此守り、年のいかない時の心は、唯おまへがなつかしく、兄さんの様な心持でどうぞ逢ひたいと思つて居ましたが、段々年を取るに従つて何の因果か、戀しさが増つて來て、どうぞお前に廻り合て、私の思ひを知せたく、實の母入さんが、不斷戯言のやうに、おまへと夫婦にするとお言の事を、しきりに考へて、モウく何かど心細いにつけ是非おまへに尋ね合て思ふのみ、私の身にいやらしい奉公でもしたやうなことがあつては濟ないと、どんなに苦勞をしましたらう。このお守をお前の氣で、朝夕大事にして居たのを、可哀さうだと思つておくれ。ト（過越方の永々しき苦勞も、流石娘のことゆへ、言葉の足らぬもの語。彌三郎は夢の如く）彌「イヤそりやアマアとんだ話だ。

なか／＼夢でも此様なことがあるものか。他に話すと嘘だといはれらア。よし／＼これから氣を丈夫にしな。及ばすながら此末は、いづれ萬事を引請て力になつてやらうから。ト始終の事を語らひつゝ、寐る時には早や寅刻の鐘。ゴウ／＼と響きけり。

第八章

蓮葉の濁りに染まぬ心もて、なにかは露を玉とあざむく。そも泥水といやしめても、まだ心まで染やらで、清き流れと汲かはす、下行く水の契りさへ、其人毎になからんには、長き苦界をうきやかに、楽しみ過す日のあるべきか。されど嬉しき兼言も、かはる習ひの世の中を、恨みわび、戀こがれ、邂逅あふぞ人情の誠を顯はすものぞかし。こゝに何處の裏なりけん。立家古くふすぶりて、路次には蛤の殻のみ踏つぶせし大長屋の、隅の所に一軒の離れ家あり。これも同じく古家にて、傾く軒の目に立てば、くすれかゝりし庇うへは、物干さずとなりて不自由なれど、もと妓女屋の女隠居が住居し宅ゆへに、小庭造作附にて都合のよき貸店ゆへ、今も明店となる事なし。さて此家の主は何渡世か知らねど、内儀さんは年の頃三十二三歳、美しいといふにはあらねど、何れ苦勞人とか何とか、他の目につく婀娜な年増女。

玉袖の小辨慶少し赤味のあるこび茶、尤中古着に買ひし引解なるべし。胴は緋紅あざもみの古きを付裾廻しは花色眞岡の鯨さしにて一尺九分切ぐらゐなるを深く付。下着は袖のお納戸中形、少し若いつくりだといはれるを承知にて、紫の中形縮緬の襦袢の半襟、淺黄綸子へ緋縮緬を毛抜合せに付たる襦袢の袖、帯は妓女こどもが置流しにするといふを聞て、清させて貰ひし黒天鷲絨の巻帯なり。

木地色きぢいろに塗し箱火鉢はこびの際へ、しだらもなく座り。爪弾つまはじにて一中節いちぢうせつを浚さらつて居る。

小町少將 何所いづくをさして白玉か何ぞと人の問んには

「露となつて清すみえたいよ。ト入来るものは唄女の秀八。秀「おときさん。時「ヲヤ秀八さん、どうおしだ。四五日さつぱりお出でないネ。秀「ア、自然居士じねんが最少許ちうちつとだから、覺えてしまひたいと思つたけれど、モウくくく此四五日急に苦勞なことが出来て、じれつたくつてどうもくく鬱情ふさいでならないから、引籠ひっこで居たがネ。またよくくく考へて見ると、梅吉さんのやうに病氣になつて、死んでもつまらないと思ふから。時「ヲヤくく梅吉さんは可哀さうに死んだのかへ。秀「アレサ、まだ死はしないがネ。誠にかわいさうだヨ。どうもよくなりさうもないといふことだから。時「ヲヤ左様かへ。おまへの言様がわりいから、私しやアまた死でもしたのかと思つたヨ。能氣

前の子だのにノウ。秀「ア、さういふ中に私きやア姉妹あねいのやうにしたから、どうぞ快氣よきしてやりてへヨ。時「サア。ト烟草を付て出し「そりやアいゝが、おまへの苦勞は何だへ。急に出来たと云つちやアどうもおかしいネ。何だか早くお言なねへ。私わがが聞ても役には立まいけれど、膝とも談合とやらいふ事もあるじやアないか。ト聞れてさすが秀八も、答へ兼たる淺はかを、笑はれんかと恥かしく、暫く控へ居たりしが、莞爾わんじ笑つてやうくくに、秀「ナアニネ、他ひとにはなすも馬鹿くくしい譯だけれど、おまへだから咄はなすがネ。必ず笑つておくれでないヨ。時「ナニ何様なんなことだと言て笑ふものかネ。また如在どでねへお前のことだものを、よくくくのことことでなけりやア其様に苦勞にもしなざるまいから、たとへ何様なんな事にもしろお咄はなしな。秀「それじやアマア話すがネ實は私きやア此土地へ来て左様いふと自惚おぼらしいが、ついぞ人に出しぬかれるやうな目に合た事はないがネ。今度ばつかりはどうか遊ばれたらうと思ふがネ。それで居てどうも其人を思ひ切ることが出来ないが、自分で自分の氣が知れないヨ。尤も先まの人も差かゝつて氣休めを云つて、それぎりにするやうな不實な人でもないとおもつたがネ。マアどうしたんだか、其後少しう沙汰がないが、どうしたことだらうねへ。時「左様かへ、くはしい譯はしらないが、何に不依、よく知れるのは待乳山の墨色だらう。誠にどうも奇妙にあたるヨ。といつて狐や何かを遣ふやうなわけ

でないから、不思議なことはないけれども、待人だの、走人の方角だの、善悪の日繰だのといふものは、誠にモウ／＼急度當るヨ。秀「ヲヤ左様かへ。私も見てもらひてへのふ。今から直に聞にやられるかへ。時「ア、やられるけれども、先へ行付時分にやア日がくれるだらうと思ふヨ。秀「左様かネ。それじやア明日の朝早く誰ぞ頼んで遣つておくれな。何といふ人だエ、直知れるかねへ。時「ア、私しやア一度往たがネ。表門の鳥居の内だネ。秀「聖天さまのかへ。時「ア、待乳山のサ。聖天町の方から往と左側で、花井觀光と云ますは、秀「ほんとうは私なら私が往つて、直に人相を見て貰ふといふねへ。時「ア、なに墨色でもよくわかるヨ。しかしおまへが其様に氣を揉む位ぢやア、餘程いゝ情人男だと見えるネ。秀「ウフン。ナアニさうでもないがネ少許以前から譯があつて知つて居る人でネ。時「左様かへ。ト云ながら、三味線を秀八の例へさしよせ、「サア仕舞の所を弾ておみな。モウ大概出来たぢやアなかつたかへ。秀「ナアニまだだヨ。そして其くツたくで何もかも忘れてしまつたは。時「ヲヤマアあきれた惚氣だねへ。いふ折から、障子の外より「お時さんお宅かへ。時「アイ由さんか、お寄りな。トいふ聲を聞いて靜かに障子をあげる櫻川由次郎、當時善孝の跡つぎ、親より増りて愛敬あるはやりつ子。由「ヲヤ秀八さん。何かしんなお咄しかネ。秀「ア、五の大目だとサ。ホ、ホ、。由「イヤほんに咄しにおの

字を付る、かへつて不人品だネ。トキニお時さん、彼旦那はへ。時「ア、まだゞがネ。今日は是非お出の筈だヨ。それに、ト二階を指さし、時「案じきつて居るからネ。トにつこり笑ふ。由「いま／＼しい。ト（小聲にいふ）時「後に來て御覽な。由「さうサ今日は今ツから壽樂と約束の所へ出かけるから、いづれまた來やせう。宜しく。秀さん御ゆるりと。秀「マアおあそびな。ト（いふを聞つけ路次を出ゆく）秀「ヲヤ二階に誰か居るのかへ。時「ナアニまだ子供だがね、少し譯があつて預かつて居るのサ。トいふ時二階にて足音して、上口より小聲、「姉さん。時「アイヨ小用かへ。誰も遠慮な人は居ないヨ。今のうちにお出。トはしごの側へ立て行く。二階より下り來るものは、いかなるものぞ。

歳齡十六ばかりにて色白く、眼すゞやかに唇紅のごとく、髪は三四日の持髪と見え、びんのほつれて横顔にかゝる美しさ。何れ色氣の苦勞ありと見え、涙の目もとに嬉しいやうなる趣、尤も俄に調へたるか、少しうつりが悪いかとも思はるゝ衣類、上着は七寶つなぎの御納戸中形の太織の小袖、黒朱子の半襟、下着は山繭縮緬紫の棒縞二ツ、いづれも花色の裾廻し、緋縮緬の湯もじ、板々縮緬の襦袢、小緞子へ緋鹿の子の割の入たる七寸幅の帶、尤も肩縫あげのあるこしらへ、杜若のお半には少し形が大きく見ゆる娘、はづかしさうに二階を下りて、

縁側へ出で雪隠へ行く。すべて女房お時が大事に介抱して置く有様、宜しく推量あるべし。さて再び二階へあがりければ、お時はもとの所に來る。

秀「誠にかはゐらしい、美しい娘だねへ、どうしたんだへ。時「ナニ私の前年わがきまへから心やすくした人が、連て來て頼んだかね。種々いろいろとむづかしい引かゝりが有るので、先へ渡りを付るのがひどく面倒だといふことだが、どうなるか。何でも娘もそのお方も氣ばかりもんで居るはネ。秀「アノ娘ぢやア随分氣をもんでもいゝねへ。定めて男もいゝ男だらうね。時「ア、好漢しょうかんとくだけれども、歳が餘程よほどちがつて居るヨ。そして男の方じやア可愛がる中うちにも、少し異見をいふ様な事もあるからしつかり知れないがネ。モウ／＼娘の方では、若も其人が二の足だと直ちかに死ぬと云つて居るが、ひど、ゝ、ゝ、んだぢやアないか。秀「ヲヤ左様かへ、憎いねへ。そして二階へとまるのかへ。時「ナアニ基そ様ななことはないヨ。それにあの子を連て來てから、まだ一度しか來ないから、くはしくは知れないヨ。そりやア左様と、おまへの氣を揉んで居る咄はなしは、どういふ事だか、まアそれをおはなしでないか。秀「ア、是非おまへに話して智慧をかりて、私わがの思案をよく極めなければならぬは。ト話の所へ聞ゆる淨るり。

「どうぞ二人がこつそりと「深山の奥のその奥のぐつと奥の佗住居「町人さん見たやうだよ

「おきやアがれ「にくいぞへ「そふした黄菊と白菊のおなじつとめのその中に「きりと呼るゝはかなさは「年のあくのを待かねてヤツぱりしたばとよばれたく

時「女房になると所帯じみるからいけねへけれど、とかくしたばになりたがるヨノウ。ト笑ふ。秀「ナニ女房にならずといゝが、どうぞ便りになる人があればいゝな。時「ヘン左様おとなしくして居られゝばいゝけれど、便りになる人は此方も慾で、亭主にしたくなるはネ。トいふ所へ來る好漢、障子を明けて「お時さん。時「ヲヤ／＼、サアお上んなさいました。たツた今お噂を致しました。トいふ時、秀八は顔ふり向け男の顔を見て、秀「ヲヤ。トびつくり、男もまた「ヲヤ秀八さんかへ。ト當惑。これ此男は何人ぞ、かの秀八がしたふ彌三郎なり。二階の娘は身を投しおきみなり。秀八のびつくり、彌三郎の當惑、看官みかんよろしく察し給ふべし。

門人春雅曰。予師狂訓亭例の走筆をもつて此段を綴り、一冊の稿成て後、門人等左右にむかひ子弟此次の案をなすべし。秀八お君彌三郎三人の落着いかにとするや。予答ていふ、彼梅ごよみなるお蝶米八に困給こむはずや。先生こゝに笑つて筆を置れたり。

狂訓亭春水門人

狂言は春雅

第二編 卷之二

第九章

思ひがけなき出會おちあひに胸突合むつあひす互たがひの心、お時は如在のなきものなれど、神ならぬ身のそれぞとは、さすがに知らねば彌三郎にむかひ、時「モシマアおまはん、何様どうなすつたのたへ。お君さんがモウ／＼案じて／＼／＼どんなに氣を揉んでお在だらう。早く二階へ往つて、マア顔を見せておやんなさいまし。トいはれてハツト彌三郎、返事もならぬ此の場の始末、何となしてか秀八に、言譯なさんと胸算用、秀八は先刻よりくはしく聞たる娘の身の上、その相手なる男をば彌三郎とは、なか／＼思ひも付ぬ事なりしが、此時始めてそれと知り、餘りの事に思ひがけねば、たばかられたる悔しさと、お時へ對して恥かしさに、面目なければ顔を反そむけ、こらへ兼たる涙の露を、膝へはら／＼身をふるはし、立もた／＼ぬ女氣の、やるせもなくぞ見えにけり。夫とも知らず二階にては、こがれし男の聲を聞いて、直に二階へ上らぬを待兼て階子より、そつと覗けば彌三郎の、膝のほとりに泣く唄女うたひめ、側にお時がふしん顔、子細ありげに見えければ、猶も容子を窺ひ居る。萬事よろづの道

に發明りつみにて拔目ひきめあらざる彌三郎も、堅く誓ひし翌あつの夜の、その約束をうち捨て、程遠からぬ此家に、情回わがある娘をあづけ置き、楽しみらしく來るか、と、推量すいりやうさるゝも無理ならず、何と言出しよろしからんと、途方にくれたる當座あたうざの難義、もじ／＼するを漸しだくに推量すいりやうりたお時が思案、表へ立出、「彌三さんちよいと。ト呼出し、明地の所に佇みながら、彌三郎と暫さく低言ひご。また家内にては娘と唄女、見あげ見下す二階と下、双方ともに發明りつみゆるゑ、こゝぞ大事の手管てくだんぞと、心をくばり默然もくねんたり。お時は彌三郎の胸を細やかに承知しやうちて莞爾わんじと笑ひ、時「おまへさんもマアむしがいいねへ、憎らしい。それぢやア兩方共に何處までも放さない氣だネ。彌な「何分なにぶんよろしく後生ごせいだからト手を合せる眞似まねをする。時「そんならばマア秀八さんの方を先へ、何とか談合だんごをおしな、角かくの宅うちをちよいと借りて上るからネネ。さうしてマア秀八さんの方を何とかこちつけるサ。二階の方は小兒こゝれだからどうでもなるはネ。彌な「なんにしても秀八の方が大變だ。ト（溜息を吐きながら長屋の角なる獨身ひとりものゝばアさまの家へ行く）さてお時が計ひにて腹を立ち歸らうとする秀八を、彌三郎の入りし角の家へ無理に押込む。この家の老女は何方どなたへか出てゆく。お時は自分てまへの家に歸りてお君を程よくだまして置くと知るべし。また彌三郎と秀八は暫さくだんまり、秀八は涙をわる紙にて拭ふて溜息ためいきについて居る。はてしなれば彌三郎は秀八に向ひ、彌な「秀さん此間は約束を間違まちが

てから誠に申譯がないがネ。實に今日か明日はおまへの所へ訪ねる氣で居たが、種々と取込が有て、ツイ今日までお尋ね申さなから、必ず悪く思はないで、堪忍しくおくんなせへ。ト有める心にていへば、秀八は少し腹の立し風情なれども、まさか端たなく言んも恥かしく、秀「イ、エどういたして、折角楽しみにしてお出なさつた所へ、とんだ邪魔ものが参り合して、さぞじれツたいとお思ひだらうのに、何もモウ私に御心配はいりませんものヲ。しかし私ほど果敢ないものに七場所は愚か鎌倉中に、もう一人とは有ますまいヨ。なぜ此様に馬鹿に生れついたらうねへ。誠に美しい娘でございますねへ。あの様なお楽しみが在とは知らず、毎日く待たされて、上句の果には、お時さんの所へまで惚氣咄しをしに來ると此始末で、私きやアモウくどうも恥かしくつて、穴へでも這入たい様だは。彌「ナアニ決して左様いふ譯ぢやアねへはネ。おめへに別れて歸る途中で、ト

船中の事より、以前心やすくせし人の娘なりしことをはじめ、當時さしかりたり難義、なか／＼色情の譯にあらざる由を、嘘半分ながら詳しく咄して、只當時の難を救ひ遣はすのみと偽はりて、やう／＼に少し氣を解けさせ、

彌「ノソレ、其譯だから、無據世話をしたのだアナ。よく考へても見なせへ。例へどうでもま

だからツきりの子供だはネ。秀「さうさねへ、年はねつからいくまいが、色氣のある男好のする憎らしい子だから、おまはんの身になつちやア可愛くつてたまらない様だらうねへ。彌「ナニつまらねへ。私だと言つて、おまへの極意はしらないが、元を正せばお主なり、またよく／＼深い縁があればこそ、兩方共に夢にも知らずに居て、風と出合た松本の奥座敷。凡夫の所爲とは思はれねへ。是非始終の所はと己惚た心から、五日や三日約束の日が違つたといつて、それを氣まづく思ふ中でもなし。マナさしか／＼つた他の難義をすくつてやつたから、則おまへや私の爲に報ひもよからうと思つてした事だから、どうぞ悪く思はねへで、秀「ヲホ、おまはんもマアいゝ加減な氣休めをお言なねへ。他に情人をこしらへるのが、何で私の爲になりますものか。しかしあの様な可愛らしい娘を情人におこしらへても、まだ私の方の約束も間違まいとお言のは、出合がしらの出たためでも有ませうが、どうした因果か此間から、お出でないのは騙されたと思ひながらも、腹の立ほど戀しひのが募るといふも、私の一途な悪い癖だヨ。ト跡は涙に晴返り、疊へうつぶしに成て泣入れれば、彌三郎はもてあまし、脊中をさすりながら、彌「コレサく／＼秀さんおまへも才智な癖に聞分けの悪いことだ。たとへ何様な事があつても、憚ながらおめへを見捨るといふ様な、不人情はしねへ私だ。コレサ機嫌を直してマア私の言ふ事を聞て。トいふ折から障

子の外、時「秀さん。お秋どんが片息せいきと言って呼びに来たヨ。確か尾花屋ださうだ。往かざア悪からう。ト言れて秀八詮方なく、秀「ヲやお時さん。お秋どんは歸りましたかへ。時「ア、。秀「夫じやア直に往ますヨ。ト心残して立上れば、彌三郎も心にかゝり、彌「それじやア今にこゝを片付ると、それから直に又山へ往て待つて居るから、今夜ア急度間違なく。秀「ヲ此間のも私わがが約束を間違たのかへ。彌「ナニ左様ぢやアねへが、おめへが腹を立つて居るから、口を付けても来てくれまいと思つてサ。秀「今もいふ通りネ。腹の立ほど戀しいから、悔しいと思ひますヨ。ト帶仕直して立出るを、彌三郎は引止め、小判と小粒を交せて五兩ばかり紙に捻り、彌「後に合た時に何かの咄しを仕様が、マアこれを先へもつて往て、何かの都合をよくして置てくんな。ト秀八に渡す。秀八は手に受けて、秀「なぜへ、おかしいねへ。彌「ナニサ金でどうこふ言でもないが、マア一時いつときも早く座敷を逃げて来るやうにするにも、何をどうするにも、それで幕があく様にならうかと思つてサ。マア早く往て、早く明て来るやうにしてくんない。ト（抜目なきはからひに、秀八は愈々惚れ増り、涙の貌に莞爾と寄添ひ）秀「それぢやア後に急度きんごだヨ。彌「どうぞお願ひだヨ。ト兩方が同じ事を言つて別るゝ惚れた同士。秀八は障子をあけて出ながら、秀「おまはん。またお時さんの二階に晩まで居るのかへ。彌「エ、ナニ、まだく種々いろいろ用が支へて

居らアう。秀「うそをお吐な。あそこに晩までお居でぢやア今夜もいけねへ。ト突倒すやうにする彌「馬鹿アいひねへ。こんな婀娜な女房をさし置て、何がおもしろくツて他ほかへ手を出すものか。秀「ヲヤしらぐゝしい氣休めだねへ。ト口にはいへど心には、女房といはれしその嬉しさ。自然と顔に顯はれて、後を樂しみ歸り行く。

そもく彌三郎が秀八の氣を休めんとして、金を遣はす事いかゞなり、秀八もこれを預り歸るは、甚しき野卑ならずやと、この稿本を見て難するものあり。予答へて云、これ人情に疎き批判なり。凡そ中以下の人の實意を早く知るは金銀なり。別て川竹の瀬に立つ身の上を哀れむは、金をもて救ふを第一とすべし。さればとて人の誠は金銀にて知るといふにも限らず互に誠を盡すに至りては、不自由を厭はず、貪苦を忍び、末の松山波こざじと契るが眞の實情なるべし。されどもそれは男女とも互に誠を盡し合ひ、殊に男は身分相應に女の力となりて悦ばせ、紋日もの日も他並ひとならみにして遣はして安堵させ、さてその後は善惡に付て丹心まごころも知べきのみ。嗚味人情のさもしき事、今も昔も同じけれども、凡そ君傾城の身の上を何と推量りて客人まろうとは通ふやらん。それ唄女うたいむすめも妓女こどもの身も其時其日の勤料は残らず親方のものにして半錢はんせんも妓女の身には付ず、たとへ其始め身代をとりて勤める今日の雜費をいかにせん。それを知

らざる人もあるまじ、知りつゝこれを哀れまず、女に立引せるなど、はかる所の若人は、誠に憎むべき白徒なり。それ契情に誠はあれども、客人には丹誠なし。又誠があれば阿房らしく馬鹿にされて情人男の仕送りをする事もあらんか。よく用心して後、情を深く女をくるしましむることなきを眞の情人男といふべきか。

第十章

紫式部は藤の式部と號し、上東門院の女房なり。越前守藤原爲時の娘にて、右衛門佐宣孝に嫁いて、大貳の三位を生り。或時齋院より門院へ珍らしき双紙やあるとお尋ね有しによりて、紫式部にその由を仰せありて求め給ふ。茲に於て紫式部は石山寺に參籠せしが、折ふし八月十五夜の月の湖水にうつりて心も澄渡り、物語の風情心にうかみければ、まづ須磨明石の兩卷を綴り、それより次第に書添へて五十四帖になして奉り、後に六帖を加へ源氏物語六十帖といふ。和語の双紙いづれはあれど此物語に過ぎたるはあらじとぞ。君「ヤヤ」こりや田舎源氏の元を見るやうなものかねへ、伯母さん。ト言ながら脇を振向て見て、君「ヤヤ伯母さんはいつの間にか、下へおいでださうだ。私きやアおまへさんのこゝへお上んなさつたのを、少しも知りませんは。彌

なんだか一心に讀で居たの。君「ナアニコゝに有ましたから讀で居ましたが、百人一首の中にある女の名の人の事が、いくらも書いてありやすは。彌「ドレ、ハ、ア賢女か。そんなものを見て、その上に才發になると仕様がねへ。モウ本はいゝにしな。君「どうして本を讀だといつて、賢才になりますものか。今お出のおまへさんの内室さんになる唄女衆の様に、婀娜には生れかはずともならはしませんは。誠に人品がよくツて、好風でございますねへ。彌「ナニとんだ事をいはア。ありやアおみらの元の主人の娘で、今ア葉地間の旦那が世話をして置く唄女衆だテ。仲々おみら達の齒はたゝねへ。そして最春になると別荘の方へ引とられて御内家さん同前になるのだ。君「ヲホ、、啞ばツかりお吐なさいまし。今おまへさんと、アノ秀八さんとかと、角の宅へおはいりだから、私きやアこゝの庭の方からそつと廻つて、あそこの宅の地境の口から穩れて覗て居ましたら、おまへさんが秀八さんの脊中をさすつたり何かして、そして其かはいらしい眼元をなさつて、あの唄女衆の横顔を、さもく可愛と云やうな顔をして、覗て見てお出なすつたものヲ。ト笑ひながらいふ。是全くの啞なれども、發明の娘ゆるゑ、彌三郎と秀八のけしきを悟り、殊に我身の事より口舌もせしならんと推量して、程よく言まはしたり。彌三郎は既に秀八が爲に胴氣を抜れてより、お君が方をも苦勞にしてこゝへ來りしゆるゑ、計られるとも思はず、實に家間

より覗かれたらうと、言解にまご／＼する。

七四

それ貴賤上下の隔なく人情皆斯の如し。萬事に如在なき男といへども、惚たる女にかゝる時は歳増女はさらなり、遙に年下なる小娘にも、戀路の智慧ははるかに劣りて、立派なる好漢もお半に等しき小女のために、あげ足をとらるゝものなり。

此時下よりは彌三郎が誂へしと見えて、台の物酒飯などを仕出屋の男に、階子の中段まで出して貰ひ、お時は上の段にて受取、時「ライ／＼岡本／＼。障子をめて往てくんなく。ト言ながら、台を彌三郎の前へ出して、時「サア、マア一口あがつてお君さんの方へも、よく訛言をおしな、ねへお君さん。ト笑ふ。お君も莞爾と笑ひ、君「姉さんまだヤツぱりしらを切て、隠してお出でございますは。時「左様かへ、憎らしいねへ。彌アさんとても、最此子も秀八さんも一方ならず發明だから、兩方へ隠さねへで、そしておまはんも蔭日向なくといった所が、彌三さんは以前から新嬢好だから、どふしても此子の方へしか團扇は上るまいねへ。さうすると私がまた秀さんへ氣の毒だヨ。(お君は心に嬉しがるべし。このお時が言葉うまく言廻す才智ならずや)彌「ナニそして秀八の方は實は少し頼まれたことがあるので、おぬらと深い譯のあるといふのではねへはナ。時「アレサ左様いふと、かへつてわるいはね。何でも私のいふ通りに、さツぱりと明してす

るがいゝぢやアありませんか。ノウお君さん、おまへの氣はどうか知らねへけれども、今さら何方をどつちとも出來ねへわけだから、マアお君さんと秀さんと近付にして、ならふならば姉妹分になるとか、何とかして、和合するといゝねへ。君「イ、エ、どうして峯さんの氣じやア、私をかはひがる了管はないヨ。時「峯さんとはへ。君「ヤヤ私きやア彌三さんの子供の時の名を、ツイ言ひましたは。時「ヤヤ／＼それじやアおまへも久しい馴染だネ。憎らしい彌三さんだヨ。私も三四年以前に、あぶなく惚れる所だツけ。今思へば情人にならねへで仕合。あの時惚たら此節はどんなに氣が揉るだらう。君「ヲホ、、、おかしい姉さんだねへ。(此話の内に盃のやりとりありと察し給ふべし)時「サア彌アさん。最私きやア呑みませんヨ。おまはんも又今にお飯にして其時おあがりな。下へ往てお茶をこしらへて來るから、彌「マア／＼最一ツサ。そしてお茶は此子がこしらへても出來るはな。時「フウム側を離したがない癖に。君「ヤヤ姉さん、左様じやアありませんは。とんだ厄介ものを引請たといふ心で、否がつてお出だヨ。時「イエ／＼そんな言譯をせずともよひヨ。ドレ早く氣をきかして下へ參りませう。君「アレサ姉さん、お茶は私がこしらへますから、おまへさんはマアもつとこゝで御酒をおあがんさいなねへ。時「ナニもう多分給たヨ。そしておまへは下に居ちやア悪いヨ。ひよつと掛合の人でも來ると大變だか

七五





ら、日中の間は二階にお出ヨ。私しやア夜おまへを湯へつれて行くにさへ、何様にか苦勞だ。前後を見ながら、びく／＼して往んだは。彌「イヤほんに左様いふのを忘れたが、最この子の身上は、さつぱりと正札をして貰つて、少許ア金も遣つたし、其上に構ひなしの證文までとつたら、モウ／＼何所からも指のさしてもないから、安堵しておくんなせへ。君「ヲヤ／＼眞正でございますかへ。嬉しいねへ。彌「おめへの咄しに行衛の知れねへと言つた實の伯父さんを尋ね出して、その店請人の判迄取つたから大丈夫だ。おめへをつれて往た屋敷でも、何でも根こそげ、詮穿して片付たから案じなさんな。時「そりやアマアよかつたねへ。それぢやア最日中外へ出ても氣づかひないヨ。君「誠に嬉しふございますは。ト思はずも彌三郎へ平身をする。彌「ヲヤどろした。虫でもかぶるのか。ト脊中をさする。君「アレ虫がかぶりはしませんヨ。餘り嬉しいからネ。時「ヲホ、、、おじきをしたのかへ、おかしいね。イエしかしそれでマア肩身が廣くなつてよいねへ。サア／＼それぢやア最世間晴れて彌三さんの御内室さんだ。といひながら立て、お君を彌三郎の側へ押倒す。此時又も隣家にて稽古の淨るり、

「神やほとけを頼まずにきりもへちまの合かは羽折合おやぶんさんのお世話にてわたりもつけてこれからは世間かまはず人さんのまへはゞからず引よせてたのしむ中にまた外へ

君「ヲ、いやな辻占だ。時「ヲヤ／＼淨るりの文句まで嫉妬かへ。それぢやアマア差向ひで、

彌三さんを思入いぢめるサ。ドレお茶をこしらへやう。ト笑ひながら階子を下りてゆく。

淨るり「なぞとあいつが得手もの、素見唄を夕薬師色観音や媒人の地藏の顔も三度目は道行

氣どりで二人連。

彌「同伴に八幡さまへでも往うか。君「どうして私をつれてお出なさり得るものかね。秀八さんならば手を引合てもお歩行だらうけれど。彌「ナゼ／＼、秀八は唄女だから、賣もの買ものだアな。亭主が女房の手を引て往のに、誰か何といふものか。君「ア、アレサ姉さんが、彌「茶をほうじて居るはな。君「ヲホ、、、アレ御酒がごぼれますヨ。彌「コレサ／＼酒がいやなら否でい、から、そんなにさう／＼しくしなさんなヨ。無理に吞せはしないから、サア／＼この肴を下へもつて往て、お時さんと同席にやらう。君「お時さんとでも、秀八さんとでも、好きなお方と同席におやんなさいまし。どうせ私きやア、小兒だから、おもしろくございませんは。彌「コレサまたそんな愚痴をいふヨ。サア世話をやかせねへで、今日は先づ目出たく掛合の濟だ祝ひにひとつ、サア／＼といふのに。君「それでも最こんな顔がてらくしますものを。彌「サアそれだから少しといふのに。サア情の強い子だぜ。どうしても否か。君「それだつても、モウ後にだ

といふねへ。そしてもうおまへさんお歸んなさるのかへ。彌「ナアニまた用を足してから來るのサ。後はともかくも、今マアひとつ吞せねへぢやア氣が濟ねへ。君「アレサそれぢやア吞ますヨ。ヲヤ／＼おそろしいお酌だねへ。彌「爛がつよすぎるから、火傷やけどをするだらう。君「ヲホ、、、おかしいねへ。ト可愛らしき聲にて笑ふ。此時下にてお時の聲、

時「ヲヤお銚子が倒れでもしたかへ。下へ何かボチ／＼と漏て來たヨ。どうせうのふ。ト
雑巾ぞうきんをとり立つ。

第二編 卷之三

第十一章

終南しゆうなんの處士都門に入る。少室の山人諫垣かんげんに補せらる。その隱逸といふにはあらねど、千田木村とかきこへたる都鄙の境の一町いっまちの、淋しき草屋の中にしも、別けてわびたる茅が軒、傾く運の人住むとは、いはでもしるきその風情、主あまじが素生は相應に、他も知りたる富家ふけなりしが、漸しだい々々に身上衰へて、家藏も他へ譲り、十年とせ以來このま此里に、ひそみて親子三人が、かすかにも活業よをわたるには、古金類紙屑ちりくずなどを賣買うりかひなす鵠かく三といふものあり。妻を秋と呼びけるが、貧しき中にいさゝかも末を樂しむ娘を育て、名をお梅ととなへ今年は十四才となりけるが、其容美麗すがたうるはしく、また志操こころづかもやさしくて、父母に孝行なり。されば三個みたりが睦しく此年月を過せしが、ある年の初秋のはじめ、鵠かく三は風邪の病ひにうち伏て、醫藥療治の手を盡せど、定業の故なるか、終に重き枕となり、やがてぞはかなき鳥邊野の烟と消えて哀れにも、残る娘の悲しさは、何にたとへん方もなし。殊に貧しき中なれば、萬に付て心を惱まし、お梅が父をしたふより、歎き彌増いよます涙の雫、それを手向の水とし

て、七日／＼のとも吊ひ、いと幽かすかにもいとなみけり。かくて歎きの果しなければ、泪にのみ過すされねば、お秋は後家の助業かたわきに、近き邊ほとりの人々を頼み、そゝぎ洗濯の賃仕事などをなすといへども、なか／＼親子の活助よすけとならず。今日は過れど明日はまた、朝飯あさけの烟り心と共に、いと細／＼と立かぬる三度の食も一度二度、哀れはかなき身のつゞれ、肌も薄く冷やかに、夜寒よさむを凌ぐ藁屏風、いとひ兼たる賤が家は、雨はもとより月の影、枕にさして物すごく、壁の破れし間あひまより、つゞれさせてふ虫の音も、耳かしましく寝ねられず、梅「モシ母人さん。お前寒くはございませんか。母「私はいゝが、おめへが寒からうヨ。モシ寒くつてならずば此襦袢を肌着に、寒さにあたつて煩ひでもするといけないヨ。梅「イエ／＼私はわづらつてもよいが、おまへが煩らふとならないから、苦勞でならないが、なぜマアこんなに今年ことは寒いねへ。いつも此様ではないと思ひますねへ。母「ナニサそれといふも正は薄着だからの事だヨ。私は老女としよりのことだから、死でも煩つても大事ないが、生前せいぜんの永かれと思ふ其方は、どうぞ煩はぬやうにしてくんな。それが何よりの孝行だヨ。しかし思へば可哀さうだヨ。浮沈うきしづみは世の中のならひとはいふものゝ、常住ふだんをなたに咄した通り、故人こじん爺さんは、随分相應な身代で、他人にも尊たてられた家であつたのに、商ひの損が續いたり、火難に遇たりして、終に此様な場末の町へ引込んで、誠に恥しい今の生活。梅「その時分には奉公

人でも有たのかへ。母「あつた所か、人も大勢居て、女も二人三人つかつたのサ、それに引かへて今はマア、節句が來ても、物日でも、其方に着せる晴衣裳はれぎぬもなし、破れ布子ぬのこに木綿の帶、髪さへろく／＼結せもせず、紅白粉はつけぬものとあきらめて居る心の中、美服いせものを着た他家の子を見ても羨しいといふ顔もしないで、おとなしくして居るのを見る度に、いつでも心で泣いて居ても、口へ出さぬその苦しさ。それに其方そなたはおゐらア大事にしてくれるから、どうぞして他並ひとならみに髪も結むすして、紅白粉もつくろはせて、是が我子ぢやとか、娘でございませすとか言つて、心易い人に見せたら、何様どなたにか嬉しからう。昔が今であるならば、親のよく目か知らないが、十人並に勝れた其方、榮花はせずとも當世の、流行小袖はやりを着せる位は、何でもないので、悔しい浮世だ。ト子の可愛さに繰言も、かへらぬ昔口説くどきたて、思はずこぼす涙の雨、お梅も共に歎きしが、母の心を慰めんと、梅「アレ母人さん。又過ぎたことを言出して、泣いておくれでないヨ。私きやア美着物いせものを着までも、おまへの側に居て我儘をして居るから樂でよいヨ。來日あつげまた宜時いときもあるだらうから、其様さまにお歎でない。氣色きしよくが悪くなるとわるいヨ。ト諫むる其身も夜寒の風に、さすが寝られぬ小夜中に、こらへかねて起き出つゝ、梅「母人さん。今夜はいつもより寒い様だからネ。火爐あつりでチツト火を焚かう。おまへも起ておあんなさいヨ、ヲ、寒さむ／＼。ト思はずも言ふて、母への氣毒に

ハツト心は付ながら、さて付兼し火打箱、爐にくべたりし木の葉をもつて、餘義なくうつす燈し火の、影さへうすき佗しさも、やう／＼もゆる火の陽氣、母も床より起出て、母「親子とはいひながら、いつも／＼其方のやさしさ。誠に氣の毒だ。梅「アレまた其様なことを、おかしいねへ親子の中で他人らしいことをお言でないヨ。そしてネ、私わたしやア此間こゝから左様思つて居るがネ、どうせ仕合の悪い母人さんや私だから、いつそのことに、私が奉公にでも出て、おまへに樂をさせたいヨ。ト涙をこぼしながらいふを、母も聞つゝくもり聲、母「なんのマア、そなたが奉公に出たとと言っても、まづ着物の二ツや三ツはなくつてはいけないはナ。梅「イ、エ、アノ女郎やへ往には不斷の儘まんまで行て、お金も少許ちつとア余計にとれるではないかへ。ト貧苦を助けんその爲に、身を賣らんといふ子心を、聞にも不便べんさ限なく、いよ／＼涙にくれるけるが、母「どうして其様な奉公がさせられやう。たとへ親子が袖乞をすればといつて、女郎にしては亡人むしやう爺さんへ對しても濟ないはな。第一其方を手放しては、私が三日も辛坊して、一人居られるものか。モウ／＼其様なことは決して思ひなさんなヨ。ナニ／＼最其方さいきほうが一二年立たうものなら、たとへ裸でも何でも、相應な口の所いどころが何程も出来るはな。ト互に心を慰さめても、慰さめかぬる小夜嵐、身に染々と更け渡る、鐘を算へて明しけり。かくて或日のことなりし、お梅は門かどに洗濯の張ものなして在けるが、

肴戸口の井戸に水を汲む、母を呼びつゝ勝手口、梅「母人さん／＼。母「ヲヤせはしない。何だへ。今いくはナ。梅「アノウ竹さんがお出だヨ。トいふ時、母は前垂にて、手を拭きながら、水仕元へはいり、母「ナニ作さんとはへ。梅「アレサ此軒こゝ並に居た古道具屋の、ソレ私と申よく遊び／＼した竹坊さんサ。母「ム、ウ、先年中奉公いづかぢに往たと聞た道具やの竹坊さんか。ヤレ／＼それは。ト立出る。表の方に佇たずむは、十五六なる若衆の子。松坂縞に茶裡の布子、小倉の帯を胸上りに結び、風呂敷を背負しょひつゝお秋を見て、笑ひ顔のかはゆらしさは、故人路考が久松を其儘の姿にて、竹「伯姑おばさん此間はお目にかゝりません。母「ヤレ／＼マア大きく成ななさつたのう。サア／＼マアお上りヨ。サア誰だれも遠慮はないはネ。マア上つて休んでお出ヨ。誠にモウ／＼見忘れるやうに成たねへ。ト優しき詞に上り口へ風呂敷包を下し、竹「それぢやア少し休んで、母「ア、引、ゆるりとお休みヨ。トお梅に向ひて、母「お梅や、お茶をもつて来てあげな。ヤレ／＼それでもよく寄ておくれだのう。しかし其様に成人おとななつても、母人が亡人なぐさので心細からうネ、越てから後におたづね申さないが、お爺おやさんは此間こゝは持病もおこらないかへ。ト聞れて少し涙ぐみ、竹「アノウお爺さんも死ましたヨ。ト、ホロリト泣く。母「ヲヤ／＼左様かへ。そりやアとんだ事だねへ。便りが無いとは言ながら、さつぱりと知らなかつたヨ。エ、お梅、竹さんのおとツさん

も亡人たとヨ。誠に困つた事をしたのう。トいへば、お梅も便りなき身に引くらべて衰れを催し涙ぐむ。竹次郎は風呂敷包の間から、金平糖を一袋取出し、無言でお梅に渡し、口の中にて、竹「チツトばかりでございます。トやうくにいふ。お梅は嬉しさうに、梅「母人さん。是此様に澤山おくれたヨ。母「ヤヤく能ものをマア澤山に、おまへもこゝでたんとお上りな。竹「ナニ私しやア今途中でお飯を給て間がございません。ト言ながら、先刻より傭家内の様子を見るに、以前にまさる貧苦の住居。爺親なきゆへ日々に、斯く難澁となりしならんと、歳往ねども利發もの、殊に其身も父母に早く離れて世の中の、浮沈を思ひやる心あれば、さすが大商人の大氣を見習ひ、自然と小遣ひの貯へも有と見えて、襟にかけたる守袋をはづし、其中より小粒の金を取り出して、竹「伯姑さん。アノウ不躰けれども、何ぞ買てお給べなさいまし。母「ヤヤくどうして此様にお金なんぞを貰つては濟ないヨ。こりやア大事にしまつてお置な。トさし戻せば、竹「ナアニネ。こりやア出番の時に貰つたのを仕まつて置たのだから、遣つても構はねへのだから上ますヨ。そしてこれから宿入や出番の節は此方へ来るから、どうぞ宅の代りに遊ばしておくんなさいまし。母「ヲヤほんに爺親さんが死んでから、おまへの家はどうかつたのたへ。竹「アノウ家は店請の伯父さんが来て片付て、そしてその伯父さんも遠くの田舎へ往て、今ぢやア私の

宅はなくなつて仕まひました。母「左様かへ。それじやア親類もないのかへ。竹「只た一人上方に伯母さんが有て、今ぢやアマ親方の方の請人は、其所が宿の積りでございます。ト語るも聞も仕合の、悪い同士がよりあひて、盡ぬ歎きをながくしく、しるすも紙數の限りあれば、あらゆる風情を略すのみ。看官哀れと察し給へ。

さて此段は辰巳なる、彼の梅吉が過し昔の事にして、これより後に竹次郎は、大店の若衆となり、お梅は和哥丁の唄女となり、千田木村の舊縁しを絶さずつなぎて、何時となく深き中なる竹と梅、めでたき名には似もやらで、初編に綴りしうき身となりぬ。されど一期はまだ知れぬ、終りを讀得て感情あらんか。

第十二章

婀娜と情の戀の山、首尾松本の小屋敷に、何町の誰かしらねども、程よき聲の一節も、清わたりたる小夜の月、障子に松の影寒く、しんくんとせし子の刻ごろ。

上略合ハわたしは色に堅法花、アノ川ばたの祖師さんへ日に三べんのヲおだいもくとなへて無理におねがひを合かけしや袖のヲ、ぬれたとしおもふた通り此様に夫婦になつたも御利

益とお禮参りにまた欲な御顔をむすんだその足で中略

此方の間には秀八が、待たびれて獨言、秀「誠にもうじれつてへのう。御願をむすんだ足じやアない。あれほど約束した足で、また何處へ途中寄でもしたのかのう。ふけへきな。

上るり、それは昔の伊達娘今の女はどの様な合ざりやくそくがア、あらふともまさかの時はおいさらばいかに戸ざゝぬ御代じやア、とて心にまでも情なしと下略

秀「へん情なしは女にやアない。男が不残情なしなのに、憎らしい。彌「淨るりをまた嫉妬か。

秀「ア、引びつくりしたは。彌「ナニ其様にびつくりせずとも事だ。秀「それだつて、モウく私きやア何様に待つたかしのないヨ。モウ今夜アとてもお出ぢやアなからうと思つて居る所だから、叱驚したんだアネ。今までマアお時さん所に居たのかへ、餘りだねへ。彌「つまらねへ事をお言ひなせへ。おめへが歸るとすぐに、戸網町へ用を足しに往て、それから阿座婦の古河といふ所へいつて、秀「ヲヤ氣の知れねへ所へお出だツけねへ。彌「コウそんな古河の洒落をいふと、大層に老女さんの様でわりいやアネ。秀「ヲヤそれでも京傳時分の古い本に氣の知れぬ麻布先生なんぞと、よく書てありますは、そしてモウ私きやア老女さんでございますは、どうで先刻のやうな可愛らしい娘の見くらべにやア叶ひませんヨ。彌「ヲヤわりい了管だねへ。アノ娘は先刻も

いふ通り、誠に可哀さうだから、さしかゝつた難を救てやる分の事で、何も深い譯はないといふのに。秀「浅いお心でもないのサ。そりやア私を人にしても無理はないはネ。賤しい活業をして居る女と、素人の美しい娘と、何方かといへば、あの子の方が取ものでございますは。トいふ所へ、酒肴を種々運び来る。これより暫く盃のとりやり。其間にも秀八が、とにかく愚智の恨み詞ありと知るべし。二個とも十分に酔て、互に遠慮もなくなり、打解けて昔の主従の禮は更になく、元より夜ふけて他の座敷も静かなり。秀八は三味線の調子を合せて流行唄、

「淀の車は水ゆへまはる。わたしやりんきで氣がまはるこれは私が氣のまはり實々やるせがないぞへ

「思ひきれとは邪見な異見。實であらふが私や否だ實々止氣はないにエ

彌「古いやうで婀娜な唄だの。秀「おまへさんの氣にはいますまいネ實々止氣がなくツちやア大變だねへ。但しあの娘の方をば、おまへさんが實々よす氣はないにエ。ネネ左様だらうネ。ヲヤくおまへん寝むるのかへ、風を引といけないはネ。ト酔倒れし彌三郎をゆすり起して、無理に目を覺させんとすれども起す、かよはき力に抱起しながら、秀「彌アさんく、アレサ彌三さん。目をお覺しといへばヨウ。彌三さんそれだから、先刻私がさう言たんだアネ。いつまでもお時さ

ん所に居てからお出ぢやア、急度話も何も出来ねへといつたんだアネ。ヨウ／＼と力を入れていふ。此時障子の外に怪しき人影うつる。秀八は何と心得てや、誰も呼ぶ聲あらざるに、障子の方を見て、秀「ヲヤ梅吉さんかへ。鹽梅がよいのかへ、サア此方へお這入な。彌三郎を離して障子をあけにかゝる。彌三郎は空寢入をして居たりしゆへ、怪しみて引止め、彌「ヲイコレサ氣味のわりい何をいふ。今誰もこゝへ來はしねへぜ。トいふを聞て秀八は、四方を見廻し、秀「ア、怖い。ト少し身を振はし、彌三郎の顔をじつと眺めて、秀「彌三さん。彌「エ、。秀「どうした事だらうねへ。彌「何がどうしたといふのだへ。秀「今ネ障子の外へたしか梅吉さんといふ娘の姿が見えて、私を呼だやうな聲がしたヨ。彌「ナニそれはおめへがどうかしたのだ。おゐらア戯行に空寢入をして居たから知つて居るが、誰も呼聲はしなんだ。秀「左様かねへ、何だか怖いやうだねへ。彌「ナニ／＼こわいと思ふと、つまらねへものまでいやに見えるものだ。トいふ所へ、また／＼肴もきたり、また出たる家の娘分女中なんども來りて、暫く賑やかなりしが、兼て秀八の頼みと見えて、彌三郎を介抱して酔の醒るまでとこしらへ、一間へ休ませ、秀八に心を付けてくれよと頼みつゝ、所存とはづして立去りしが、秀八は彌三郎の脊中をさすりながら顔を覗き、秀「彌三さん。せつないかへ。それだから餘りお上りでないといふのに。彌「ナニ／＼其様に酔やアし

ないから、案じなさんな。そして寒いからマアこゝで少し温まんま。秀「私やア否々。彌「ナゼ。秀「何もう晝間先刻の宅で思入れいぢめられてから、此所へ詮方なしにお出でだものを、其所へ這入たと言ていやがられるばかりだから、這入ませんヨ。彌「アレサそんなことをいはねへ

ねへ。彌「さうか。おゐらはどうも氣味がわるい。トわざと物凄ひといふ思入をして見せる。此時別當所へでも遊びに行く人か、または夜ふけに酔さましに遊ぶお侍なるか。さも物すぎき聲にて、

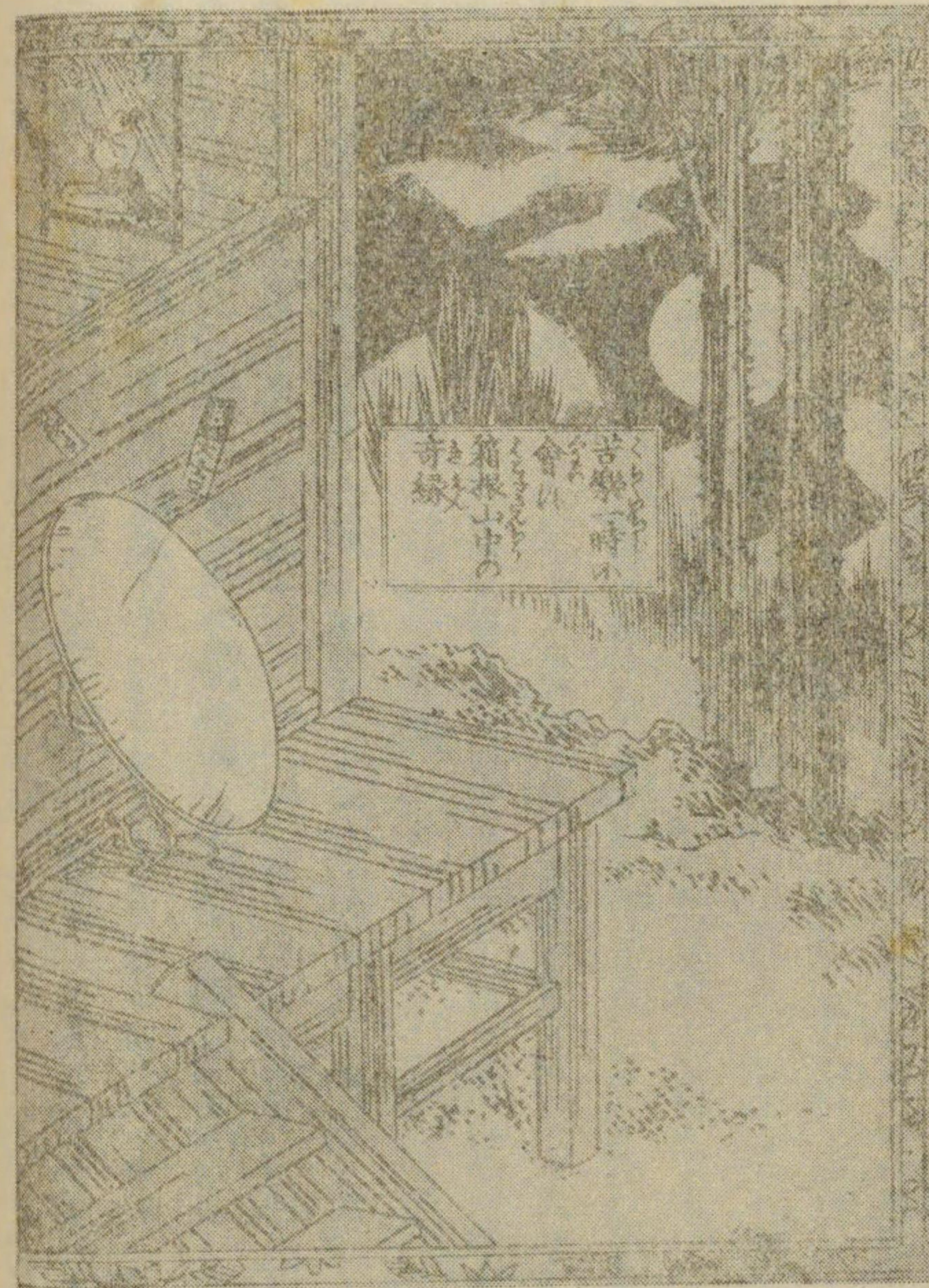
うたひへげにやぐれないはそのウにうゑても色ぞよき名のらぬ先に頼政としろしめされしは
づかしさよ

彌「アレ頼政の幽霊が來るぞ。秀「アレサおどしちやア否だヨ。氣の爲か凄くなつて來ましたは。アモウ何ぼこわくツても、これちやアきうくつでならない。、、、ちおどかしておくれでは否

り。何ゆゑとも悟らずして、永く通言となるもあるべし。其土地に住て其所を知り顔の小人、人情本の用捨を知らず。予をして土地にくらき著述とそしり、此所彼處の違を論ず、嗚呼愚なる哉片屈人、それ作者といふものは、推量を以て物の本を作り、世間一統さもあらしかと承知して、樂まるゝを極意とす。また其穴を知てもはゞかりて言ず、嫌て記さぬ傳も有、ことゝくさぐりて後に其穴を知りたる自慢をする人は、予が黨の職にあらず。古今の作者多しといへども。いづれか唐土に渡て後に、漢土の奇談を綴り。無位無官にして參内をとげ、しかうして大内の事を作らんや。似て非なる故に戯作と許さるゝものなり。作者筆を採て其風情をあらはし、それを土地に移してもてはやさるゝ手柄もあり、されば予が櫻川由次郎の家に遊びて歸り途、山本の前を過るとき、二人の婦女とすれ違ふ。其の婦人いづれの家の唄女の噂かしらねど、似寄仇吉米八の様なのだといひて過行事ありし、既に仇吉米八は、予著初したる虚名の唄女なれども。其土地のくちすさみとさへなりしは、近來稀なる作意ならずや。よくく穴を知らんと思へば辰己に今も雷名する、丁子屋和十名美崎榮次百助壽樂を始として、多く傾笠の知己有。豈素人に評せらるゝ落度をなさん。その友達にその聞もせず、教えを承るいとまもなき、著述の繁多は一日一冊、それがたつく米櫃に、あはてゝ筆のやり放し、まぐれ當りの似寄が有ても、故人善孝に、迷惑させ

し事さへありぬ。くれぐゝも予が著は人情本にして、穴さがしの禁句本ならずと、よくく承知してよませ給へと、唯御ひゐきの看官に願ふのみ。

江戸 人情本の作者の元祖 金龍山人狂訓亭。



琴の音に通ふ松風鐘の音も

静かにつぐる春のあかつき

狂遊亭 春路

東の間もそばをはなれ洲に友千鳥

浦山しくも遊ぶはるの日

狂文亭 春江

第三篇 卷之一

第十三章

心を付て見るときは、昔の反古もなつかしく、見ぬ世の友とも伽草とまぐさとも、なりぬる折ぞ淋しけれ。さてもお時は故ありて、久しく爰このとに獨身住ひとりずみ。此ほど彌三郎の頼みたる娘お君も他に移りて、折こへ來るのみ。今日も朝より小雨降こりて近隣あたりしんと物しづかに、つれづれいはん方ぞなく、所爲しよなき儘に小文庫を明て出せし草双紙、文や手紙の古きを取分、時、「チャ〜」まだ枕紙になる反古はがいくらかもある筈だが。ト（いん〜のかきものをとりちらしよみわける）

○重かさりにけり〜

空そら煙たきの古ふるひ香かも有傾城けいせいが櫃ひつとち足たすもつらし遊女の客日記身あか揚ありにまたきりかゆる傾城けいせいが年ねん

時「ア、引否だ。こりやア何時書たッけか今見ると誠におかしな心持になるやうだ。モウ〜」思ひ出して戦慄する。ト、こゝろのうちのひとりこととよみ給ふべし。また取上る文ふを見て首を

かたむけて考ながら讀。

御天氣もつゞきいよ／＼御まへ殿にも御かはりなふ御嬉しく存上り／＼さてきのふも誠に／＼ありがたく御願し居りまぢいまだ御出なく候へ共今もこちらより文にて頼み上候まゝどうぞ／＼よき御返事の様に御かなへ候やうにたのみ上候昨夜外に久しく御出なき御きやく御出被下しやう／＼にても金子御もらひし候まゝふゐの事に候へばひとへに御山の御たすけと存候間どふぞ／＼御まへ殿より御禮の拜み御上被下たくまたはぜひ／＼幸殿金井殿兩方の御返事よろしき御返事にかなひ候様に御利生くれ／＼も御願ひ被下さだめし／＼勝手ばかりと御心にさからひ候はんれどあしからず御さつしだいさん被下候やう御願ひ申上候 何事も用事のみに
早／＼めでたく
かしく
十五日

二丁めより

急用事／＼

時「チャ／＼」マア、何様してこれが今まで有たらう。しかも聖天さまへ願がけをして、お山の觀智さんに御祈禱をして貰ふ時分の文だが、届けずに置たのが残つて有たのだ。ア、引モウ／＼此文の時節の事を思ふと夢の様だ。ト（すこしふさいですぎこしかたをつく／＼かんがへる心のうちよろしくさつしてよませたまへとねがふにん）そも此處は過去りし月見の頃のねがひにて、うつり替りの胸ぐるしさ。嘘も誠もありそ海、客の眞砂のかす／＼も頼みになるは稀にして、邂逅情ある人も、誰いひ初し契情に誠なしとの悪口が、野暮な異見の證據となりて、疑ひあればなか／＼に、心ゆるさぬ憂勤め。さはいへこなたに思ひもよらぬ人に打解しみ／＼と、言ふらるゝも氣味わるく、末はしらすもさしかゝり、何處か力になりそふな、人と知つては大事にて無心をいふも遠慮の苦勞。わづかな事も今いはず、愛想づかしもされやうかと、なるたけ言ぬ物まへの、難儀を無理な神だのみ。苦界と客も口前に、言つゝ苦界と知る人のないゆへ戀も仇名草契情じやとて其始めは、かはらぬ只の娘にて、憂つらひめをするからに、素人のおよばぬ情をも盡すに甲斐なき年季の中。明てくやしき浦島の、古郷へかへりし昔のことを、心便りの男の身の上。今にも沙汰が有るか、待くらしたもモウ三年。もしや一生逢れずば、死ぬまで寡婦を立と

ふして、未來とやらで添れうと、愚痴な頼みも朝夕に、心ほそさと悲しさを、何様して長く堪忍をして居られうと、くりかへす心のなげき。突詰て涙の雨は降雨に、そへて哀れを催しけるが、思はず文庫に顔さしあて、泣音しのびてそのまゝに、うつら／＼と寝入ける。

元はお時も一個の全盛、去る大樓のお職にて、若那とよばれし發明もの。右に記せし操言は久しく別れて居る情人在としるべし。

「ハイ、チツト御免なさいまし／＼。時「ハイ、誰人でございます。」「ハイ、あのお時さんと名號お方は此方にお在なさいますか。時「ハイ左様でございます。お這入被成まし。トいふを聞つゝ障子を明け、入來る人の顔を見て、お時はビックリ立あがり、時「チャ瀧さんかへ。ママア何様して來られたねへ。サアお上りヨ。何にも遠慮する事はないはね。今もモウ思ひ出して泣て居たんだアネ。誠に嬉しいねへ、夢じやアないかとおもふは。チャ足がよごれてゐるのかへ。ドレ私が洗つてあげやう。アレサ腰をおかけな。瀧「餘まり不躰だネ。時「チャ久しく逢ないから、モウ他人行儀をするのかへ。マフ姉さんのいふことをお聞ヨ。サアこの手拭でおふきナ、雨の降るのによく今日お出だッけネ。モウ直に此家にお在だらうネ。瀧「ナニどうして左様は出來ないのサ。時「チャなぜだへ。瀧「なぜと言てまだなか／＼出られるのではないのを、昨夜座敷

牢を拔出して來たんだから、時「チャそして何處から今日來たんだへ。瀧「ナニサ板橋といふ所を今朝立て來たのサ。時「さぞこまつたらうねへ。サアこの火鉢の際へお出な、そして此着物をお着な、それは濡たやうだから。ト結城の小袖に黒朱子の半襟のかゝりしを出して着替させ、すべて介抱等閑ならずもてなしける。

そも／＼此瀧次郎といふは、鎌倉の武家の三男にて、まだやう／＼今年十八九なるべし。三年以前は誠に子ども同様なりしが、其頃お時は長谷寺觀音の地内、二十軒とか唱ゆる茶見世に出て在けるなり。其折からお時は父と二人にてくらし、勤の中より心に留たる男もなく、自儘になりても夫を持たず、親に孝を盡し、父も一旦の薄命の節お時は勤奉公には出せしかど、娘の年季を早く明させんと丹誠をなし、娘も父をやしなふ心にて月々に送り與たる金子も少からず。父はこれを請て大切に貯はへ、終に其身の利潤溜たる金と合して二百兩程になりしゆへ、觀音の地内の茶見世の株を買ひ、または勝手よろしき株にて他人にまかせ、月々金子の上る勘定の業躰に金を出して置けるゆへに、今も其金にて兩三人は樂々と活業せらるゝ身分にて、父も在所の本家兄の病死せしよりは半年づゝは在所に世話をなして止まり、お時は男の氣兼に倦はてたりと我儘なる獨住。只なぐさみ同前に茶見世にて洒落てくらせしう

ちに四年前より瀧次郎は友達に誘はれてお時の見世へ遊びに來りしが、いかなる前世の約束にやありけん。互に思ひ思はれて半分ばかり歳違の中にして、そぐはぬ縁を知りながら、結び留たる綾織の媚茶ニヤヤに合する小柳織あは、くじらも今は晝夜帯、とけてあふ夜も語る晝も、數ある程にはなかりしが、因果どうか殿々に深くなりては人目さへ、いとぬまでにならんとせしそのかたらしの中にも、はからぬ別れとなりしゆへは、瀧次郎が友達の中に同じく武家の二男にて筋わるきこと有て、家にもさへはる大變の友達にまでかゝる災となり、瀧次郎もまきぞへせられ、三男なれども親兄達の身分にも濟すとて、家柄よろしきゆへ親類相談のうへ、近在十里ほどある知行所の大庄屋にあづけ、座敷半同様なる一間へ押しこめられ世間へ出さず慎しませ置けるが、やうく其災難もしづまりて、近くの中に親のゆるしも有べき身とならんとせしを、待兼て忍び出、戀しとおもふ一念にお時を茶見世にたづねし所、見世は他人に貸て今は勝手につき、婦多川たがわに住居て只一人くらすよしを、茶見世を借て居る娘がくはしく教へたるゆへ、直に此所へたづね來りしなり。さればお時は其頃よりいつしか瀧次郎世間はるゝ日のなからずやはと、發明して今日までこがれくらしせしなり。是しかしながら年増女の深き心入こころいれにて、浮薄うわきならざる信切しんせつのなす所なり。

第十四章

時「瀧さん寒かア介巻を出して上やうか。瀧「ナアニ寒かアないが、誠に草臥くたびれたから氣拔をしたやうだ。時「左様だらうネ、板橋とやは餘程遠いそうだねえ。それに雨は降しさぞ路がわるかつたらうのに、マアチツト横におなりヨ。瀧「ナニマア久しぶりで逢たから、顔を思入見て安堵しなければならぬ。時「チャはづかしい。其様に看と愛想が盡るはネ。ト莞爾笑ふ顔のかわゆらしさ。さすが若那といはれし愛敬は、この笑顔におゐらんの値打は有しなるべし。瀧「ア、引三年ぶりで、其ゑくぼのかはひらしい顔を見たから、モウ死でも本望だ。ト（さも見とれたといふやうなるかほにてわらふかほ、女の心をまどはすなるべし）時「アレサ其様に氣にかゝることをお言でないヨ。これから思入かわいがらなくつてはならないヨ。サアチツト横になつてお休み、此様に大降だから、はしまいから、サア、私にかけて上るから。ト小夜着を出して無理に寝かす。瀧「ひよつと、何様せうネ。ア、ねへ、もし來たら實正の情人が三年ぶりで參りましたからモウ是からお斷り申ますといはふねへ。ト平氣なこたへはさすがに年増、元より一途いつちにこりかたまりて、瀧次郎の外は夢にさへ男はおもはぬ實心じつしんゆへ、嫉妬やまもよを

いはれても取上ざるは、猶頼母しき中ならずや。瀧「年がいかねへと思つて、ムをしてもかまはないと言のだね。ア、三年ぶりだから瀧次郎といふものムをするのは御免だとサ。ドレ大事のム草臥た足でももんで上やうか。トムムムくり上げて、瀧次郎の足をさすりにかゝる。アレサ勿躰ねへ。時「ヲヤ手をつけてはわるいのかへ。瀧「ナニ左様ではないが、マア少しの間側へよらずに居て貰ひたいからサ。時「ヲヤなぜへ。瀧「エ、ナニサ。雪の中を歩行て來て瀧湯を直に足へかけると、足が霜消た様になるといふから遠火で段々に温めて、それから湯へ這入ないと悪いとサ。時「ヲヤ〱雪が降たへ。此邊は雨だがねへ。そしてまだ雪の降時分ぢやアないがネ。瀧「ナアニサアハ……〱。雪は降はしないのサ。只たとへに左様言たのだ。時「なんだかわからないヨ。それならマア足をもますに炬燵を入れて上様。瀧「ナニ〱足は温だから、マア側に居てさへ貰へばいゝから、時「側に居るなとお言でもはなれはしないヨ。そりやアいゝが、何だかモウじれツたくツていけないヨ。少し雨が止だらちよつと往て來やうと思ふのに、ひどく降のウ。瀧「なぜ何所へ往のたへ。時「ナアニサお前に酒をとつて上様と思つて、瀧「イヤ〱今日はモウ酒も何にもいらぬからおもいれ、時「エ、。瀧「種々の嘶しをするのが楽しみだ。時「それぢやアお茶をこしらへて、お飯をあげやう。玉子があるからお前の好きな厚焼をして上や

う。瀧「どうして〱、それでなくツてさへ、モウ精が強クツてこまるから、何ぞ氣の落着ものがいゝ。ヲヤ勝手な事ばかり言て居て、折角持て來た土産をわすれた。トいひながら、胴巻の儘にて金を二十兩程出し、瀧「少しだけれども田舎へやられてから、三年の間に溜て來たんだ亦いづれ屋敷の方の落着次第で分米を貰ふから、少しはお前の方へも、時「アレサ私の方ではすこしも其様な事は入ないから、只お前が宅に居ておくれだと、それが何よりか嬉しいから、直にモウ何處へも往すにおくれな。瀧「それでも左様すると、私の身がいよ〱暗くなるし、そのウへにお前の厄介にばかりなると悪いはな。時「ナアニそりやア能ヨ。いよ〱おまへが此家へ這入に極ると田舎へ左様言てやれば、親人さんも元手を差越筈だから何にも入ないはネ。また今の儘で居てもおまへと二人で、くらして居るのは樂だアネ。ヲヤ〱大變につよく降て來たのう。瀧さんくらくなるけれども庭の方をメるヨムムムムムムだねへ。トいへども旅の勞れにやすや〱と寝る故に、お時は雨戸をしめながら、少し隔し隣家の方にむかひ、時「隣の老婆さん〱、今に小降になつたらどうぞ頼まれておくれよ。ヲ、吹かけていけない。ト雨戸をしめて中敷居を明け、「ヲヤ〱此向も吹込ノウ。どうも詮方がないから戸をはめ代様。ト獨言折しも寺町の鐘、入相を告て物淋しく、ゴタン〱〱引。時「どふりでくらくなつたと思つたら、もう

日が暮るのださうだ。早いけれども燈火を付様、チヤ老女さんか。今でなくツても能ヨ。ついでがあつたらね。ト小聲になりて、仕出し屋へ夜食の茶を誂てやる。斯て其夜も初更過まで雨もやまず、料理やの茶の物も来り茶も出来たれども、瀧次郎は一向に目を覺さず、お時は折々寝顔を覗き、銀かんざしにて丸髻の下を搔ながら、時「サアモウお起ヨ。ヨウ瀧さんく。また目を覺してそれから本當にお寢ヨ。お茶がしぶくなるから、マアお飯を喰てお仕舞な。何かのかげんが違ふからヨ。ト抱起されて瀧次郎、瀧「チヤモウ日がくれたネ。時「モウ日が暮たもいゝねへ。何様に久しく寝てお在だらう。誠に淋しくツてならないから、幾度も起したはネ。瀧「左様か少しも知らなかつた。サアくもう夜通し起て居てもこまらねへ。ト帯をばなはして安座。時「ナニサ夜通し起て居すと能が、お飯を上げやうと思つて先刻から氣をもんで居たのだけはネ。トいふ折から戸を明る人音して、男の聲「チ、引ひどい降だく。其手拭をかしてくんな。時「チヤ且那かへ、何様してマア今時分に。ト障子の際へ立てゆく。瀧次郎はあやしく思ひ急腹立にて、瀧「チヤお客ならおいとまにしやう。大きにお心配をさせ申ました。ト立上るゆゑ、時「アレサ瀧さん。お客まで遠慮はいらないヨ。左様してお在な。瀧「イ、エお邪魔になるとわりいから、時「ナニサよいといふのに。ト障子をあげ、時「サア且那此方へ。よくマア此降のお出が出来

ましたねへ。男「左様サ餘程信切だらうネ。時「ハイサ誠にかんしんいたしました。ト笑ひ顔に
ていふ。瀧次郎はいよく悔しく、瀧「エ、いめへましい。此様なことゝも知らねへで、モウ二
夕月か三月が待れねへほどこがれて来たが、馬鹿くしい。ト齒をかねで悔しさうに障子の外へ
出んと、お時をかき除る。来りし男は平氣にて、男「マアよろしうございます、お遊びなさいま
し。時「チホ、且那早速ながら是は不斷おまへさんになぶられた私の眞夫でございますヨ。
男「チヤ左様かへ、これは大きに趣相なごあいさつをした、御免なさいまし。へい初めてお目に
かゝります。瀧「へい。ト少しまごつく。時「瀧さん此且那は私が誠にお世話に成て久しい
おなじみだから、よくお前もお禮を申ておくれな。トいはれて何やらわかりかね、身を任せたる
且那ならば、自己を亭主と引合せもせまじ、また何も理なき人ならば、此大雨にたづねて来り信
切ならんといひもせじ、いづれにしても合點ゆかすと、手を組で思案をなすも無理ならず。時「瀧
さん何を考へてお出だ、をかしいねへ。トいふ折しも表の方にて小聲に、女「お時さんく、
時「アイ秀さんかへ。只今お出だヨ。サアお這入な。秀「アイ。ト戸を明て缺込。秀「モウく、
今日は何様に間がわるかつたらうか、晝時分からまだ平清にぐたくして居るんだアね。時「大
勢かへ。秀「ア、太夫衆不殘、私の方が十人といふものだから、モウくじれつたくツてく、

それに此方へ半分魂が来て居るもんだからモウ悔しかつたは。時「そして何様して来たんだへ。秀「ナニモウお客も大夫衆も半分の餘夢中になつて誰が何様だか知れない様になつたから、い、様にして来たヨ。時「それは大きに御苦勞さまでございます。旦那モシ雨の降のお出被成て恩にかけずと宜ございますヨ。彌「ナアニ五間か十間の所を轉ても來られるが、私なア遠いから大變だアネ、時「チャ此瀧さんは板橋からさへ來てくれましたものヲ。秀「チャく姉さんのかへ、憎らしいネへ。トお時の顔を見て莞爾わらひ、瀧次郎に向ひ、秀「モシ貴君、お初におめにかかりました。どうぞ是からお心易く。瀧「ヘイ。トいつてまじめになつて居る。秀「彌三さんあの嬢はへ。彌「どうしたか先へ渡してから後はしらねへ。ト言葉すけなにして居たりける。

さて是より彌三郎秀八、瀧次郎お時が二階と下さしきの風情は毎度同じおもむきなれば、略してしるさず。されども四編にいたりて此續の情を深くしるすものなり。

第三篇 卷之二

第十五章

水の流れと人の身の、たとへもつらし淵は瀬と、かはる浮世の祥瑞不吉。彼の婦多川の梅吉が命にかけて戀したふ志良木の店の柳吉は、上方の店へ登せられしが、段々遣ひ込を調べまた他者の私欲なせしをも、柳吉になすり付られし事など、それぐに分解て見れば左程の不届にもあらざれど、兎角傍輩にそねまれしゆゑ再勤もなりがたく、亦上方の支配人別家して在ける者の多き中に、實右衛門といふ人有しが、此者は柳吉をひゐきになし何卒再度鎌倉へ下して出精さすか、上方の内にて一軒の見世をあづけるかなしたならば、随分ともに一廉のものになるべしと思ひ、まづ宿へ引渡したる分にて其身の隠居店へさし置て、主人ならびに外の支配人の立腹の直りなば、其時再勤させてつかはすべしと信切に世話をされ、殊に主人方の表向いとまとなる時も種種とりなして、さすが大家の慈悲深きはからひにて三十兩の手當を貰ひ、出店の見勢までは家業向にて出入いたす様に願ひ置れしかば、内々實右衛門方にありて半年たらず過しけるが、其中

にも朝夕梅吉の事のみ心にかゝり、何卒實右衛門の機嫌にさはらぬやうに願ひて鎌倉へ下りたく思ひ居たる所に、實右衛門の生國實家は箱根の温泉所にて湯本の正右衛門といふものなりしが、今の正右衛門は實右衛門の弟にて跡を繼居たる所、去年其妻病死して亦もや此度正右衛門大病にて甚むづかしく、是非實右衛門に下りくれるか、左もなくば相談相手になる者を下して後々の事をも頼みたまよし、飛脚を登せしかば、實右衛門もいかゞはせんと思ひけれども、今年店の預り番にて萬事其身の支配なれば、一日もはなれがたく、殊に主人も病氣なればいよ／＼箱根へ下りがたく當惑せしが、やう／＼に思案して、彼の柳吉を名代に頼み、實家の始末大略我心におもふ事を承知させ、萬々一弟正右衛門死去にも及びなば、村役人に相談して、よろしく相續のことはかるべしと談合して、路用ならびに弟の方への病氣見舞として金子十兩を渡しければ、飛脚と俱に支度をなし相模路さして下るにも、心のうちには梅吉の安否をはやくたづねんと急ぎの旅を幸ひに、花の洛を跡にして、五十餘路を二人連、箱根の湯本へ急ぎしが、日數をつめて今日はや箱根の山路にさしかゝり、少し時刻おそくなりしかど案内知つたる飛脚といひ、殊に氣強き男なれば、夜道などを恐るゝ事なく月夜をあてに夕方より山また山と重なりし、荊からたちいとひもせず、近道越えて夜の中に湯本の方へさしかゝる。名におふ箱根山、柳吉は初めてなれば

何とやら物すゞく、森々たる林を過ては幾々たる峰に登り、はるかに見下す谷間の清水、月の光りを底にうつして、きら／＼しく目をくるめかしてやう／＼に、たどれば梢の蔭に足元くらく、澤の間や山の岨、覺束なくも歩行ゆく。折しもはるかに悲しげなる女の泣聲聞えければ、思はず柳吉は立どまり、柳「チイ宗八さん。アレ何だかものすごい聲が聞えますぜ。ア、引氣味がわり。宗「さればサどうも合點がいかねへ。そして此邊には家も何もぬへはずだ。柳「跡へ歸つて他の道を通る方かい。ぢやアねへかネ。宗「ナニ何様して跡へ歸るなんぞといふくらゐならばこの山越にかゝりはしやせん。たとへ何事が有ても二人連だから、こはいことはねへ。かまはず往やせう。柳「アレ／＼段々聲が近くなるやうだ。宗「ハテナ勾引が娘でも引さらつて來たと見える、かはひさうに。しかし道中じやア折々此様な事もありやす。品に依たらば助けてやるも後生の爲だ。そして向ふの奴も悪徒やつらだから、其場へさしかゝりやア此方共に手出しを仕めへものでもねへから、其氣で往やせう。柳「エそれは大變だ。見ねへふりをして往ふぢやアねへかネ。左様したらば向ふでも堪忍して通しさうなものだ。宗「ナンノ、殊に依りやアたゞきなくるか、切倒すかしやアな。ト強氣の宗八が先に進めば、柳吉はこは／＼ながら、腰にさしたる脇差の柄を握つて付添ゆく。小笹茅原丈よりも高き澤邊の葭蘆をわけつゝ、既に一丁餘り近づき

いたつて泣聲の聞ゆる方を伺ひ見れば、茅野に建し辻堂の廻りをぐる／＼追まはる其一人はたしかに娘、また追かくるは大男のさもたくまじき風情に見えたり。されば男は前後もわすれ、無躰にこれを捕へんといきまき荒く罵る様子。娘は一生懸命に泣叫びつゝ逃まはる、歎きを急度見留る宗八。さては推量にたがはざりし、何所の娘か知らねどもさぞ悲しくも恐しからん。ドレ助てつかはずべしと獨言をいひながら、覺えの脇差抜かざし、一聲叫んで切てかゝれば、悪漢は仰天なして逃出すを、勝に乗て追かくれば、退れぬ所と盗人は、とつてかへして切結ぶ風情を見るより柳吉も、齒を喰しばりてふるへをこらへ、足ふみならして助太刀なせば、元來甲斐なき賊と見えて、二人の勢ひにびつくりして、亦逃出すを宗八は覺悟ひろけと切かくる、はづみに賊も宗八も足ふみすべらし傍邊の谷へ二人がころ／＼、轉び落ゆく形勢に、柳吉は周章ふためき宗八を助けんと、此所彼所と月あかりにさがし求めて伺ひ見れば、熊笹の葉の生茂りて谷の口も見下しがたく、いはんや尋ねて下り行くべさ谷道も見えざれば、途方にくれし箱根の山中。月に夜道は見ゆれども何れをさして順路なるか、知らねばいよ／＼當惑せしが、やう／＼と心付、以前の辻堂のかたへ走かへり見れば、女はかたはらにふるへて猶も其所にうづくまりて伏し居たれば、やがて其側へたち寄り、柳「コレ女中さん。今お前を追まはして居た奴目は、たしかに盗人だら

うがノ。女「ハイ／＼どうぞ御免なさいまし。柳「ナニサ其様にこはがる事はねへはナ。アノ盗人をばおゐらの連の男が追かけて谷の方へ往たから、モウ／＼氣づかひはねへヨ。マア心をしづめて此方に理をはなしな。わけを聞いてわかつたらおれがお前の家まで送つてやらう。お前はマア何所のものだへ。トいへども娘は柳吉を猶疑へば、ろく／＼にものをいはずこはがれば。柳「コレサ／＼。モウこはがらねへでもい／＼ヨ。どうして斯いふ目に出合たのだからお前の身をすくつてやるのだ。サア急ぎの旅でこの夜道を湯本まで行のだが、かはひさうだからお前の身をすくつてやるのだ。サアその理をはなして、早く宅へ送られるが能ぢやアねへか。トいはれてやう／＼聞わけてや、月の明りに柳吉を見上げて、たしかに悪漢にはあらざる姿を見定めて心を落着、女「これはマア有がたうございます。左様ならばどうぞはやく此所を連れて退て下さいまし、私の身の上の事は途中お咄申すから、柳「なるほどそれも尤もだ。ト此所を立退ながら、柳「マアお前の宅といふのは何方で、親御の名は何といふか、所も何所だか聞ねへければ送られねへ。そして夜だから路も知れめへナ。女「アノウ實正にはしれませんが、湯本へ行道は少しは知つて居ます。貴君も湯本と被仰から大略は御存で、柳「イヤナニ此道は連の人が知つて通るので、自己は始めてだから覺束ねへが、お前の宅といふのは同所湯本の方かへ。女「ハイ湯本正右衛門といふのが私の兄で、

ざいますが、柳「エエ湯本の正右衛門さんといふのは兄さんだとへ。夫じやアおまへはお直さんといふ名かへ。女「エ何様して御存じでございます。トへふしぎさうに柳吉のかほをながめる」柳「ナニサおまへはいふに不及、正右衛門さんの知己にはならないが、正右衛門さんの病氣に付て京都の實右衛門さんの名代に私が下つて來たのサ。今盗人を追駈て往たのは上方へ飛脚に登た宗八といふ人だアナ。女「チャ／＼それじやアお前さんは京の兄さんの名代にお出なされたのかへ。誠にマアふしぎな事でございますねへ。何だかモウ夢のやうな心もちで實正のやうには思はれませんかヨ。ト嬉しき中に疑ひながら柳吉の顔を情々とながめて、溜息をつくありさまは思ひ寄たる事有か、男も娘をよく／＼見れば年頃は十九ばかりになるかとおもはれ、月はづかしき美しさ。夜目にはいとゞ色白く、山家育の娘とは、なか／＼におもひもよらず放心するほど惚たれども、斯る危急の難儀の中ゆゑ、其風情をつゝしみてやう／＼と歩行しが、あとさきを考へて立どまり、

宗八を捨てて立去がたき義理なれども、夜中といひ案内も知れず詮方なければ、先此娘を救ひて其宅へ送りとゞけまた／＼此所へ來り、宗八をたづねさがすべし、且盜賊が再び來るまじきにもあらず、かた／＼油断はなるまじと覺悟を極め、

娘の手をとり往先は私が知つたといふ言葉を便りになして、覺束なくも足をはやめて落延つ、少しは心もやすらかになりしゆゑ、手を引ながら柳「トキニマア正右衛門さんの御病氣はすこし、宜ございますかへ。ト聞れて娘は涙ぐみ、女「イ、エ兄さんはモウ七日に前に死去なうなして何様も詮方がないから、近所のお方の世話で假にお寺へ頼んで置て、京都の兄さんがお出でないから正調の吊ひをばまだせず居るのでございますが、今日は七日だからお寺へ私一人で參つて拜んで居ますと今の背の高い侍が來て、私を引抱へて御墓所から山傳ひに駈出して今の所へつれて來て、これからおれが妹のつもりで上方のほうへ歩行、左様すると宜所へ奉公に出して出世をさせてやるの何のと、さまざまな事をいふのを否だと言ましたらば、ひどい目に合にかゝるからアノ御堂の廻を捕まるまいと逃て歩いて居る所へ、お前さん達がお出被成たゆゑ助かつたのでございますヨ。柳「イヤハヤそれは大變な譯だ。しかし京都の兄さんの使に來た私が、お前を助けるといふも不思議な因縁だ。それではさぞ湯本の宅で大きわぎをして居るだらう。ア、引しかし宗八どのも怪我がなければいゝが、尋ねるにも案内はしれず、ひよんな事にはなつた事だ。ト案じながらも詮方なく、娘のいふをしるべにて、湯本の道をたづねつゝ、此方彼方と歩めども、しかとは知らぬ娘の言葉、また柳吉も前後が物淋しくもおそろしく、おど／＼として行をりしも木精

に響く鐵砲の音ヅドン引。兩個はハット腰を折り、あたりを見れども何事もあらざるゆゑに氣をしづめ、さては獵人の山かせぎにてありけるかと胸をさすりてたどりしが、また情々と思ふやう彼の正右衛門も今は、はや亡人となりし後なれば、急ぎしとても益はなし、夜は深々と更渡るになほ物すごき山道を、行先いかゞあるやらと大事をとれば放心ともゆかれの足弱連なれば、何とぞ夜露の凌ぎもあらば夜の明るまで休足なし、晝にもならばおのづから東西しれて案じもあらじと、路のゆくての右左りを見かへり／＼氣を付れば、杉の木立に草ぶきの小さき堂がありければ、これ幸ひと戸をひらき、まづ休足をぞしたりける。

第十六章

斯て其夜も明渡り、山道ながらも湯本への順路にてありければ、此所を往來の旅人など、二人連三人づれの三組四群は通り過て、今は夜のけしきの如く恐ろしくも思はれねば、柳吉は猶勞れて伏たる娘をゆり起し、柳「お直さん／＼。コレサ／＼。大さうに草臥たのふ。サア起なヨ。通の人が見ると笑ふから、トゆり起されて目を覺し、直「チャ／＼。少許も知らずに寝忘れましたヨ。何様いたさふ。トはづかしさうに莞爾笑ひ、亂れたる髪を白く細き指を反して無上ながら、

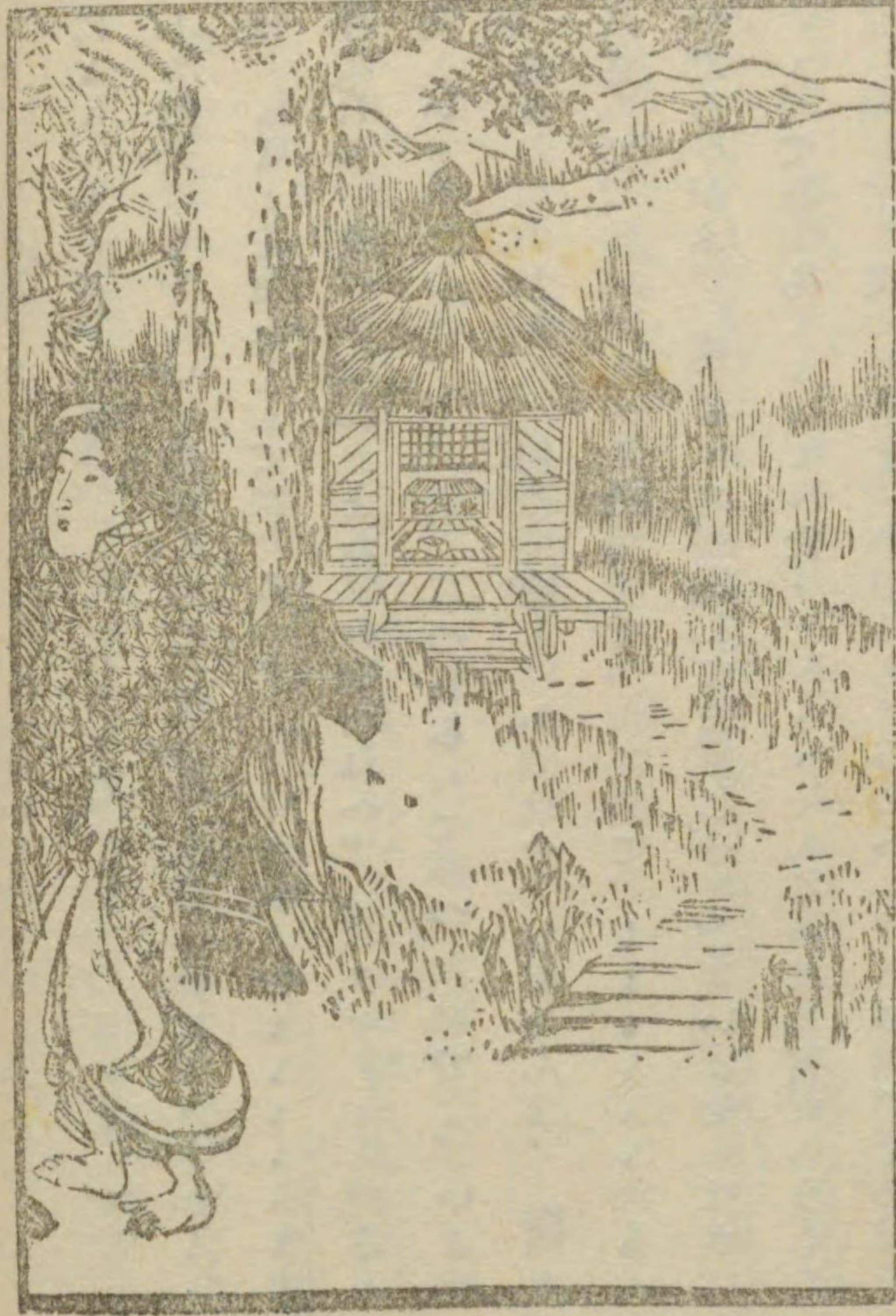
直「私しやアま／＼と存ますヨ。△「今朝になつて／＼／＼らばい／＼が、／＼／＼と
 お思ひだらうネ。直「ア、誠に／＼／＼存ましても女だから詮方がない所でございますは。
 柳「成程左様だらうサ。しかしまた夫程くやしいと思ふくらゐならば、先刻の様に種々とか／＼
 しい事を言なさらなければ、／＼／＼となしくして居たものヲ。ツイお前もや／＼／＼な
 さるから前／＼／＼れて誠に今になつて左様いはれるとお氣の毒だねへ。直「チャ／＼お前さん
 は何をお言被成ますへ。私が悔しいと申たのは、アノ盗人につれられて參つた事でございます
 は。お前さんにはあやふい所を救はれたのだから、何様に嬉しいか知れやアしませんは。柳「ナ
 ニ／＼おまへを救つたのは宗八さんで、私はおまへを此處までつれて来て、／＼／＼／＼たもん
 だから、それ／＼／＼といふのだらうがネ。直「イ、エ何様して左様じやアございせんはネ。
 お／＼／＼そわりの所を通りかゝつてひよん／＼／＼たト、／＼／＼しくおぼし召だらうとお
 氣の毒でございますヨ。ト柳吉の顔を見て眼元に情を含み恨めしさうにいふ。その顔ばせ何處や
 ら鎌倉の梅吉に似てあどけなく、さすがに入湯の鎌倉人を看ならひ、言葉つかひさへさらに山家
 の風はなく生得の美しさ。柳吉は心におもふやう、もし此娘を場所がらの仕立小袖を着せ十分に
 化粧などさせたならば、なか／＼婦多川の唄女も戀が窪の全盛もおよぶまじと、夜目に増りし美

人の風姿、あくるわびしき葛城の神にはあらで、結ぶの神を念するまでに看惚たる顔を看上てお直は莞爾。直「チャなぜ其様にお白眼なさいますへ、憎らしいからかへ。柳「左様サ、ムムムムるお前だから憎らしいのサ。直「チャお前さんこそムムムムムム、させるのでございませうヨ。

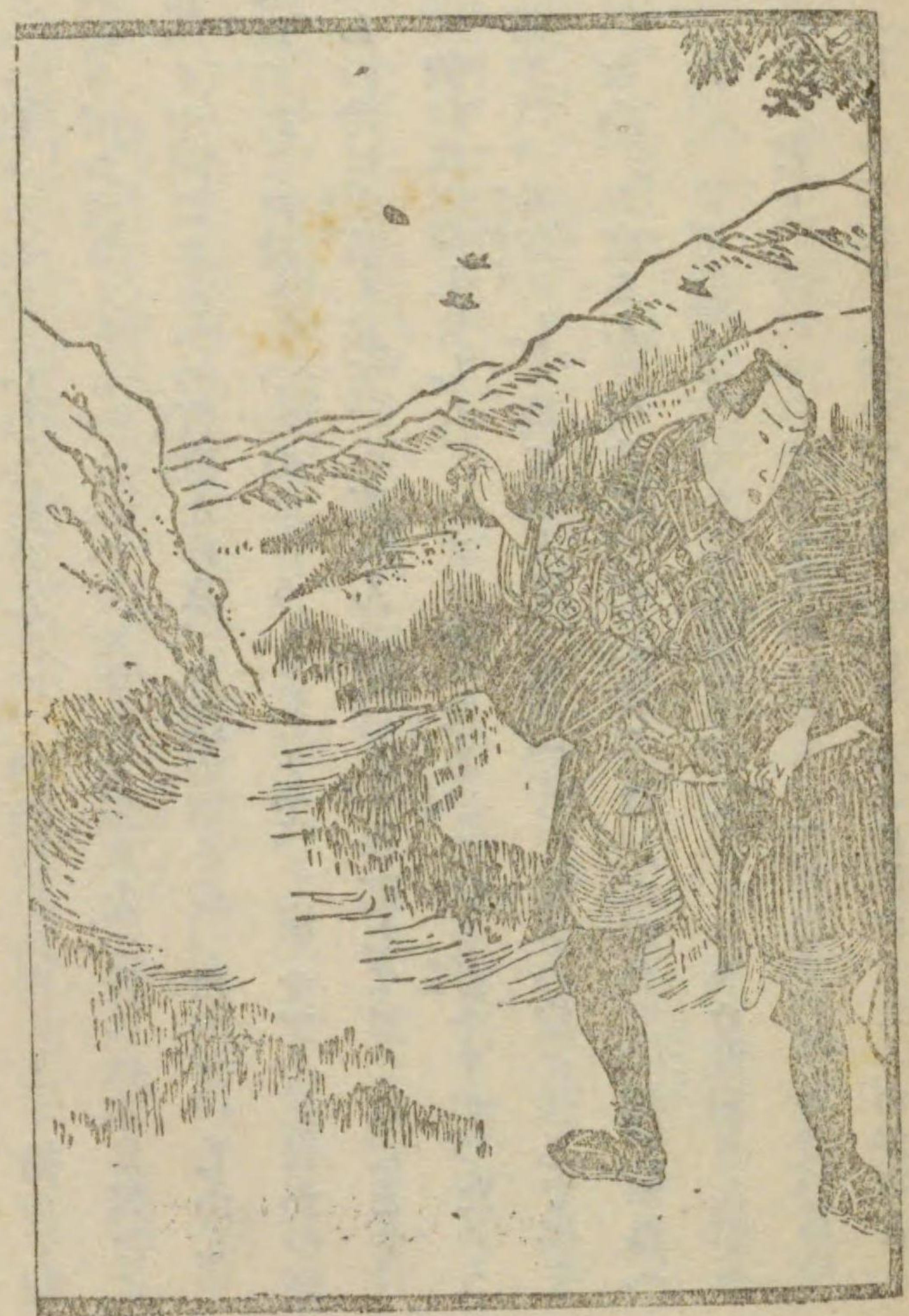
柳「イヤそりやアいゝが、幾程も茲には居られめへ。

直「おまへさんとムムムムきやア何日迄も居りますは。

柳「また其様な他人迷はせをいふヨ。お飯も給ずに着しねる物もなしでゐられるものかナ。直「それでもマアムムムム、に濃厚でございましたらう。柳「ナニく私こそ汗をながしてお前の難儀を救つた



のだけれど、お前は平氣で則アノ盗人に連れて往れた方がよかつたといふ顔をして居るものナ。直「アレマアあんな嘘ばかり、私はモウくどんなに嬉しかつたか、實正にムムムムムムだと存じましたは。△「サアマアムムムムして、支度。直「ホンニはやく宅へ參つて、何かのお禮をいたさないではなりません。



トムムムムムづくろひ、ムムムムムムムムかしげに隠すは、いとど色深き情の極意、戀衣ほこりを拂ふ手、たゆく、直な娘の名もお直、あぢな縁しの戀風に、なびく柳の柳吉が、梅のかほりはわすれねどさしかゝりたる災難を救ふが後の歎とも、知らず知られぬ凡夫心。ふと看上ればこの草堂

の本尊は、子育て地藏尊と小さき額にしろしてあり。こゝにいたりて柳吉は兼て妊身にんしんなせしといひし梅吉のことを思ひ出し、胸をさすりて禮拜し、お直の手を取り辻堂を立出んとする所へ、來かゝる飛脚の宗八、顔見あはせ双方ともこれはと一度に立向ひ、柳「コレハ〜宗八さん。まづマアお怪我もない御様子。宗「イヤ私よりお前といひお直さんまで、御無事で此所によく揃つて御座りました。思ひも寄ねへお前をばお直さんとも知らねへでたすける氣になつたのは不思議なことじゃアございませんか。柳「イヤ誠におまへの實意じついなゆゑ、此嬢この難を救つたのだ。しかし今お直さんの顔を見ない間まから以前せうにこの嬢としたのはどうしたこと。宗「サアそれはかの盗人奴が白狀で知つたのサ。元あの侍は温泉おんせんに來て、お直さんに惚と込んで付廻して居た奴だとサ。柳「ハア引。左様かネ。そして彼奴は何様しました。「ナニ谷へ落る節ふしに胸を打ぶやアがつたさうで、動きも満足には出來ねへ様子だ。其儘そのまんまにして置いて私しやア夜の明る迄獵人の家に休んで居ました。夜中に柳吉さんは何様したか、お直さんは何共ないかと案じては居たけれど、詮方がねへから御方便次第と觀念をして居たが、さぞ苦勞でござへましたらう。直「イエモウ此柳さんがお前の事を何様にか案じてお在だけでも、路は知れず私もこわいから、同伴に歩行てお貰ひ申てこゝまで來て、柳「まことに心細くつて泣出したかつたが、左様すると此嬢がまたこわがると思

ふから我慢をして此所まで、宗「ヤレ〜そりやア宜かつた。サア左様ならば歩行ながら咄はなませう。トこれより飛脚の宗八が先に立たる案内に、心丈夫な三人づれ、お直は兎角柳吉にはなれともなきその相振まはり、宗八は何の氣も付す、宗「それでもマア柳吉さんに、兄さんの事をよくはなすといふ鹽梅になつたツけ、ねへお直さん。直「ア、介抱して貰つてから兄さんの死去なぐさつた事までもくはしくお咄し申てね。ト涙ぐむ。宗「ナニエ正右衛門さんが死去なんなさつたとへ。そりやア大變だ。道理でお直さんが墓參をして居る所を引さらつて來たとアノ盗人めがぬかしおつた。ア、引ヤレ〜残念なことだ。しかし正右衛門さまも覺悟の大病、京都きよとのお兄さんもマアあきらめて柳吉さんを名代に御越ごこしなさつた心もち何事も縁づくでございませう。トいはれてお直は縁づくの言葉が胸にギツクリ當り、ムムムを推量して言もするかとはづかしく、かほ赤らめて歩行あるくとも、知らぬ宗八は笑ひながら、宗「なんと柳吉さんはから湯本の家へ御出ごでつて村役人衆と相談して、お直さんと夫婦になつて正右衛門さんの跡を續だらば何様でございませう。其方がよささうなもんだねエ。お直さんおまへは何と思つてお在だか。マアよく了管りょうくわんをして御覽なせへ。此柳吉さんの様な好漢こうたんとは湯本はいふに不及、京都から長の道中下る間まの道路も競べるやうな人もない男風俗ふうぶく、また氣性きせうの所は今度朝夕附合た私が請合だが、おまへの旦那にする氣はないかへ。イヤ此

様なことを言ねへ中にモウ御相談が出来たかも知れないのに、言出したのは此方の野暮かへ。アハハト高笑ひ、愁ひの中にも嬉しきことをいはるゝお直がよろこびも、また柳吉は前後あんじ煩らふ梅吉が、さぞやこがれて居もするか、モウ産月に間もあらぬ日數となりてあるものを、除れぬ業で他の用を勤めて歩行く其中に、仇なる契りを此所なとこにて結びし事ぞ後悔なれ。さはいふものゝ此お直もさら／＼浮薄の性質ならず、殊に色香も他にまされり、いかゞはせんと胸をいためて、湯本の家にぞ着にける。

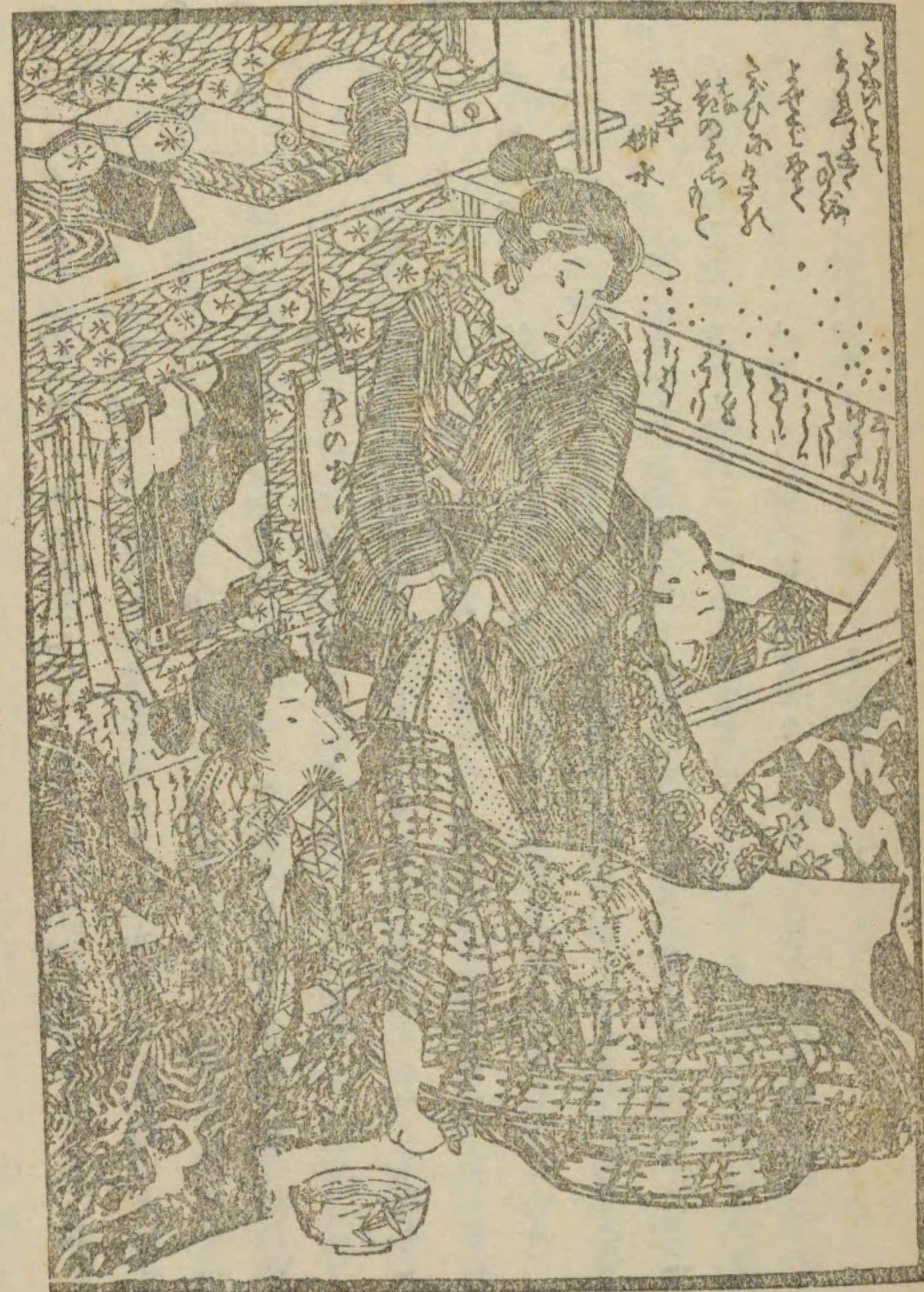
第三篇 卷之三

第十七章

憂事と嬉しき事を陸ましく、朝夕語る戀の中裏、其中にしもとり別ていと陸ましき一構、美人の揃ひし二階の風情、座敷へ出る化粧よりも素顔が却てうつくしく、欣々と衣裳を着かへしより寝巻姿のじだらくなるが、尙うるはしき情合の妓女多く、いまだ箒出しもせぬ寢起の體各々に手拭ひを頭上に冠りて髪を大事にする事は、此處にかぎらず、扱僅かなる部屋を掃除するにも代番に勤めるがお定期なれども、新來者は續てする事あるべし。●「モウ否だノウ おゐらの番の節にやア、毎度紙屑だらけで、ごみが餘計にあるから、骨が折てなりアしねへ。▲なんだナ此嬢ア。よウく動泣をするノウ。お前は今日で幾日そろちを退れて居るか知れやアしねへ。私やア二日續てした日さへ有アナ。サア手傳てやるから早く片付な、ヨウ。トいふ中はや下よりは水を汲で縁側に運び、男「モウお飯が出来ました。お早く被成まし。■「どうして／＼まだめつたには給に往やアしねへ。●「ひもじくツても我慢をして給ないヨ。男「アハハハまた各々にすねるのかネ、今日はモウお茶が美味物だから早く上るかい、ト（わらひながら下へをりて

ゆく) 是より嬢どもは顔をあらひ、髪を撫上、種々用をなしながら雑談の體と見るべし。▲「何様だノお文さん。今朝は放心としてゐる様だぜ。昨夜ひどい目にでもあつたか。ト(いへどもおふみははじめてざしきへいだされしんこ故はづかしさうにしてゐる) ●「ナアニひどい目に逢て嬉しいのす。ノウお文ほうまんざらでもなかつたらう。自己が隣の座しきに出、ゐて見たが、随分好男だツけ、かはひがつて貰たか戀情がつてやつたか。ト(わらひながらいふ) ふみ」をかしいネへ。何だかさつぱりわかりやアしませんヨ。ト(につこりわらふ) ▲「フウム嬉しさうに笑ひながらわからねへもよく出来た。 ●「ホンニヨ今出る新嬢は如在ねへから、其様なことにかゝると味くやるのサ。掛か何だ。エエ。トいへども是はわからぬとおもはれたり。 ▲「ナアニ本形サ。 ●「素人じみて否だノウ。 ▲「チャ素人といへば梅吉さんは何様したらうノウ。 ●「チャ素人といふけれど梅吉さんの理は違はアナ。柳さんがマア店ものゝやうな事は少しもなくツてサ、それで實があつて行渡りのいゝ程のいゝ。 ▲「チャ少しはお掛合でもあるのか、大造に貰るノウ。 ●「ナアニ左様ぢやアないヨ。梅吉さんをはひさうだと思ふからサ。 ▲「チャ左様いへば此間不分明と聞たが、秀八さんがお客に出て居て何だか梅吉さんの様な者を障子越に見たといふ事だヨ。 ●「ほんのことかねへ、氣味のわるひはなしだ。 ▲「何様でもよくはなるまいねへ。

何でも諸方でかはひがられたから長命は出来、 ●「チャ〜左様かそれぢやア是から憎がられる様に仕ようヤ。 ▲「ヘン誰がおめへをはひがるものか、お前をかはひがる者は龜さんばかりだ。 ●「フウムまた他人のことをいふのか、お前も餘りかはひがられる方でもねへ。新川の榮さんばかりだらう。 ▲「お互にか。 ●「チャ情人の噂で思ひ出したが、昨日の本はどうしたノウ。 ▲「ウムあの昔本の強い女郎の草紙か ●「左様ヨ。あんな氣の丈夫な女があるだらうかノ。 ▲「氣のつよいのはいくらも有けれど、此本の様なつよいお侍の様なのがあるものか。 ●「チャそれだネ昨日よみかけた後を讀でお聞せな。ヨウ後に何ぞ來ると奢るから、 ▲「イヤ〜又句が堅ツくるしくツて面白くないものヲ。 ●「アレサそれでも其女郎の仕舞が何様なるか知れないからサ。 ▲「此女郎よりか此方の仕舞が間違はねへやうにしたいもんだ。 ●「アレサおゐらも聞たいから讀でおくれヨ。後に急度御馳走をするから、 ▲「もの好きな嬢だノウ。それよりか黄金菊の二編目を讀うぢやアないか。ト(中本を出す) ●「マアそれよりか其大キイ本をお讀なねへ。 ▲「ハイ〜左様ならよませう。ドレ〜エ、引と、何所まで讀だツけか、ヲ、此條だ〜。 ○上略情のおもむき世の常の遊女とは事かはり甚深切なれば幸次郎は一圖に道芝を娶て妻にせんと思ひ込常に心の底を道芝に語るを聞て道芝は莞爾笑ひて我苦界に沈みてより以來新し



きを迎へ舊きを送り

130

●「チャノ、そりやア何の事だらう。▲「それ見ねへナ、それだから情合書にしようといふのだアナ。●「それだツても舊ひのを送るの、新しいのを迎に行のといふからヨ。▲「舊いといふのは馴染の事、新しいとは初會の事だアナ。●「チャノ様かそれでわかつた。そんなら其後を讀でおくれナ。▲「此次わからねへといふとモウよまねへヨ。●「ハイ、ごうぎにむづかしいぜノウ。▲「知れたことよ。よみてがいゝからむづかしいのサ。エヘンエ、引

舊きを送り片時の夫婦となりし人幾許ぞや凡そ此國に名ある人我肌ふれぬは一人もなししかれば商人の妻となるも恥かしく思ふに況て武家の室とならば生先ある御身をはづかしむる基なり此事を再度いひ出し給ふなさればとてこの後御身に對し疎くなるにもあらずといひて身の從良の事は一向に取敢ずそも、道芝は常に遊女の終りは跡をかくすをもつて高しとせりされば道芝は毎度傍輩にいふやうは自他ともに河竹の身は今誰が妻となりぬ彼は富貴に惚たり人品に泥しゆるなりなど、言れるさへうるさきに後には子あり孫あり膝の下より祖母さまなぞと稱せられんと疎ましく亦老はつるまでうろくして他人に見られるもはづかしく凡そ遊女は終りを他人に知られず行衛隱すこそ本意ならんと

▲「チャバからしい、それぢやア此所に居るもなア不殘山の中へでも引込ねへければならないねへ。■「ほんにサねへ。そろく支度をして木の實や何かを喰ならはふや。●「栗と椎の實か。

▲「唐茄子と薩摩芋にすればいい。●「ヲホ、、あけ物のやうだノ。▲「チットさつま芋は揚るが唐茄子は。●「チャ素人の所じやアあげるヨ。▲「ヘンそれが本の讀賃か恐れるノ。■「チャホ、、それにやア鮮にでも仕様かネ。▲「イエマアおあづけ申ませうヨ。それよりか後にお茶でも買ねへ。●「イヤじやうだんは置いて梅吉さんを聞てやりてへもんだ。▲「さしでも有やアしねへか。●「アレサ道外ぢやアないヨ。かはひさうだから、どうぞ全快してやりてへものだ。

同じ勤の中裏にいかなる故か梅吉は、友傍輩の評判よく、出先で落合一座する其人毎に睦ましく、誰一人としてひるきせぬ者なきまでに、愛敬の深い色香も今ははや、日毎に弱る病の床。妊身の苦勞と柳吉の音信戀しき胸のうち案じ煩らふその風情は、既に初編に盡したれば、猶くはしくはこゝにいはず。よろしく察し給へ。

■「衆人が梅さんを思つてやるが、秀八さんの様には出来めへ。●「ナゼ。■「なぜといふが此間松本の座しきでまぼろしの姿を見てからといふものは、毎日水をあびて二階でお百度をしてやるといふから信切ぢやアねへか。●「しかし秀八さんも今に又苦勞をするだらうヨ。▲「なぜだ

へ。●「この頃出来た彌三さんといふのが、モウ／＼何様に程がよからう。此間見たが誠にやさしい様に好男だは。▲「チャなぜ悔しいだらう。をかしいノウ。●「それだつても餘り程のいゝ男だから面が憎いはナ。▲「チャそれぢやアお前は男のわりいのが好か。●「ア、男の悪い方がいゝヨ。世話がやけねへで手放しても案じがないから。▲「なんの左様いへるものか、男のわりい癖に女好で、無理にこじつけて諸方戀慕歩行のが有はな。そして自惚で他人には我儘で、程をよくして、女房や馴染の女には當りの悪いのが、幾人もあるから一様にはいはれねへヨ。●「それも左様かノ。■「それぢやア同じ苦勞をするならば男のいゝ。▲「金の有さうなのか。●「チホ、、ありさうでないのが多いヨ。▲「チホ、、それぢやア急度金のあるの見届けるか。■「以前請取て。▲「そして斷るか。●「チホ、、それぢやア始終男は持てねへはな。▲「そりやアさうとモウ下が片付いたらうお飯を給て來様ぢやアねへか、なぜ呼ねへだらう。●「ア、引承知た。今朝はお内室さんが堀の内へ出かけたから、且那はまだ朝寢で各々に勝手をやらかして居るんだはへ。▲「なるほど左様だらう。それぢやアおゐら達もちツと油をうつてもいゝノ。■「あんまり賣ねへ事もねへぜ。▲「ナニ此節は油をうつても合ねへとヨ。●「チホ、、それはほんとうのあぶらのはなしだアナ。つまらねへ。▲「油といへば此頃ぢやア初みどりは何様し

たか小間物屋に頼んでも持て來ねへノウ。■「ヤ此間聞たらば馬喰町の菊屋といふ本屋にあるとヨ。あの初みどりの様ないゝ油はねへノウ。▲「サア／＼お飯にしねへな。今にモウ髮結さんが來るぜ。そして房八さんお前は里吉さんと津藤さんのやくそくがあるぢやアねへか。●「チャ私さやアさつぱりわすれたヨ。▲「それ見た事か、また支度が間に合ねへでじれやうと思つて、サア／＼衆人がお出でないか。●「あかいきよかう。▲「フムン新らしさうに唐言葉か。●「へんおゐねへ唐人だらう。チホ、、。トみな／＼下へのく。

第十八章

叮嚀に手を下る新嬢を見ては、繪土唄女の姉さんの様だと誇りて笑ひ。亂酔て行狀不作法娼妓を快氣の能婦だから、呼んで御覽被成とは、ひるきの口上。酒を禁酒て實意になつた唄女を、チャ彼女は老込で誠に評判がわるくなりましたとは一人の娘分が、何かのそねみより言ふれられし薄命なるべし。されば流行は日毎に變り、盛衰は一夜のうちに種々となる。否な嬢がいそがしく口がかゝり、美人明て居て氣の毒なほどひまな事あり。彼秀八は珍らしく今夜は一人部屋に残り、越方行末の事を案じうと／＼としてありけるが、勞れて寢入し丑滿ごろ、男の聲「秀八さん

くト(しづかなるこゑにてまくらもとにてよぶ) 男「秀さんく、条本でございます。どうぞお
否でも。ト呼ばれてイト秀八は、起て支度もそこく、に、駈出したる夢の中裏。条本さして急
ぎつゝ、路次の口へ至る折しも、何心なく傍近を見れば小蔭に佇む女△秀八さんと聲かけられあ
やしみながら立上り、見れば姉妹同様に陸ましかりし梅吉が、赤子を抱て在けるゆゑ。秀「チャ
梅吉さんかへ。なぜ其處にお在だ。そしてモウ赤子さんが出来たのかへ。よくマア早く外へ出ら
れる様になつたねへ。ト近寄見れば面やせて色青ざめしその風情、雨の柳にたとへられ、常さへ
柔弱な梅吉が、永き病に勞れはて殊に産所の苦しきは、死苦八苦ともいひつたふ。これは男に別
れたる戀の切なる大病に、やつれて出産なせしゆゑ、いとかはゆらしき赤子をも抱手たゆげき力
なさ。眼には涙を浮めながら、梅△秀八さん私やアネ中々此所迄来られる様な事でないがネ。
此子をお前に育て貰い度ばつかりに來たのだヨ。日頃の好身にどうぞ後生だと思つて世話をして
おくれナ。秀「チャお前はそして何様をしただ。梅△ナアニ私はとてもモウ生られないから、それ
でお前に此子を頼むのだわネ。其かはりにおよばずながらお前の事は草葉の蔭から守て居て、何
でもおまへの望がかなつて仕合のよくなる様にいたすからどうぞ、此子や私をかはひさうだと思
つて斥様しておくれな。秀「そりやアモウ他でないおまへの事だから、何でも私の力にかなふ事

はしてあげるがネ。外の事と違つて赤子さんを育てるには母御の乳が一番ぢやアないかへ。それ
はマア里にやるとも乳母を置ともして育てるけれど、實の母御が側に付て居ると育やうがらがふ
はネ。それだからおまへも其様な心細い事言ないで、良藥を給て達者になつて、此子を育ながら
柳さんの便を樂しみに待てお出なねえ。梅△イ、エどうも何と思つてもなかく生られはしな
いヨ。斯して居る中にもモウ早く來いと責られるから、私きやア冥土とやらいふ所へ往なければ
ならないから、どうぞマア此子を手取ておくれヨ。お願だから。秀「チャそれぢやアどうして
も死ぬといふのかへ。かならずく其様な氣におなりでないヨ。ドレマア赤子さんをばチットお
抱せ。ト抱とれば、梅△それ御覽私ほど疲ては居ないヨ。ト嬉しさうに笑ひて、亦はらくと
涙を落し、さも哀れなる立すがた。秀八は赤子を口元へ抱き寄て、秀「チャくかはひらしい顔
だねへ。誠にマア柳吉さんにようく似て居るヨ。といふ中にはや梅吉が、姿は消て一團の陰火と
なつて、陰々とたゞよいく、飛去を見れば忽ちこわけ立、さすがに利發の秀八も、女の事ゆゑ
おそろしく、殊にあかりもあらざるくらがりウン引ト其儘絶入けるを、暫時誰も知らざりしが、
夜更て歸る長家の娼妓三人四人が、一同に見つけて驚きさわぎ出し、長家惣出の介抱に、まづ秀
八を我家へ抱き入て水を吹かけ、湯よ藥と大勢が取かこみ聲々に呼立れば、やうくく少し氣の

付様子、衆人も勇み立猶念ごろに勞はりて、●▲「秀八さんく」。氣を確かりと被成ヨ。何様したんだへ。アレサ其様な顔をしてないで、サア薬をもつとお上り。ト（またくきつけをあたへせなかをさすりなどして）能かへ氣が付たかへ。そしてマア何時の間にも外へお出たか氣味のわるいねへ。■×「秀さんモウ正氣におなりか。しつかり被成ヨ。秀「アイ最いゝがネ今の赤子を此手へおくれ、私か育てるやくそくだから、●▲「アレマアをかした事をお言だねへ氣味のわりい。何か邪祟でもしたのかねへ。×「コレサ秀さん放心被成でないヨ。赤子とは何の事だへ。秀「アレサ今梅吉さんに頼まれた赤子の事だはね。●▲「ヲヤく梅吉さんは今にも知れない大病だから、何此所へ来るものかね。秀「ヲヤそれでも今梅さんがわざく路次口まで来て私が条本へ出かける所を呼かけて、しみくく頼んだから粗末になると、私が濟ないよ。トいへば、衆人臆を潰して顔見あはせ。たがひに夜中のことなれば、こわけ立たる此場のありさま、何となく前後が見られ、物すごくおほゆれば、氣よはき妓どもは身を縮めふるへて居るも多かりし。■「アレサ秀八さんおまへはまだ正氣ではないネ。×「モシ秀八さんコレサ氣をおつけヨ。秀「アイヨ氣は付たけれど、赤子の事は私が請合たから此所へおくれヨ。トいはれて衆人氣味わるく、跡じさりをするばかりにて、種々と評議をなし、醫者よ祈禱と相談に時刻を移して居たりける。

そもく此一條は辰己の友人櫻川由次郎が、昔の人に聞たる物語なりとて幼心のうる覺えを拔々噺せしを聞傳へてお伽草紙に綴りたれども、あへて其實をしるすにあらず。十を數へて九ツは予が例の寓言なり。猶これに等しき怪談の三四十年前にもありて、幽靈何がしと異名を呼るゝ老女彼地に存在する由なれど決して其傳を記すにあらず。心狭き野暮なる看者僅かに其實録を知つたりとも用捨卷毎にある作り物がたりの遠慮をしらずして、半可通の詳論なく、たゞ人情の誠をのみ綴りて教訓の端となすが作者の得意と推し給へ。且此梅吉が幽靈は秀八の夢と人の一念にてなす所にして、常にありふれし咄しの幽靈にあらず。卷の終りを出すを待で、これにも批評をなしたまはゞ、是また作者の迷惑なり。唯御ひるきの尊覽を願ふのみ。

再説秀八の親方は凡事ならずと察せしゆゑに、先良醫者を招き看病を加へ其夜を明しけるが、秀八やうくと心氣の治まりてや、一人部屋に寢て居たりしより条本から呼るゝ心持にて放心放心中裏を出にかゝりし所に、梅吉に出合し始末をくはしく語り、赤子を抱くと思へば梅吉の姿は消へて火の玉の飛ざるを見るよりおそろしくなりて、其後のことを知らずとこたへければ、主人をはじめ衆人も日頃秀八が梅吉と睦しかりしことを思ひ合せ、萬一宿へいとまを遣はしたる梅吉

が、病中に産などして苦痛に死ぬる最後の際に、一念の魂しいが秀八へ逢に來りしものかも知るべからずとて、心の利たる人を使として梅吉の宅へ遣はしける。

いとくあやしき談に似たれど、近來も既に拍掌の奇談あり。中裏何某娼妓客人より立派なる衣服を買ひて、いまだ着用せざ間に煩らひて宿に下がりむなしくなりしが、彼衣裳をば親方の許に留めて置しゆゑそれを新嬢の仕掛になさせしが、其妓もいまだ着ざるうちに彼衣類はいづくへか失てある事なし。妓もおどろき主人方も不思議なりと詮議して在ける所へ、彼女を葬禮し寺はその主人の寺と同じ寺なりしが、或日其寺より彼衣類を送り來りていふ。昨夜あやしき女只一人寺に來り本堂に參りて、年のゆかざる小僧に此小袖を渡して回向を頼むと申て消失たり。女の風俗小袖の模様全く他の檀家にあらず、心當りは此お家に候ゆる間まゐらすると言てさし出すを見れば、是だづぬる所の衣裳なりしゆゑ、身の毛もよだつて恐ろしく、衆人奇異の思ひをさせしが、元より情ふかき主人方なりしかば、病死せし女子の執心をあはれみ、彼小袖を寺に納めて幡天蓋となし別段に回向の料を寺僧に送り、其菩提を吊らひけり。かゝる類の現にあるを思へば、世に婦女子の念は絶えてなしといふべからず。予は其主人に因みてこれを聞てこゝにしるす。

それはさておき、こゝに秀八の主人が遣はしたる梅吉への使の者は、いそぎ其家に至りて梅吉の病氣を見舞し所、昨夜子の刻の頃に出産して、生れし子は健かなれども産後のなやみつよくして、丑滿の時刻にはわづかに息の通ふのみなりしが、寅刻時少し正氣になりてよろこぶ間もなく、曉にいたりてたのみなく、只今臨終におよびしと、梅吉の母が涙ながらに答へければ、使の男はさてはおどろき、和哥町へ飛がごとくに立歸る。

此とき秀八の病氣は全く治りて床をはなれ、障子を明て向ふの屋根を見れば喜悅烏吉兆を告て、カア／＼。是よりめでたき物語を續て尊覽に備へ候。

古今の眞名序にしるされ

たる花鳥の使にや

入相の鐘にうれしき花使

狂文亭 春 江

第四編序

夫行遠者必自邇登高者必自卑といへり。故に故人は童子の言を取、老婆の聽を籍とか。予このゆゑに御談巷談の淺々しきを題として鄙俚俗言のたはひもなき草昏を綴る事廿年來。そまたりし山住より、三才子の教に淺瀬を渡り覺て、四澤に滿る春水と改名し、東の春雨を著して以來、更に門人友人の筆を借す、拙しといへども自作愛翫せられて書買も閉たる草蘆を問ふ事、舊日に倍す。されば梅に由縁春にたとふる外題中本をこのまれて、其の好に應ずるものはや數十部。さるが中にも此春の曉に突出したる八幡鐘は、ゆふくとせし平林の梢に響きて、金幸堂の金煉調ひ、呂律正然として鐘に幸ひをなすは、是金幸の名全自性。されば出販の時刻をうつさずして、全本今や滿尾の巻をつきいだす。晝は終日夜は終夜、徒然をなぐさむよすがとなりて、二六時中看官の寝むりを覺す八幡鐘。他の著述は捨鐘の數にも不足と身びみきの、販元も亦少なからず。追々著作注文に時をかぞふる活業の繁多は、四方の童男達や姫御前方の御賞翫が、日に増ゆるの筆果報。久しく聞たる金龍山上の鐘を、しばらく風に吹おくられ、市中騒々たる裏家に住て、鐘は上野か淺草か、いなそれならでこく町の音を軒端に聞ながら、二六時中の急作は

古人の眞似に同じけれども、偽ならぬ狂訓亭が、例の忽卒稿成し、八幡鐘の第四輯嘘ぢやござらぬ大當は、ひゞき渡ると自讃して、鐵砲町に程近き石町四丁目の新道に、舊き趣向を新しく發市となすのみ。

第四編 卷之一

第十九章

大原や虫もさこねの歌まくら、馬追もありはた織もありと、山東庵が狂歌ならねど、こゝは箱根の山ふかみ、馬追男のだみ言葉、機織娘に貴妃もあり、されば世界のはなれ里。となりへ貸た擣衣の音も、落葉の森に木精して、いとど淋しき小夜中に、戀する身とていとどさへ、寐られぬ思ひわびしげに、男の寐顔をさし覗き、涙さしぐむ湯本のお直。しづかなる聲にて、直「柳さんくアレサ柳吉さん。少し目を覺しておくれなねへ。ヨウ柳さん。トゆりおこされて柳吉は、枕を離れて四隅を見まはし、柳「ア、引否な夢を見た。直「情人の女中と喧嘩を被成の夢かへ。柳「ナアニ其様なことならいゝが、悲しい夢だからいけねへ。直「かなしいとは何様なことをへ。柳「エお前に別れる夢を見たのサ。ト言れてお直は膝をすゝめ、直「エ柳さんへ。おまへの氣はマア何様したといふのだらうねへ。どうぞ後生だから實正のことを言てきかせておくんなさいましなねへ。柳「ほんとうの事とは何を。直「なにをとお言だけれども、私きやア苦勞だから宵ツ

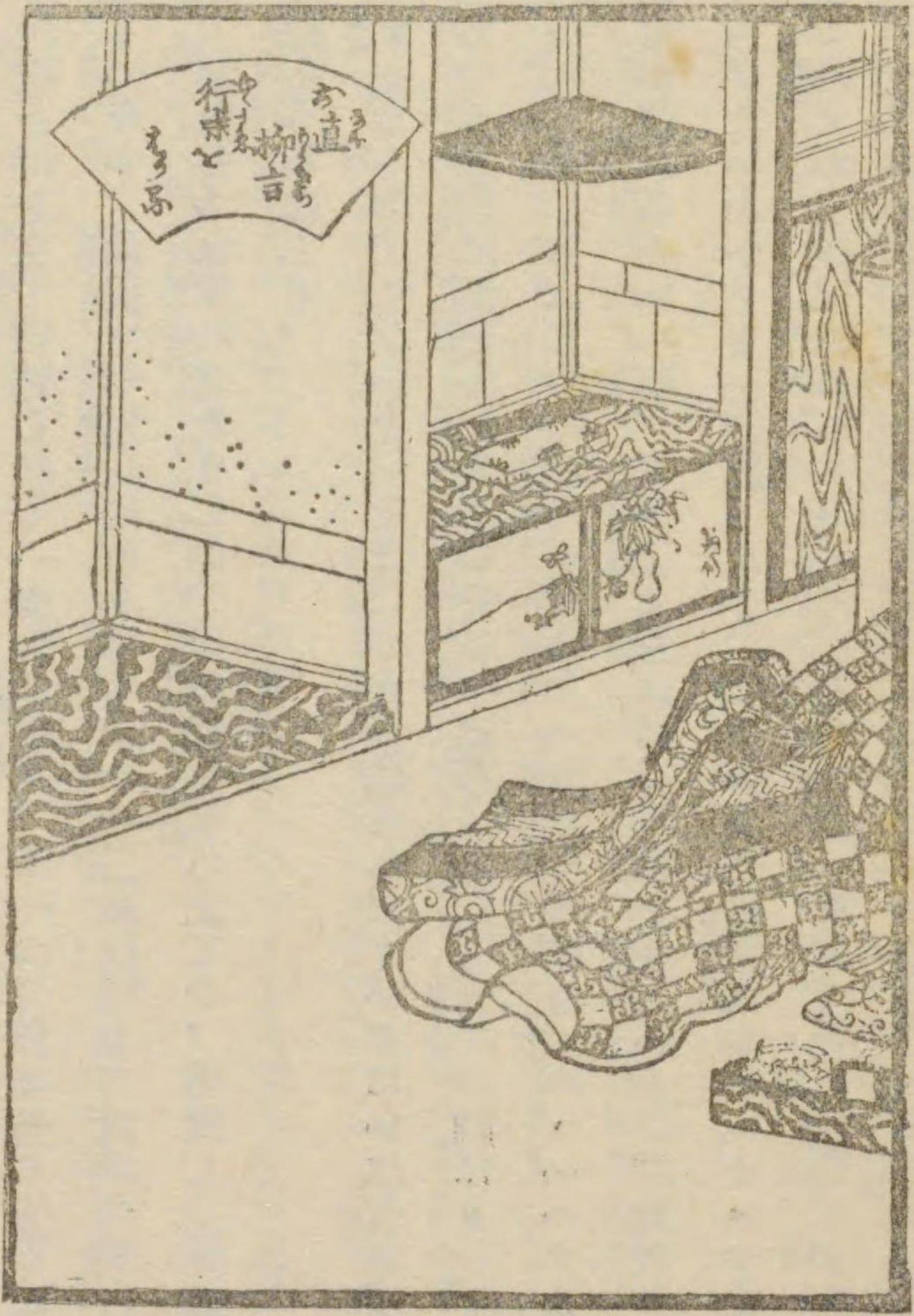
からおまへさんの寝てお在の顔を見て、泣てばかり居ましたは。柳「なぜまた寐ないで居るんだね。そして私の顔を見て泣とは何様したわけで、直「サア四五日以前の山中の難義を退れた嬉しさに、ツイ夜を明した御堂の内こはいあげ、、、、、なものだと思し召ませうが、縁があればこそおまへさんも、今こそ否がつてお在だけれど、かはひさうだと被仰て私のいふことを聞わけておくれぢやアございませんか。其上斯して昨日今日段々おはなしをして見ると、三年前私が勤て居たお屋しきへお出なさったお前さん。其時分は年もいかずおよびないと思つて居ましたが、其節もお奥で染川さんだの、作山さんだのといふ女中衆が、誠にモウ／＼お前さんに惚て何様に氣をもんでお在なさいましたらう。それはモウお前さんがお口へお上り被成と、それ志良木の柳吉さんが見えた。今日は何様の衣服でお出の姿は芝翫よりも十段いゝの、三升の若い時分の様だのと、お老女さま方までお賞遊ばしたお前さん。子供同前の心にもどうぞ始終はお前さんに似たお方が在たらばと存じて居た其中に、お前さんはお屋しきまほりを止て、他のお方が代りになる時、おいとま乞だと被仰て、衆人さんへ種々なお細工切地や何かをお上被成た節に、私もお貰ひ申たこの縮緬切、柳茶色の中形はおまへの名にも由縁があり、殊に仕合吉といふ吉の字と、柳といふ字を合せると、柳吉さんとよまれると心で勝手な判じもの、いまだに持て居ます

ヨ。ト小切疊の其中に、八重に封じた柳茶の合合は身の吉祥に、いはふて仕舞置たるを取出して柳吉に見せる。柳「イヤこりやア珍らしい中形を、久しぶりで見るものだ。これは柳亭種彦といふ作者の案じで、北齋といふ畫の名人が下畫をかいて染出した謎模様の一色、他の店で出来たのを御得意のお好みで、私が請取た詠染。おもひも寄ねへ所で今日此ごろ見やうとは、不思議な事だ。直「ネ御覽なさいヨ。それだからかはひさうだと思つておくんなさいました。あの時節今の年だとおよばないながらも、お前さんに何とかいふのでありましたのに、悔しいことをしましたヨ。トいふ顔を横になつて居ながら、情見るに、素顔の美麗これを好風なる土地のこしらへに仕たら、さぞかしなるべしと思ひ見惚て居る。直「なぜ其様に私の顔を見てお在被成んだねへ。つく／＼と愛想が盡てかへ。柳「ナアニサお屋しきに居なすつた節のはなしから、また改めて見たのサ。直「嘘をお吐被成まし、其様な事よりか私は兄さんが病身に成たに付て、モウ二年越此田舎へ引籠されて悲しく思つて居た處で、夢にも斯いふ事にはなられまいと明らめて居たのに、今程迄に成てから京都の兄さんへ濟ないの、またやくそくをした女房があるのと被仰たといつて、何様これ限に思ひ切れますものか。何様しても捨て行とお言なら、私を殺してから後で此處を發足てお出で被成ヨ。柳「ナニサ捨てるのかまはねへといふ理はないけれども、マ

ア京都のお兄さんの差圖を請て來た通りにせずば、此土地の衆へも濟ず。第一私が義理しらすに
 なるし、京都へ何と言って手紙がやられるものかね。直「ナニ夫は私が文を書いていゝ様に言てやり
 ますはネ。全體私は繪土のおやしきへ奉公して、之れから直に彼地の町へ縁付管のやくそくで有
 たものを。兄さんの後を繼
 ばと申てから此様な所の人
 を亭主にするのは、私やア
 否だと直に兄さんの所へ認
 てやりますは。柳「おまへ
 は兄妹の中だから左様我儘
 もいはれるけれど、わたし
 は東の店を仕損じて京都で
 もなか／＼首尾の直る所で
 はなかつたのを、お前のお
 兄イさんのお影で宿なしに



もならないで、今日まで人
 がましくして居られるの
 は、不殘實右衛門さまの御
 ひのみきゆる、少しの間辛防
 すればまた出店の數にも入
 様にしてやらうといふ程の
 御信切、それにお前の様な
 年の重ないお方をだまし
 て、此跡式を押領するやう
 に思し召て御覽じろ、其と
 きこそこれまでの不埒を
 表向にして罪を糺される様に、實右衛門さまにお腹でも立れると、詮方がない私の落度。それ
 がかはひさうだと思ひなら、どうぞ此間の事は夢だとも思ひ直してといふも自分勝手らし
 いが、なか／＼左様した不實な心ではないから、氣をとりかへて。直「イ、エ／＼。何



とお言でも私の命の在中は、止ることは出来ません。ト少し腹を立たる様に、言葉に憤怒を入れていふ。柳吉は此節床の上に座して、多葉古を吞ながら聞て居たりしが、さすがになせし密事を、今さら何と言解ん便もなければ、愚智く〜とさし支たる前後。こひぢの義理の詰びらきは、女の方が上手にて、聞へやさしい愛敬と涙を交て言詰られる一個の才智男、かへつて娘に勝ることかなはず、まご〜して降参するものなり。此節また湯治に來りしもの十一二組は残りて此家に在けるが、其中に近き座しきを借て居たる人は東の者なりしが、長の夜を明し兼てや、借置し三味線の調子合せて中音に、好なる聲のうるはしく、

「かほる心のつれなさを嘸やうらみてふがないをなご心と思はんしよがいふにいはいれぬ身の願ひあいそづかしの有じやうも胸に涙をおし入れのそばへそろ〜たち寄て。(詞はりやくしていはすすぐに)「人やく共しらふじがのれんの内より「おしゆんぼう「エ、「ハテきつい膽のつぶし様イヤきもが潰れるといへば。ア、よく見れば見るほど美しいものだ此愛敬で傳兵衛殿と色事だもの有がたいわ〜「白藤さんやつぱりおまへは邪見かへ「ナニサたとへじや見でなければとて誰もかまひてはねへのさ「その様にいはしやんすなかまひてが有まいものでもござんせぬぞへ。申白藤様アノきのふ秋葉でちよつといふた事。ハ、どふして

下さんすへ「コレサ〜そんなことをいつておれにこまらせる事はねへはなおめへはアノ傳兵衛さんと。二世までといふ中ぢやアごんせぬか「サその傳兵衛さんと切てしまふたわいな○中略

「まつになりたやありまのまつにねて見てわけも白藤にはひまつはるゝうれしさはなたねの花も山吹もいはぬ色なるしなしぶり「それと人目に關取はおしゆんをつきのけきるものをかかへながらに立あがり行んとするを引すゑて中見て見ぬふりの脊と脊中。男のかみをかんざしでかきなでながら聲くもり。そりやすげないぞへ白藤さん源太様いかに關取さんじやてゝ力計りかこゝろまでそのよに強いものかいなほんに角力の噂にもとり〜と聞なれて思ひ初たるその日より中ナン「氣にくせつけてわすられぬ心のたけを打明て

この中お直は眼に涙をうかめながら、柳吉の顔をじろ〜見て、おしゆんの心を身に引くらべて哀れを知れとの思入、自然と顯はるゝ風情あり。

「いふて島田のもつれ髪取上られぬ仇ほれに女子の道が立ものか憎からうともわたり合ト(いふ所にて三味線の三の糸きれてそれぎりにする)直「ヲヤ最少しだのにをしい所で切たノウ。ト獨言。柳「惜い所で切れるのが、花がちらないでいゝぢやアないかへ。直「フンお前さん

はよからうが、今の淨るりぢやアないけれども、女子の道が立ませんヨ。柳「それだと言って他の大事の身上（けんじやう）のことに付て、はる／＼と下つて来て、其家は何様（どう）なつてもかまはずに家の柱とも軸（たし）木ともいふ娘、ゝ、して、かつ手にとりはからつて濟（す）ものかネ。直「ヲヤそして私をなぶつて置て、當座のなぐさみにいたゝゝ、たが、内心は否だから最かまはない。家の柱でも跡とりでも頓着はないから、死ぬともどうとも勝手にしろとお言のかへ。柳「これはしたりさうぢやアないはな。よく考て御覽なせへ。人並勝れた其美くしいので前後（あともさき）も思はずに、ツイ迷（まよ）た私の不埒（ふぢ）。なんとも申分がないから、段々（だんぢ）お前にあやまるのだけはネ。直「イ、エあやまつても堪忍（かんにん）は出来ませんヨ。ト寄添（よぞへ）て突倒す。

第二十章

柳「まことに困つたものだノウ。直「ヲヤ何がへ。柳「何がぢやアねへ。折角（せがく）自己（ぢがら）の腹（はら）の中で異見（いけん）をして漸々（やうぢやく）と思ひ切る様に心を取直した所を、そのかはひらしい顔で、ゝゝゝ、るから、いけやアしねへ。ト笑ひながらいふ。お直も笑顔にて、直「それだつてお前さんも無理だアネ。其様な能男（なんにや）のくせに、女に嬉しがるせる様なことばかり上手で、そして思ひ切て止てくれるの、義理がわ

るいのと逃口上（にがくちがへ）をお言だから、捕（とら）へて放さないのだけはネ。トゝゝゝ、れて柳吉のかほを見上て、しばらく無言（むげん）で考へごとをして居る。柳吉も種々と胸をくるしめて、無言（むげん）にて居たりしが、情（なさけ）お直の風情（ふうせい）を見るに、何様して捨るころになられず、せなかを撫ながら溜息（なげき）を吐て居る。お直は煙草（たばこ）を吸付て柳吉に吞せ、膝（ひざ）を手前（てまへ）に突付て男、ゝゝゝ、いたり結んだりしながら、直「エ柳さん。柳「何だへ。直「ナアニネ外（ほか）のことぢやアないが、私が思つて居ることをいふから、お前さんもよく聞わけておくんなさいヨ。エ否（いな）かへ。エ聞ておくれか。柳「なんだかマア言て聞せな。直「アノネマア私が思ふにはネ。昨日宗八さんに段々お前のゝゝのことも聞きましたから、此末共に私（わたし）はほんとうの御内室（おんないしつ）さんにならうとは申ませんから、どうぞ婦多川（はなづか）の梅吉さんとかにも明して、たゞお側に居られるやうにしておくんなさいましネ。

これは柳吉が路すがら宗八へ酒興（しゆこう）のうへにて過し身のうへ咄（はな）しをなせしを、宗八がまたお直にかたりしと見えたり。

柳「ナアニ、そりやア最過（もつた）た昔のはなしで、その梅吉といふものは他家（よそ）へ縁付（えんづ）て仕まつたアネ。直「ヲヤ嘘（うそ）ばツかり、左様して産（う）だ赤子（あかこ）さんは何様したのだねへ。お前さんに似たらば、さぞかはひらしからうと存じますは。トいはれてさすがに柳吉も、胸（むね）にこたゆる恩愛（おんあい）の、もしや安産（あんさん）なし



たるか、よもそれ程に都合よく、主人方にて承知もせまじ、いかゞなりしとまた更に思ひ出して眼に涙。忙然として在ける折しも、遠寺の鐘聲ヨウ／＼と聞えければ、直「ヲヤモウ寅刻ださうだ、はやく寐やう。柳「エ七ツだへ。そりやア大變だ。さぞ寐むかつたらうのにつまらない事を言て、夜をふかした。サア／＼はやくお休みなせへ。しかし私は寐られなくなつた。直「折かく寐てお在の所をお起申たのはわるかつたねへ。お前さんがお寐なさらずば私も起て居ませう。ア引何だか力が抜てしまつたさうで、誠に手足が利なくなりましては、憎らしい。ト眼を腫ぼつたくして莞爾と笑ふ顔、いよ／＼美しく、柳吉は最早所存を極めてお直を鎌倉へ連て出る氣になりしゆゑ、柳「お直さんお前の心が、實に私の様な者でも便にする氣に定つた事ならば、私も義理を捨て思案をしたことがあるが、打明てはなして看様かネ。ト、、、、てお直は嬉しく、身をふるはし、直「サアは、、、、。柳「ヲヤマア忽卒しねへ。其様にいそがすとま、、、、、、、、入してからサ。直「ヲホ、、、、左様じゃアございません。今何か相談をするとお言ひぢやアないかネ。柳「左様サ他の事ぢやアないお前の身の事だが、相談してもむだだらうけれども、思ふ事を咄してそれでもよければ覺悟の仕様もあるだらうと言のサ。直「何様いふことをするのだとへ。柳「さればまづ斯思ふが、マアお前の身の上はどうしても此所に居て家を繼ないけれ

ばならず、私は鎌倉へ出て親の名跡を立ないければならない身分。左様して見ると、是非離別てしまはないではならず。第一京都の兄さんの所から宗八どんに持してよこした彼正官さんへの手紙は、其家の息子をもらつておまへの聲に仕度といふ相談、それゆゑ村役の孫兵衛とかいふ人が掛合に來たぢやアないかへ。殊に一昨日私も見たが里正の若旦那といふも好漢だから。トいふを聞てお直は身をぶる／＼とふるはしかほをしかめて、直「ヲ、引。否な事おそろしい。(これはいたつてわるきをとこゆゑにわざと柳吉がじらしていゝ男とは言たる也) 柳「ナニ身ぶるひをすることもないはネ。先ぢやアモウ亭主の心持で居るさうだ。直「アレサ其様なことを言て私をいぢめずと、實正によくお前さんの心をあかして、私の合點のゆく様にしておくれなねへ。たとへ何様な無理をお言でも、お前さんがまるで離て仕舞さへしないければ、何でも辛防しますから、柳「そんならばマア不實と知りつゝ言出すが、氣にいらすばそれまでのことサ。まづ斯仕様といふのだヨ。兎てもおまへにはなれるもいやなり。トへいはれてお直は嬉しくもあんどしてにつこりとわらひながら) 直「うそばツかり。柳「ナアニ疑つてははなしは出來ねへヨ。實に離れるもいやなりといつて此處にも居られないから、何と思ひきつて此處を二個で脱落をして、鎌倉へ出て活業ではないか。お前はどうぞ長谷の觀音さまの廣小路か、青柳橋の裏河岸に家を借て、

唄女に出てもらつて、私やア何か手軽い商賣をはじめて、直「梅吉さんと夫婦になつて和合して居て、月に一度か二度私の方へ来てやらうとお言のかへ。ト（わらひながらちよいとしやくをいふもずゐぶんぢよさいなし）柳「イヤ左様先を枯していふものではないヨ。もつとも梅吉の事も宗八がおまへにくはしく咄したうへは、隠すこともないけれど、實に今ぢやア何様いふ心持になつて居るやら知ず、またたとへ私の事を守つて辛防して居るにしろ、段々と借金も出来て居やうから、私の方へ来るやうになるものかね。直「イ、エそれはモウお梅さんとやは、幼年なじみの事ではあり、其事ゆゑにお店をも不首尾になつて苦勞被成のお前さん。梅吉さんを私の身に仕たところが夫婦にならずば居られない義理だから、是非梅さんと夫婦になつてお上な。きつとそして私をもかはひがつておくれなねへ。何も梅吉さんよりは跡で私が惚て先の情人を止させるの、其子よりは私が多分かはひがられ様のとていふ我儘は言ないから、どうぞ同伴に鎌倉へ連れて行ておくれなねへ。柳「そりやア私が願ひだから左様するけれど、其代に京都の兄さんの信切を無にして恩を仇でかへすといふ譬への通り、お前をそゝなかつて此家を捨させる日にやア、他人の家を潰して血筋をも絶す私の不法。其ばちで此末がなか／＼安穩に世を渡といふ事は出来なと思ふが、其時節になつてお前にまで難義をかけるのが、かはひさうだ。直「イエ／＼それはモウ今流

行中形繪本とやらにも幾等も綴てある事で、お屋しきに居た時分から讀で知つて居ますヨ。また其本の中の男は一人で、情人女の三人か二人もつて居ないのはなし、女は情人女同志和合して姉妹の様に睦ましくして、男一人へ貞實をつくすものとしへてあるから、繪本の通りに操とやらを守つて、嫉妬をせずにくらしたら、始終悪くは有まいと思つて居ますは。ト悟たやうなへん答は茶にしたごとき娘の利發。元來惣領の兄實右衛門は四十三才、次の兄正右衛門は三十二歳、今このお直ははるかに間を置いて父正左衛門の妾の腹に出生せしものにて、十八歳なり。彼の正左衛門は不思議の長命して山家の人にもやらす、才智を近在にまで噂されし人の分別の中にまうけしお直ゆゑか、年にはませて萬事にかしこく、適男子にまさるの氣性あり。さはいへども色欲ゆるに家をわするゝのあやまりあるは、是教訓の一端なり。よく／＼用心してよみ給へ。さて柳吉はこの返事を聞いていよく／＼と心を定め、柳「そんならば其氣になつてマア後々のことも、とり納の出来るやうにして置ずばなるまいが、湯治に来てゐる旅人の勘定だの、家内の始末だのは何様したものだらう。直「ナアニ其様なことは番頭の作平が、以前から承知して居る。たとへこゝで相續人が二年や三年出来ずにゐても、商賣がならないといふわけもなし、其内には京都の兄さんも一度は下つてお出だらうから、マア作平にあらましを得心させて、以前勤めたお屋しきへ御

きげん伺ひにあがつて、ついでに鎌倉を見物してかへるとだまして、一旦立退て孫兵衛の言込だ里正の息子の方を断はる様にかたづけて、其上に兄さんの方へ他人を頼んでお前のことをも咄して貰つて、何處で家内を立るも同じ事だから、此處の身上を二ツにして、親類のものに跡を繼でもらつて、私は別にお前の世話をして鎌倉の繁華な所へ住ぐらゐる事は、兄さんがよもやむづかしく言もしまいから。ト是より柳吉お直は金子などの手當をとゝのへ、手軽く作平に承知させ、村役人へは旅立し後にてはなすべしと談合し、柳吉ともろともに夜の明ぬ中故郷をはなれ、人目にかゝらぬやうになさんと十分に支度をなし、三四日を過し、やがて吾家を逃るがごとく忍び出つゝ、名にしおふ箱根山の山路を東北へぞいそぎける。必竟此すゑいかならん。第三の巻を讀得てしるべし。

山ふかみ落てもつれる紅葉のかはけるうへに時雨ふるなり

第四編 卷之二

第二十一章

さてもお時は戀したふ、瀧次郎の尋ね來りしゆゑ、其嬉しさいはん方なく、手に載て撫さするが如くもてなしけるが、其所へ秀八彌三郎なども來り互に物語などすると思ひしは、手文庫をひらきて反古を撰みながら、假寝せし中の夢なりければ、忙然として四隅を看廻し、時「ヲヤ／＼何時の間にか晴天になつた。ドレ火を發してお茶でも煮やう。ト獨言を言ながら、火鉢に持れて消たりし炭をあつめて吹おこす、其埋火も消入るおもひ、逢にし夢がさか夢とならば、再會なしがたきことにもなるか、正々しく打解かたる兼言より、身上づくのはなしまで、何様も夢とはわすられぬ、戀しさ増とは誰所爲ぞ、いかゞはせんと案じ顔、折から表に人音して、「ハイチツトお頼み。時「ハイ誰人。「ハイ私は飛脚でございますが、此方さまはお時さんとおつしやいますかネ。時「ハイ左様でございます。ヤレ／＼漸々におたづね申ました。ヤ御免なされませ。ト家内に入り。「エ、引。私は箱根の湯本から頼まれて參りましたが、此方でございます。ト手紙

をいだし、「アノ瀧さんといふ人を御存じ被成ますか。トいはれてお時は胸ドッキリ、忽ち夢の占かたが、いかゞあるやと案じられ、時「その瀧さんが何様か被成たのでございますかへ。「エ、サ種々とおはなしがございますテ。マア其お手紙を御覽じてよく御相談を被成まし、私は湯本の宗八といふ飛脚で、年中諸方へ頼まれて歩行ますが、此度は大きに尋あぐみました。時「それでもよく知れましたねへ。トいひつゝ手紙の封を切りよみながら、時「ヤヤ、何日頃から湯本に居なさいますか。宗「エ、モウ四十日ばかりになりませうが、湯は相應して腫物は治つても、餘病の出たのが御當人の薄命さネ。○時「此手紙の様子では、瀧さんもマア死ぬ病氣だと覺悟して居る様でございますねへ。ト涙を落して鼻紙にて鼻をかみ、眼の縁を赤くせし顔常よりは潤はしく、宗「左様サ何をいふにも山家の事で、良醫師さまがございせんから、五臓から出た病氣といふと何分療治がむづかしうございますのサ。トいはれていよく當惑し、何と思案も女氣の返事も出来ぬ歎きなり。宗八も尤と思ひ、宗「私しやア他にも用事がございしますから、旅宿へ今晩は止宿まして、明日また参じませう。それまでにいづれともお返事を被成まし。時「左様ならばどうぞ御苦勞さまでも明日またお頼み申ます。私も俄のことで思案が出来ませんから、宗「ハイ、御尤でございます。左様ならまた明日。ト出ゆく後に泣入るお時。逢見し夢が別れかと正體

なくぞとり亂す。

さて此段はいかなる故ぞといふに、お時が夢に見たる所に記せし如く、瀧次郎の身分は押込られて在しなり。されどもやうやく友達の罪とのみ定まり無實の難は除れて近日在所より屋敷へ呼かへされんとありける所に、久しき氣鬱のゆるか顔にあやしき腫物の出来て、其見にくき事いはん方なし。さすが若きものゝことなれば他人に見らるも恥かしく、ましてや情人のお時には見せるも心ぐるしければ、彼在所よりして直に箱根へおもむきて湯治をなせしうちに、勞症の病を發し、殊に異病の毒足に下りて歩行もならず、路用小づかひも盡はてゝの大病ゆゑに、今は是非なく其よしをお時の許へ言送り、路用のたすけ、一ツには對面なしたきとの手紙をとゞけしなり。

さればお時は兎や角と氣をもみ歎きて居る所へ、彌三郎の音信で、彌「ヲやお時さん何様した、泣て居るのかへ。なにが悲しい事があるのだへと、聞も不寐だか氣になるね。トいはれてお時は顔を拭き、時「ツイ今悲しいことがございますから、彌「ハテネそりやアわりいはなした。何の理だか愚智でないおまへの泣く位では、よくくゝな事だらうネ。トいはれてお時は夢に見し瀧次郎の事より、今飛脚の來たりしことをくはしく咄して、時「マア何様いたしたら宜ございませ

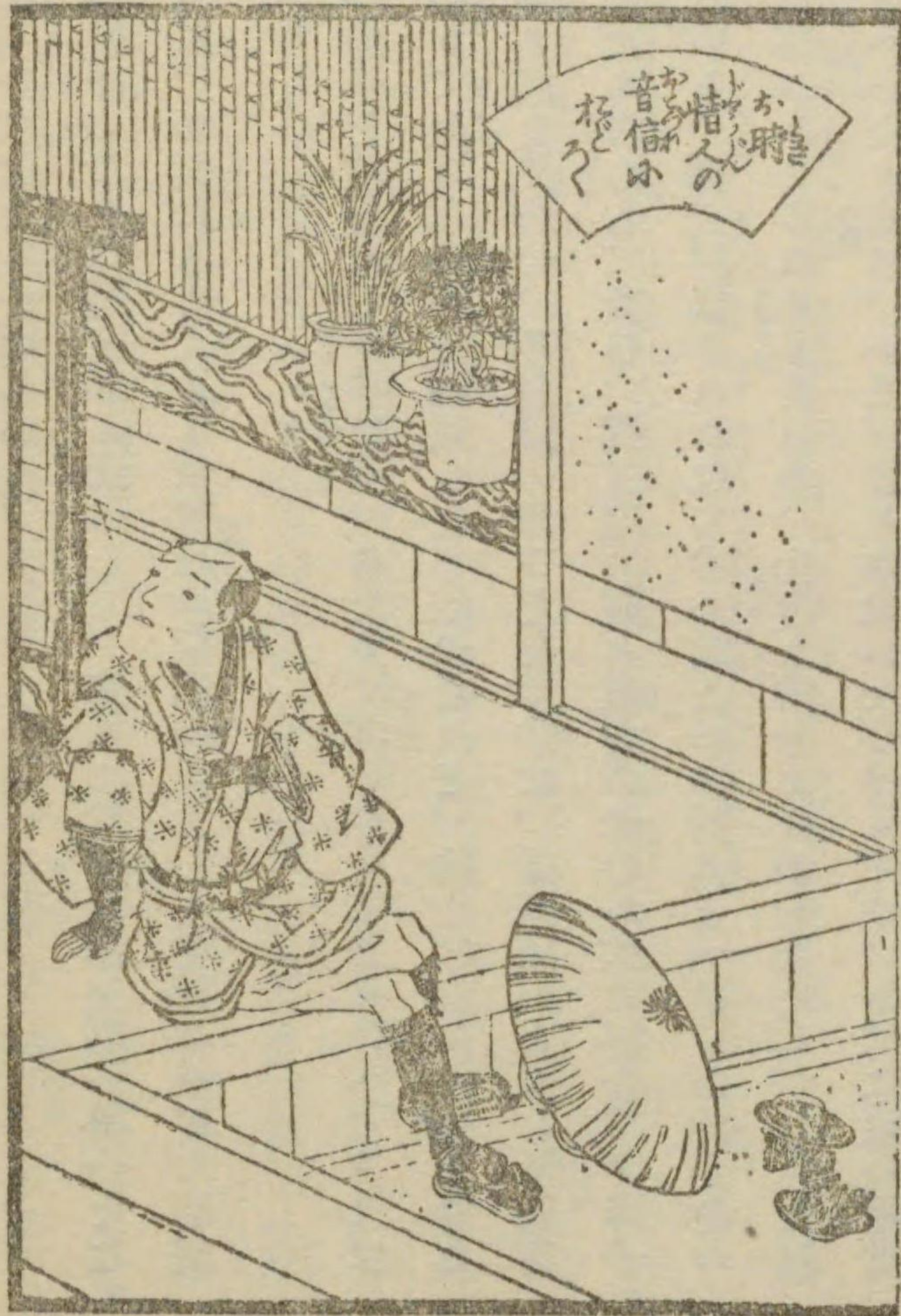
うねへ。彌「なるほどそりやア苦勞だらうねへ。お前も常の氣質が氣性だから、捨てもおかれまいが、何にしても旅先では手重いわけだが。トしばらく考へ、彌「イヤ、能くことがありやすネ。時「どういたしたか能くございませう。彌「イエ思ひ付だがネ、斯したらば何様だらう。他事ではないお君が此節病氣だから醫者にかけて所が、先頃川へ落た時に少しの間だけでも、何か毒水の流を呑だと看察、惣身へ細かに異腫物が發て難義をするから、醫者に相談をして看ると、時候はづれではあるけれど湯治でなければ治し様がない。來年の湯泉節まで捨て置か、湯本へ往て宿へ談じて家内の湯船にでも、二廻りも這入たらよからうといふが、何様も他人を付ても安心ならず、私が往れもせず、と云てお君は嫌はれるとでも思ふさうで、今にも治らずば死ぬなんぞと言ふし何分こまることだが、何とお前の苦勞へ重荷を増やうだが、お君をつれてその瀧さんの居る温泉場へ往ては何様だらう。左様しておくれだと、私が路用も駕籠も不殘まかなふから、夫にしても駕籠の人は大丈夫とした者でなくつてはならねへ。其處で留守のしてがなくばなるまいが、心當りが有ますか。時「イエそしてマア、君女と私ばかりで往れませうかねへ。彌「さればサ。それゆゑ氣の利た頼母しい駕籠の者を頼むはネ。何でも駕籠の人が二挺では四人だから大丈夫だアネ。トいはれてお時も心を定め、時「左様だと誠に私の仕合でございませうヨ。左様して被下ますと、

私の身分は少しもお前さんの御厄介にはなりませんから。ト

これより萬事の支度を調へ留守のことは彌三郎が承知して、宗八に對談を彌三郎が掛合をなし、飛脚に相違もなきゆゑに、お君にもよく言聞せ、駕籠の四人も人を撰みやがて箱根へ旅立けり。

さて此留守に秀八が、梅吉の赤子を頼まれし怪異は有けるなり。其心得にてよみ給へ、されば梅吉の方へ遣はしたる使の立歸りて生れし赤子は蟲氣もなき様子なれど、梅吉は終に死去なりしおもむきを語りければ、是を聞人顔を見合せ、不思議の思ひをなす中に、秀八はいとゞしく梅吉のこゝろ根を哀れに思ひ、主人にも得心して貰ひ、彌三郎に頼み梅吉の母のお秋に掛合て、赤子を秀八が育てんとはからひけるゆゑ、彌三郎はあきれはて、お君といひ秀八といひ、お時が身のうへまで、あやしくも常ならぬ事のみあるは凡事ならず、此身も前世よりの約束なるべし。と思ひはかりければ、早速梅吉の許へいたり看ば、いまだ跡々の取かたづけもせず、お秋は娘の産出せし赤子を抱て胎毒散をふくませながら、眼を泣はらしてゐる。彌「トキニ母御さんお力落しといひお取込の中でございませうが、私は秀八に頼まれて來たが、かならず御遠慮なしに御相談なさいよ。秋「ハイ難有存じます。毎度秀八さんの御信切に被成てくださいますから、お梅もモ

ウ死際まで秀さんの事を申て居ました。彌「なるほど左様でございます。實は昨夜の丑満時分に秀八が中裏の路次口で、梅吉さんにお目にかゝつてネ。秋「エ。トびつくりして彌三郎の顔を見て、秋「どういたして其時分には、モウ一旦息を引取ましたから、彌「サアそれはその事サ。其身の死だ跡ではお前が年を重て、さぞ難儀でもあらうと思つたり、また赤子さんのことも秀八が不斷姉妹同前にし居て育てかねもしまいと思つて居なさつた一念で、魂しいが逢に往なすつたのだらう、と彼方でも噂をして居りますのサ。其處でネ。トいふを聞かけ屏風の方を見て、思はずもむせかへり、膝に涙をば



らく／＼落しながら、秋「ほんに秀八さんの御信切をばあれも申くらし居ましたけれど、彼處まで往れる力があるならば、最少しでも生て居てくれましたらば、たとへ半時でも母の悲しむのがおそいのに、苦みの中でも子はかはいひと看えて、秀八さんの所までも、彌「さればサ。其時しかもその赤子さんを抱てからに、秀八に育てくれると手渡しをされてから、秀八も氣をうしなつたゆゑに、長家中のさわぎとなつたの理だから、主人の方でも承知して、秀八の願ひならば、梅吉さんの産だ此赤子さんを育てるもよからうといふ相談になつて、申すもいかにだが私は秀八とは除れぬ中ゆゑに、秀八の名



代に來たのだから、よく考へてお前の了管れうけんに落着おちたらば、是非この赤子をば秀八が育てるから。トすべてくはしく承知させる。彌三郎の物がたりを逐一聞て母お秋、いと涙のやるせなく、死だ後まで此様に他人愛敬のある娘、なぜわか死をする事ぞ、自由にならば此老が代つて死で母親の、自身に此子をばそだてさせ、娘や孫から手向の水を承るが順であるものと、かへらぬことの繰言が、愚痴に似たれど無理ならぬ歎きとおもへば彌三郎は、いろくお秋に力をつけて、しばらく此處に後々の相談なして居たりしは、難有も頼母しけれ。

○零落おちふれて袖に涙のかゝる時他人の心の奥ぞしらるゝ

第二十二章

彌「トキニ母御さん。何にしても此赤子さんは、マア秀八にお預被成な。丁度私の知已て居る者の裏に里子をほしがる溫和かみさんが在から、直に其家へ頼むとネ、秀八も朝夕顔出しの出来る所だから、此方も安堵して置れるし、向でも自然大事にするから此子の仕合、お梅さんも草葉の蔭で案じも少からうではあるまいかネ。秋「ハイ、誠まことにモウ御信切ごしんせつに有がたう存ます。しかし餘まり御苦勞をかけます事を、平氣になつてお頼申すのはどうか心ない様に思召だらうか

と、私わたしがまた他人さまの氣をかねまして、お頼み申すもどうかと存ます。彌「ナニ、其様な心配こころづかひを被成事なまかることはない。言はゞ秀八の勝手に育様といふわけ、亦梅吉さんも秀八を見かけて頼んだ昨夜の時宜ゆふべの時ぎ。實はモウ里母さとばあを約やくそくして今にこゝへ來るつもり、私も除れないこと、おもふから、小兒の用心の薬まで氣をつけて持て來やした。もちろん今求めて來たのでもないが、種々貯薬たくわいやくの心がけをして持て居るが、此様な時の調法になります。ト懐中の疊紙たうがみより出して見せるも、老女おきなへ氣安くさせんと心付こころづかひ。彌「コレ御覽ごらんじろ。これは赤子あかこから十五まで不絶用たえずゆると、蟲の根を切て胎毒たいたくを去る古今の妙薬でございます。ト取出したる丸薬は、世にしられたる小兒の薬、横山町の薬種問屋大坂屋又兵衛が家傳にしたる天下一方、(ちなみにいふそもく子供こどもの薬多しといへどもこれにすぎたるよき丸薬は外になし今もいよく賣弘うりひろめて世の人のよくしる所なれども猶なほしらざる人も有べしと告るなり)

皇朝古傳 神 壽 丸 (小兒をそだてる人たくはへずんば有べからず。一名 宮崎薬とも呼來る。)

彌「此様に薬までも用意して有ますから、必ず案じないで、私と秀八に任せて置被成がいゝ。イヤまだこゝに良薬がある。嗚呼あゝしかし最とゞきも仕舞けれど、念ばらしに用ひて御覽ごらんじるか。

秋「ハイ何でございますか。彌「エ此藥だがネ。こりやア此間異人から貰つた藥で、實はまだ用ひて見た事もないが、其人の教へてくれるには、何病に限らず煩らつて死だ人に口を割て咽へ吹込で、三日の間生て居る時の通りに、三度くお飯節には膳をすゑて湯茶までも備へて、家内をしづウかにして居ると、たとへ定業で死んだ人でも三日の中に、一旦は蘇生といふことだが、疑ぐつて見れば啞らしいけれども、藥をくれた醫者さまといふものが、誠に無欲で、たゞ難病や大病を救ふのを樂しみにして、禮を受ける氣もなければ、世辭をいふ了管もなし、病人の家に食客の様に居て、其病人が治ると何處へかふひと往てしまふから、一所不住癪の異人だから、マアまんざらな藥でもあるまいと思ひますのサ。ト聞てお秋は明らめねばならぬお梅の命ぞと知つても、母子の愁情にて夢にも再度一言の言葉なりとも聞たしと、思ふ心の迷ひには覺束なけれど頼母しく、彌三郎の言葉にすがり、秋「そのお咄しではなかく、容易いたゞく事も出來ないお藥でございませうが、兎でものお恵みにどうぞ梅吉にいたゞかせて被下ますことはなりませんまいかねへ。ト遠慮しながらしみくと願へば、元より情深くかなはぬまでも救たき望に任ずる心ゆゑ、彌「ナニく願ふの頼まれるのといふ事はないはネ。マア十が九ツといへばへつらいに當る言葉、十が十一無益ことだと思ふけれど、萬一蘇生ことがありましたらば、昔語にもな

りさうな僥倖といふものだ。サアく遠慮はないから多分上て御覽じろ。ト藥をお秋の手にわたし、彌「ドレかはひさうに、マアお近付に成つて赤子さんの事も請合うあいさつをして置ふ。トいひつゝ屏風をおしあけて看ば、哀れや近ごろまで美人揃ひの中裏に、一二を争ふ梅吉の花の顔ばせ、みどりの黒髪、雪の肌への潤はしく、一度笑ば頼みもせぬ美服が出來、少し愁を含んで涙を催ふせば、母へみつぐ雜費むしんをいはずして調ひ、たとへ薄浮のことがありとも、一會の酒興をなせば本望ならんと衆人にしたはれし身も、此曉の無常の風、名におふ梅の花香を散して結びし實をも他人に任す、その魂やいかならんと、推はかられて不便さいはん方もなく、お秋の涙を身に請て、ともに袖を濡しながら、梅吉の枕元にさし寄見れば、天性の美麗は、かゝる大病の勞れにも衰へずや、はじめて看る彌三郎心の内大いにおどろき、そもく長き病中といひ、難産同前の死顔が、かくまでうるはしく見ゆるとは、誠にもつてふしぎなり。もしや猶息の通ひもするかと、しづかに梅吉の脈を伺がひ見るに、六脈冷々としてさらにかよひはなければ、かすかにして胃の氣の通ふごとくなれば、彌三郎は元來醫道の心がけも有て、谷玄圭先生に教を學びしことなれば、胃の氣の通ふしつて心に覺えのあるゆゑに、梅吉の臍下丹田に手を當て居ることやゝしばらく、首を傾け考へて居たりしが、彌「イヤ母御さん。私が素人の了管でらちもないこ

とをいふやうだが、餘程見所があるから、必ずく此子の骸を動かしたなさんな。そしてマア此藥を無理に服用して三日の間、寝かして置て功能のあるかないかを待が宜ございます。トいはれて母は覺束なく、思ひながらも頼母しく、秋「ハイ、誠にモウ有難うぞんじます。どうぞ蘇生で少しの間でも存命居てくれますれば、其中には何様かして私が先へ死でしみますから。彌「ナニくそんなつまらない事を言なさつてはいけやせん。何でもマア母子が百萬年も生延るつもりがいゝはエアハ、。ト付元氣の笑ひも力をそへる氣の篤實、彌三郎お秋と俱に手傳ふて、彼妙藥を梅吉に與へて介抱なすといへども、なかくもつて蘇生氣色はなけれど、只少し便りといふは、死果し口へ入たる其藥の生あるものゝ呑む如く咽を下りて腹に入る。通ひは既に顯然と二人はいよくこゝろ嬉しく、何やら頼み捨られぬものとまでには思ひつゝ、猶々大事に手當して夜着をうち着せ、しづやかに屏風を圍ひて座に着所へ、兼て頼みておきたりし乳持女を伴ひ秀八が秀彌三さん來てお出か。私きやアまだ鹽梅がわるいけれども待兼て、乳女さんを連て赤子さんの迎ひに來ましたは。トいひながら、上り口にて紙に包たる金何ほどかしらねど、香奠の心にてさし出し、秀母御さん、とうくなくなつたさうだねへ。ト涙を落し、秀誠にモウ實情の姉妹のやうにして居たから、悲しくつてならないヨ。梅吉さんもさぞ死ぬのが否だつたらうねへ。

私は夢の様に梅さんに物を言たり、いはれたりしたから承知しては居るけれど、爰へ來て見るとまだ梅さんが達者でお在の様だヨ。トいふ間に傍邊に寝かせし赤子の泣出せば、秀「ヲヤ私やア肝心の赤子さんの事で來たのに、泣出すまでわすれて居たヨ。サア乳母さん、どうぞ乳を吞しておくれナ。誠にかはひさうだねへ。ト抱上て赤子の顔見れば、一度臙しに抱かへたる其顔にたがはぬ愛敬、梅吉の倅殘す愛らしさ。かへて其身の顔におし當て莞爾として、秀「かはいらしいねへ。ヲヤく笑つて居る様だねへ。かはひさうに何にも知らねへで居るだらうかね。ト口元を赤子の口へ押付、秀「ヲヤ乳だと思ふさうで、私のくちびるをなめるヨ。かはひねへ。ト抱しめる。彌「コレサ秀八さん。其様にひどくしちやアいけねへ。終にはなめたりさすツたりして嘗めなくして仕舞もんだぜ。サア乳母さんに抱して乳を吞しねへな。里親「マアお乳を一口お上申ませう。ト抱取。里「ヲヤく誠にかはひらしい小兒さんでございますねへ。秋「秀八さんく、モウくなんともお禮の申上げやうもございません。何様した御縁かお梅が存在な時分から、お前さん方を力にいたしてから。ト泣ながら、秋「とうく死去て跡までも御苦勞をかけると申すは、彌「イエ是もよくく縁でございますませうはネ。マア何にしても先刻からおはなし申たことだから、近所の衆へはまた少し快氣ましたやうな案配で居ますと、手つかずに言てお置

被成ひなまし、餘あまりさわがしくして居るとわるいから、またいづれ出直して參まゐります。くれぐれもまよはないであの儘ままに。ト屏風かたの方かたを見てお秋あきに推量つひ。彌やサア秀八しゅうはちマア歸かへんなヨ。長く居ちやア却かへて歎なげきが増ふ様ようになるはナ。秀しゅう「アイそれぢやア左様さやうしようねへ。とお秋あきに向むかひ、秀しゅう「左様さやうなら母御おつかさん。私わちやアマア一旦いちだん歸かへりますヨ。何なにれまたネ彌や三さんさんをよこしますから、氣きを丈夫ぢゆうぶにして必ず遠慮えんりょなく萬事ばんじの相談さうだんを被成ひなす。此こゝ赤子あかこをば私わちがしつかりと預あづかつたからネ。少しもお案あんじでない。私わちの子こにして大切に育そだてるから。秋あき「ハイ左様さやうならばどうぞよろしく願ねがひ申まゐります。私わちはモウ何なにだか氣きがうつとりとして前後あたまがわからない様ようでございます。ト

後は涙なみだの露つゆ、小兒こども抱かかせて立出たる秀八しゅうはちは、また身に引ひくらべ、消きゆくお梅うめが柳吉りゅうきちをさぞ戀こしくもまよふらん。殊ことには其身みをわけ殘のこす恩愛おんあいいかに有あらんと、後髮ごふつさへ引ひくごとく、元もと來もと苦界くがいの苦勞くろう人ひと。たゞ何なんとなく心細こころこまさに泣なきもいとま乞こして立出たれば、お秋あきも其處そこへ打うふして絶た入いる思おもひやるせなき涙なみだにはれまなかりけり。

第四篇 卷之三

第二十三章

玉たまくしげ箱根はこねの山の峯たかね深く、水海みづうみはれて清すめる月つきかげとは、夫木集ふぎしふの詠よみ吟ぎんなりけん。そも箱根はこねの温泉おんせんは、所謂すゐせん塔たの澤さわ堂どう島宮しまみやの下湯したゆ本氣賀底倉ほんきげそくら芦あしの湯ゆなど、すべて其數かず七湯しちゆあり。こゝに湯坂ゆさか峠とうげといふは、湯本ゆもとと塔たの澤さわの間の山やまにして絶景ぜつけいの所ところなれども、今は九月くがつの中旬ちゆうかんとなり、湯治ゆぢの人ひともいと稀まれにて、往來ゆき絶たへたる秋あきの夜よの月つきは、湖水こすいに光ひかり々と木きの間まをまれて、朗はらかなに淋しみしさいはん方かたぞなき。さてもお直なおと柳吉りゅうきちは、戀この山路さんじゆを心こゝろから迷まよひ出でたる忍しのぶ山やま。露つゆけき草くさを踏ふわけつゝ、此こゝ峠とうげまで來きりしに、いかになしてか柳吉りゅうきちは俄突然に鳩尾はなはな突つやぶるがごとく苦痛くるしみして、四肢てあししびること毒どくにあたりし様に覺おぼえ、忽たちち草くさむらへ倒たれるれば、お直なおはうろたへ抱かかき起たせど、柳吉りゅうきちは息いきも苦くるしげに、柳りゅう「ア、イタ、ゝ、ヲ、苦くるしい。胸むねがつきあがるやうでヲ、せつない。ア、どうも死ぬしぬさうだ。ト五體ごたいをくるしめ身みをもがくを種々いろいろと介抱かいぼうし、直ちよく「柳りゅうさんく、氣きをしつかりとしておくれヨ。何様どうしたらよからう。何なんぞ藥くすりがあるかねへ。柳りゅう「インニヤ最藥さいやくは去日きつの道中みちぢゆうで、不殘服ふざんのんで仕し

まつたから何も無い。どうぞ水を一口呑してもらひ度か水はあるまいノ。直「水かへ。ト近邊を
 看まはし、直「こゝには水は見えないけれども、谷川か瀧の音か聞へる様だから、たづねて見や
 うネ。柳「左様か、それでも汲ものがあるまい。そして瀧壺か川へ落るとあぶないノウ。トいは
 れて少し當惑せしが心付、直「アノウお前の手拭ひが新らしいから、手拭へ水をふくまして持て
 來やうか。トいふ中彌増病ひのくるしみ、返事もならぬその風情。おどろき周章で詮方なく水音
 するべに荊蘇をわけつゝ峠を這下る。そのあやふきもわすれてや、男の爲と氣をばげまし、谷の
 方へぞ下りゆく。跡には獨居柳吉が、氣も絶々に倒れたる路の草はらたどり來る一個の旅僧。放
 心と草に臥たる柳吉につまづきて立止り、●「ヤア何だ往來の眞中に寐て居るといふが在ものか
 コレ旅人酒に酔たのか、急病でなやむのか。ト木の間の月にすかし眺め、●「コレサ旅人。ハ、
 ア急病だナ。ヤレ／＼不便なことだ。ドレ／＼たすけてやらざアなるまい。ト立よりて夢中にひ
 としき柳吉の、左右の脈をしばらくみて、●「ハテこれは困つたものだ。餘程むづかしいはへ。
 此草中で冷てはならぬが、イヤ／＼向方に古社が見えるあそこへ連れて往て療治をしてやらうか。
 ト獨言をいひながら柳吉を引起して肩にかけ、彼小社へ伴ひ入、藥をあたへ介抱なす。是の
 出家は旅僧ならで、世に仁術を施し山家田舎の果までも病苦の者を救はんと鎌倉を立出て、諸國

に順行して今漂然と、夜路をたどりて武藏の方へおもむかるゝ途中なりしは柳吉が仕合にて、ま
 た後々まで奇談あり。かゝりし節にかのお直は、やうやく谷へ下りゆき手拭へ水をしめして、藤
 づる葛にすがりつゝ、しめせし水を漏さじと心をせかしのほり來て、以前の所へ立より見れば、
 柳吉のかげもなく、菅の小笠の捨てありとはふしぎやと、近邊をたづねまはれど知れざれば、さ
 すがに弱る女氣の、ものおそろしくも悲しくなり、他人のたすけて他の所へ連れて行しと、悟るべ
 き事にあらねば疑ひおこり、息さへ吐に苦しがる大病なるに何所へか身を動かす事なるべきか、
 虚病をかまへて此身を退け、其跡にて逃ゆきしものならんか。もしやそれにてあるならば、いか
 がはなさん何とせんと、涙の聲にて悲しげに、直「柳さん／＼引、柳吉さん引。トよぶ聲木精に
 ひどきつゝ我呼聲も物すごく、身をふるはして行む所へ、いきせき來る人ありしが、お直の側へ
 すか／＼來りてさし覗き、「イヤアお直さんの。ヤレ／＼／＼能所で追付た。トいはれてびつ
 くりおどろくお直、男の顔をうち眺め、直「ヲヤ宗八さんかへ、何様してマア。宗「どうして所
 か鎌倉へ行て、彼地の衆をお俱をして歸ると、お前が家内をかけたさといふさわぎを聞て、直
 に後から追缺てやう／＼とこゝまで來たが、なか／＼此邊で追付うとは思ひよらねへ。イヤ何は
 柳さんは何様したのだへ。直「サアその柳さんは、今までこゝに急病で倒れてお在だから、清水

を波で上やうと、谷へ下たひまに何處へか往てお仕まひだから、途方にくれて、宗「イヤそりやア合點のいかねへ事だ。何にしてもマア此山中に左様して居た所がつまらねへ。まづ家内へお歸んなさるがい。大事の一人體を輕々しくする事があるものかね。直「それでも柳さんが實正の病氣で何様かしたのならば、捨て置いて私が先へ歸つては、不實な仕かたといはれるぐらゐはかまはないけれど、眞實苦勞になつてどうも此處をこの儘には。宗「ハテそれは無理もなし、また柳吉さんもなか／＼にお前を途へ捨てゆくなんぞといふ、其様な不實をする人ではない。何かこれには入組だ理があらうとも、今は仕かたがないから、何れ明日また私が此處へ來て柳吉さんの身の上は是非たづね出して連て歸るから、マア今夜は家内へお出なせへ。直「それでも何だか柳さんの事が苦勞になつて、宗「サア左様でもあらうが、月は雲にかくれてくらくはなるし夜は更るし此處にまご／＼して居てまた何ぞ間違が出来てはならねへ。何でもマア私がいふことを聞いて、一旦家内へお歸んなさい。ハテお前の了管通りになる様にして上るから、柳吉さんの事もわりいやうにはしないから。ト無理にお直の手を引て湯本の方へ歸りゆく。さてまたこゝに柳吉は介抱する人ありぞともしらぬ程なる苦痛にて、彼古社に寐入しが、痛を忘れ目を覺し、四隅を見ればお直は不居、名月もりて物すゞく、渺々たる廣野となり、天地須叟震動なし鐵城高く顯はれ、

鐵の網を四方に張、東西に二ツの大門有、その門に金字の額をかけ一方は森羅法場と書き、一方は大放火寺としたり。この節一人の出家顯はれて柳吉に向ひ、出家「いかに柳吉、眼を定めてよくあれを見よ。すでに其方は死して此の界にいたりしぞ。あの城こそ閻魔王の法場の森羅殿なり。いで／＼三業をさます爲に伴ひてくはしく知らせん。よく見聞して穢土にかへり、他にも示しその身をも慎みて後生善所の發願をなせ。われは其方の父母達に信ぜられたる子育の法師なり。依之梅吉の母といひ梅吉が願ひの切なるに捨がたく、佛智力をもつて司命星に令し、招魂鬼を勞し、冥官等に下知をなし、其方と梅吉の壽命を延蘇なさしむるぞと、これより杖にすがらせて彼鐵城門の中へ伴なひ給ふゆゑ、柳吉は法師の袖に半身をかくし、おそろしく城門に入て看ば多くの牛頭馬頭の鬼ども鐵の棒をもつて罪人を追たて、理非斷申明處にいたる體相より、一百三十六地獄、身の毛もよだつおそろしさ。兒女子よく見て善に進み、惡を慎み給へかし。時にはるかに向方より一人の女を引立て、角を振立たる黒鬼が、さもいかめしく叱りながら漸々に近づくを見れば、今まで責られて居たる者とおもはれ、年わかき女なれども苦痛に絶兼てやせおとろへ、雪より白き素足より血を流して歩行かねるを、情なくも追立／＼、理非斷のかたへとつれゆくをよく／＼看やれば、こはいかに東に有ける梅吉なりければ、柳吉はおどろきし聲

を立呼んとすれども聲出ず、引かへさんと立かゝれば、忽ちに炎の方向へ引立ゆけば悲しさいはん方ぞなき。

第二十四章

さても柳吉を伴なひ給ひし法師は、六神通を得たる大徳にてや在しけん。いと恐しき地獄中を飛行自在の術をもつてか、足下に紫雲を踏でやうくと廻りて因果應報の理りをしめし、今閻魔王の帳前にいたる。そもく地獄の體相といふは、閻魔王の宮より東の方に當つて不斷炎の立昇り、黒雲天にふさがりて震動地をふるはし、陰々とし世界あり、是ぞ八大地獄といふ。南閻浮提の下三萬二千由膳那を過て、第一が等活地獄、第二が黒繩地獄、第三が衆合地獄、第四が叫喚ぢごく、第五が大叫喚、第六には焦熱ぢごく、第七が大焦熱、第八番を無間地獄といふ、これ則八大地獄なり。此地獄に一々別れたる地獄十六づゝ有によつて、一百三十六地獄となる。ことくく記すにいとまなし。されば柳吉は身の毛もよだつおそろしさに觀念して、法師の衣の袖にすがりて、閻魔王の廳前を看下せば、獄司、僚官、司録、記神、羅刹冥官、俱生神すべて罪人のことをとり扱ふ役神左右につらなり、多くの鬼ども夫々の役を守る。また閻魔王を第一として、秦廣

王、初江王、宗帝王、五官王、變生王、泰山王、平等王、都市王、五道轉輪王その席を正しく相並ぶ。

因にいふ閻魔王は十王の中にて第五番目にあたる王なれども、威光嚴重才智拔群なるゆゑに惣王とは成しとぞ。

かくてまた大王の御前左の方淨琉璃の鏡、右の方業の秤を備へある。其前において司録の官人は帳面をひらきて梅吉に向ひ仰せらるゝ様は、宣いかに梅吉。其方すでに病難によつて魂體をはなれて爰に來れども、母親お秋が信心力の功德により、再度故郷へ歸しつかはずぞ。蘇生の後には心を正しくなして後生をおろそかにいたすな。且また娑婆において夫婦の因縁深からず、それゆゑに柳吉と子までなしたる中なれども、同席に安座する事ならず。今猶心はたがひにはなれねども、身は隔りて東西にわかれてあり。そのみならず前生の縁によつて柳吉はお直といふ本妻、其方より後になじみて縁深し。かならず嫉妬して罪をつくらず、只柳吉と縁を切ざるやうに願へ。是やくそくごとにして他を恨む道理なし、さればとて柳吉も其方を鹿略にする心はたえてなきものなり。この類の事は其方ばかりにあらず秀八といふ女も彌三郎と縁を結びながら、夫婦とはなり難し。後より彌三郎に急難を救はれたるお君といふもの本妻となるべし。其方既に産た

る子を頼むほどの中、姉妹同様の秀八なれば、娑婆にかへつて再會の節これを告て彼秀八にも嫉妬の念を起すなと意見せよ。ト言わたし、夫より淨玻璃の鏡に向はせ、箱根山中において柳吉お直などが始末ことく手にとるやうに見せられければ、梅吉はたしなみながらも悲しくなり、又怨みをも言んとする節、柳吉は法師の衣の袖の影よりはしり出で、「ヤヨ梅吉。ト聲をかすれば、忽然として地獄のさまは消失せ、湯坂峠と思ひし旅にもあらで、湯本の家にいづ歸りしか知らず。夜具をもつて身をつまれば其傍には見しらぬ出家、お直宗八等がとりまいてありけるゆゑ、さらに不審のはれやらず、眼はひらけども我身の生死夢現のさかひを悟ることあたはず、忙然として言葉なし。

是は何故にかくの如くなりと尋れば、彼宗八がお直を湯坂峠よりつれて其家に戻り、翌日また時にいたりて柳吉をたづね、妙見堂の内にてしらぬ法師に介抱せられて死人のやうになりし處を、法師の教へによつて其體を動かさず、此所に寐かし置、法師の柳吉に與へし神仙の妙藥第三日めにいたりて蘇生のおもむきなれば、教への如くして今三日めなれば異僧と俱に家に連歸り、床の中に伏しめ置たる所に、只今はじめて蘇生せしゆゑ疑ひおもふも道理ならずや。さてまた夢の中に見たる地獄の段に司命星のこと、法師の助を思ふに、妙見堂と

いひ子育地藏といひ符合すること有が如し。そもこの藥を與へし法體の人は地藏尊の化現にてはあらざるか、三日の間死入し柳吉が地獄へいたりしを、慈愛ありし法師はかならず地藏尊の神通ならん。されば夢にして夢ならず、ふしぎといふもおろかなるべし。且又ついでにいふ彌三郎が梅吉に服せし妙藥も、此異僧が施したる藥と推量し給へかし。亦曰人情本には流行ならぬ著風なれども教訓の一助と畫のおもしろかるべきことをはかりて、古風なる地獄のさまを夢にことよせて因縁による男女の中を悟し、嫉妬の禁となすものなり。

爰にまた婦多川の中島丁には、梅吉が母お秋が愁歎言ふも盡す、不審ながらも秀八が實意にまかせ孫を頼み、彌三郎の教へにしたがひ、覺束なくも絶果し娘の死骸を其儘にまだ存命といふ様にとりはからへど、隣家では死だる節をしる故に、長家のものは寄こぞり、
 ●「ライ／＼お猫さん／＼、お前の隣ぢやア何様した。佛さまを片付る支度をしたかノ。
 ▲「イ、エまだ／＼梅さんの母御さんに聞ば、死切は仕ないと言て居るヨ。
 ●「へん魔でもさして動かかしらねへが、煎豆に花は咲とも梅吉さんが蘇生てたまるものか。全體一昨日の夜中に死ぬさへ生延たんだアナ。×「左様サのふ。母の丹誠と梅女の存生といふ一念でばかり保て居たのだらうヨ。
 ▲「何にしても氣味がわりいノウ。×「なぜだへ。
 ▲「なぜとお言だが、死ぬ節に中裏へ幽霊になつて出たとい

ふから。●「エ、實正か。誰が左様言た。▲「ア他に聞たのではないヨ。梅女が死んだといふ翌日、中裏から使が来てはなすのを聞たはネ。それにまた秀八とかいふ唄女衆が里乳母を連れて来て、梅吉さんの産だ赤子をつれて往てしまつたヨ。●「アアニサ其唄女衆が梅さんの幽霊に頼まれたとヨ。×「うそらしい咄だノウ。又實説ならばこわい事た。●「はやく葬禮をしてしまへばいゝのふ。中裏へ幽霊になつて往た位ぢやア、長家内へは猶出勝手だから否だのふ。×「それだつて何も此方等に恨みがありやア仕まひし、出る理がねへ。▲「アヤヤそれでも何ぞ頼みに出るかもしれないヨ。●「アア何にしろ大屋さんのお内儀さんに、左様いはふではないかね。×「何を左様いふのだへ。●「アレサ弔れへのことを催促しようぢやアないか、ばか／＼しい死だものを幾日も宅へ置といふ事が、何國にあるものか。×「アヤそれでも漢土では百ヶ日まで宅へ置とサ。私の親父さんが本に書てあるのを見てはなしたは。●「左様か、お前の親御さんは講釋や本が好きだなふ。▲「そりやアいゝが、私はとなり合て居るから一倍こわいヨ。今夜ア何處ぞへ宿借に往うヤ。●「へんうまくいふぜ。こわいと偽て情人の所へ往うと思つてから、何ぞ奢ねへと尻をわるぜ。▲「アヤうそぢやアないヨ。實正にこわいから日のくれるのが物思ひだは。×「日がくれるといへばモウ油賣さんが來たヨ。▲「否だのふ。モ

ウ日のくれるに間がないねへ。●「ドレおいらも夜食の支度を仕様か。×「わたしも宅へ往う。▲「わたしも歸らう。トわかれ／＼に長屋中、噂も仕あきて家内に入る。彼梅吉の母親は、彌三郎にすゝめられて用ひし薬もはや三日、日限立て今日とてもなかく蘇生の風情もなく、既に其夜になりければ、悔しきほどの悲しみにて覺束なくもこの三日、もしやと頼みし薬のきどく、愚痴としりつゝ幾度か娘の枕によりそへど、さらにかはりし事はなく、氷にひとしき額の所へあつき涙を落しつゝ、今は兎てもとあきらめて佛間へてらす燈明もかすむは老の眼の癖か。なくなく珠數をくり言の、返らぬ歎き終夜、つきぬ名残の惜みても、くどき立ても甲斐ぞなき、者の傍へにつかれ果、通夜も怠る力なさ。假寝すれば梅吉が常にかはらぬ風情の夢、覺れば悔しき亡人、もし蘇生て居もするかと、迷ふ心の亂るゝごとく、夢と現に幾度か生死流轉の浮沈み、隣近くなる頃にまたうと／＼と寝入しが、耳の傍に娘の聲、梅「アヤ柳さん、お前もこゝへお出か。アレサ柳さん／＼引。ト言聲きいてお秋ははね起き、あたりを見まはし、また夢かとおもひながらもさし覗く、娘の顔の色艶直り母の貌をしづかにながめ、梅「母人さん、私やアまた悲しい夢を見たヨ。秋「エ、お前はマア實正に蘇生たのかへ。トさすがに親の身ながらも嬉しき中のおそろしく、こは／＼娘の手をとつて見れば、いつしか氣血のめぐり熱氣を生じて、脈の通ひもたし

して、種々の苦勞人が多いから其筈でも有ふか。しかしお前は其様に他を歩行たこともなく、其所に氣が付て居るのは感心だ。是まで誰が教訓だか知らねへが、考へて看と油断はならねへ。秀「アレまた其様なことをお言だヨ。私が一人で其氣の付たといふのではないかネ。去頃もお時さんが苦勞人だから、過た時分の話をおしだから、それで成程と思つたんだはネ。エそりやア左様と、私きやア最う行ふかネ。彌「ナゼまア宜ぢやアないか。昨日あの通り親方の許へも勘定を立つて、利の付様にして、別に置いて貰ふ積りに相談の調のつた身分だから、其様に氣兼ねすることもあるめへ。秀「そりやア左様だけど、家が出来て極つた上はいゝけれども、まだ左様もしない中から、勝手に遊び歩行て居る様にすると、衆人の口がやかましいから。彌「それぢやア早く歸んねへ。おゐらも家を早く拵へて安堵してへけれど、よく考へて見なせへ。お前の鹽梅の悪かつた騒ぎから、中島町の手當や、赤子を引取て、此裏の内儀さんに頼むまで、三方四方のことを一度にするのだものを、左様は手が廻るめへぢやアねへか。それに中島町へ往て、梅吉さんの様子も聞てやらねへぢやアならないが、其間もねへくらゐだア。お前が目を廻して一日氣をもませて、翌日が梅吉さんの家へ行相談。それから今日へかけて日數をかけて見な、たつた五日にしかならねへ。全體昨日梅吉さんが蘇生か、いよゝ死にきるかする日だから、是非往んだけれども、往ねへく

らゐだのに、何様して家までさうはやく出来るものか。秀「アレサ私きやアその氣で言はしないヨ。何だのかだのと、お前にばかり世話をかけて、急に金をいかひこと遣はせて、私の家を今に今にこしらへてなんぞと、其様な我儘をいふものかねへ。私が手間を取らず歸らうと言たのは、後日へよつて家の出来るまで他に憎まれてもわるし、又自前になつて活業には、猶さら他に上手を遣つて置かねへと、評判を悪くされる基だから、傍輩突合をよく仕様と思つてのことサ。何を言もお前の機嫌にそむいては益もないことだから、モウ歸らずに此家に居ませうヨ。彌「其氣ならいゝから、早くマア歸んな。秀「イエ私きやアモウ何處へも往ないヨ。彌「また其様な事を言つてすねるヨ。此家だつても、今にお時さんの留守居が歸つて来るし、おゐらは梅吉さんを見舞に往なければならねへはナ。秀「ヲヤ何だとへ。今もそんなことをお言ひだが、私きやア放心聞て居たヨ。梅吉さんは最うお寺へやられて仕まつたらうのに、見舞に行とはなんのことだねへ。彌「イヤ成程、是は尤だ。不思議なことと思ふだらうが、今におゐらが中島町へ往て來ると譯が分らア。マア何にしてもお前は早く歸るがいゝ。秀「私きやア否。彌「ナゼ否だ。秀「イエ今夜なんぞは、お前の情人とお時さんが、温泉から歸つて來るかも知れないから、最歸らずに居ませうヨ。彌「ナニ誰が其様なことをいつて聞せた。秀「誰でもよいヨ。その位なことを他が言ねへ

からと言つて、知らずに居るものかねへ。隠さずとよいはネ。彌「成程、何でも先ツくどりをするぜ。あの娘の事は先達もいふ通り、秀「可愛くつてならないから湯治にお時さんを付て遣つたのかへ。寔に大事だねへ。彼娘もさぞ嬉しからう。羨しい。彌「コウお前もさう依古地にものをいはねへでもいゝぢやアねへか。たとへマア自己がああ娘を可愛がるにした所が、女房に見かへて、萬事を世話をするといふことは出来ねへ。秀「ヲヤ私が何も、御内室さんの様にならうとは最初ツから言はしないはネ。それだから以前に御内室さんの前が悪くはありませんかと言つたらば、ナニ女房はまだ持はしないとお言ひぢやアないかね。今になつて女房に見かへる事は出来ねへの、何のと言はずともよいぢやアないか。彌「エ、引わりい聞様だ。最初には女房もなかつたが、今では秀八といふ女房があるから、他の女を女房の様に世話をする事は出来ねへと言ふんだアナ。わからねへか。秀「嘘をおつきな。其様な嬉しからせる事をお言ひでも、アノお君さんとやらいふ可愛らしい嬢にはかなはないから、私きやア唯始終打捨てしまはれさへ仕なければよいヨ。此間もそれだから、辨天様へ御願をかけて、玉子と蒲焼を三年斷物にして、どうぞお前に捨られなう様にと拜んで居ますヨ。彌「そいつは大變な品を斷たノウ。それぢやア何よりか不自由だぜ。今に住居でも出来て朝晩同居になつた日にやア。其様ものを第事にしねへと、が。秀「ヲ

ホ、可笑ねへ。お前こそお君さんで、ら、補ひの薬でもお上りなねへ。私きやア、彌「身の勞れる氣骨も折ねへといふのか。實のねへ言様だノ。秀「何とでもお言ひ、今に私も梅吉さんの様に、お前の事を苦勞にして死んでしまうから、其時になると實が知れるはねへ。彌「また氣障をいふヨ。他の情人の死んだのせへ苦勞にして、救ふ氣になるものが、女房に其様なことをいはれてたまるものか。マア機嫌よく歸んねへ。自己ア梅吉さんの所へ往て、明日また午時過に來るから。秀「ヲヤ、梅吉さんの所へ何んにお出だ。あの嬢の死んだのは嘘かねへ。彌「ナゼ嘘だ。秀「それでもお前が梅吉さんの所へ往たがるからサ。彌「イヤハヤ呆れた嫉妬だ。其身が自己に頼んだ女ぢやアねへか。姉妹分で寔に實を盡し合た中で、殊に死でも後を頼むほどだからと言つて、あの嬢の出産だ兒を引とつて育てたいといふ位で、つまらないことを言ひなさんな。秀「イエそれでもお前が其様な氣だからどうかして梅さんを蘇生せて、情人になるのではないかへ。彌「アハ、何ほ愚痴を言つて自己を困らせてへと思つても餘りだ。いかに惚た女だからといふても、死だのを蘇生らせて情人になるとはなんの事だらう。此方が魔法でも行ひはしまし、其様に自由が出来るものか。いゝかげんに馬鹿言ひな。殊に依りやア梅吉さんが出産だ赤兒の母人にもなる身で居ながら、お前が小兒の様だア。秀「よいヨ、馬鹿でも。どうで私きや

ア小兒の様だから、發明な嬢にはかなはないから。彌「エ、此嬢アよく無理をいふ嬢だア、乳で

秀「アレサ、マア老母さんが。トいふ所へ、乳母「サア最宅へ這入つて寝ようねへ。ト赤子を抱て歸り来る。

是は梅吉の産だる赤子にて、乳母は此長屋の者なりしが、彌三郎の計ひにてお時の留守居を頼みし女が、四五日以前急に用事が出来て、田舎へ行しゆゑ、乳母を直に留守居とは頼みしなり。

彌「エ、氣のきかかねへ。秀「ヲホ、、、それだから先刻から、彌「先刻から何様した。秀「早く歸らうと言つたんだはねへ。ヲホ、、、。ト笑ひながら、、、直して、秀「モウ今夜アお出でないのだネ。彌「夫だつても用が種々あるから、此方ばかりも居られねへやアナ。秀「それだからモウお出ぢやアないかと聞たのサ。彌「ナゼそんなに極て置のだ。何ぞ能ことがあるのか。秀「知らないヨ、憎らしい。そんな氣だと苦勞はしないはネ。里母「アハ、、、餘り和合のもうるさい

様でございますねエ。秀「ナアニ中がよかアないヨ。何かにやさしくしてお呉の癖に、不斷は意地がわるいヨ。彌「なんの其方が意地をわるくして、他を困らせる癖に。秀「ヲヤ私が何を意地のわるい事をしたんだねへ。彌「ナニ意地のわるくねへことがあるものか、今の通りだア。秀「ヲホ、、、をかしいねへ。彌「ナニをかしいものか。明日来てひど、、、てやるから覺悟して居ねへ。秀「ア、お前も覺悟して來ておくれ。彌「モウどうぞ御免なさいましといひなさんな。秀「ヲホ、、、ドレ早く往ふや。里母「アハ、、、餘り早いこともありませう。モウ今に戌刻でございますせう。彌「ヲヤさうか。ドレそんなら急いで往ふ。ト二人は同道に門口を出る所へ、夜商人「濫かで美味お豆腐でございます。「奈良茶よろしう。

第二十六章

儲もお時お君は彌三郎の手當に不足なく、宗八と共に箱根の湯本正右衛門の許へ至りし所、瀧次郎は思の外病氣全快して、飛脚の話とは大違ひなれば、いと怪しけれども悦びの餘り宗八をとがめもせず、嬉しさいはん方もなき。中に其家の娘お直といふもの、情有ある男と家出をせしめて混雑とりくくなるゆゑ、まづ暫時休足して、温泉にもかゝらずありける所に、其夜宗八がお直